

# 常磐自動車道遺跡調査報告51

小池田遺跡（1・2次調査）

戸鳥土遺跡

切付遺跡

片倉遺跡



## 序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通し、現在は富岡～相馬間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しており、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成18年度から19年度に行った南相馬市の小池田遺跡と平成19年度に行なった南相馬市の戸鳥土遺跡・切付遺跡・片倉遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料となり、さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に御活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、南相馬市教育委員会、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成20年11月

福島県教育委員会

教育長 野 地 陽 一



## あいさつ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

常磐自動車道建設にかかる埋蔵文化財の調査は、平成6年度から実施しています。南相馬市に所在する埋蔵文化財については、平成9・10年度に分布調査を、平成15年度から試掘調査を実施し、平成16年度からは発掘調査を開始しました。

本報告書は、平成18年度に発掘調査を実施した小池田遺跡（1次調査）と、平成19年度に発掘調査を実施した小池田遺跡（2次調査）、戸鳥土遺跡、切付遺跡、片倉遺跡の調査成果をまとめたものです。

小池田遺跡では、縄文時代前期前葉・中葉の土器・石器・石製品や、前期前葉の竪穴住居跡などが発見されています。戸鳥土遺跡からは、平安時代の竪穴住居跡、中世の溝跡や塚跡などが発見されています。切付遺跡からは縄文時代の落し穴状土坑など、片倉遺跡からは平安時代の竪穴住居跡が発見されました。

今後、これらの調査成果を郷土の歴史研究の基礎資料として、さらに地域社会を理解することや生涯学習の場で幅広く活用していただければ幸いです。

おわりに、この調査に御協力いただきました南相馬市並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当事業団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年11月

財団法人 福島県文化振興事業団

理事長 富田 孝志



## 緒 言

- 1 本書は、平成18、19年度に実施した常磐自動車道（相馬工区）遺跡調査の発掘調査報告である。
- 2 本書には、平成18年度に実施した常磐自動車道（相馬工区）遺跡調査のうち、南相馬市原町区に所在する小池田遺跡（1次調査）と、平成19年度に実施した常磐自動車道（相馬工区）遺跡調査のうち、南相馬市原町区に所在する小池田遺跡（2次調査）・戸鳥土遺跡・切付遺跡・片倉遺跡の調査成果を収録した。
- 3 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し、調査・報告にかかる費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
- 4 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部の次の職員を配し調査にあたった。

平成18年度

副 主幹 安田 稔 文化財副主査 笠井 崇吉  
嘱 託 佐藤 洋（平成19年3月まで現職）

平成19年度

副 主幹 吉田 功 文化財副主査 阿部 知己  
嘱 託 堤 仙匡（平成19年3月まで現職） 嘱 託 今野沙貴子  
嘱 託 鈴木裕一郎（平成20年3月まで現職）

- 6 本書の執筆にあたっては、平成19年度に調査を担当した調査員が分担して行い、文責は章・節末または文末に示した。
- 7 本書に掲載した自然科学分析は次の機関に依頼し、年代測定と樹種同定の結果は付編に掲載した。石質鑑定の結果を参考にし、実測図面に示した。

炭化材の年代測定 株式会社加速器分析研究所  
樹種同定 株式会社パレオ・ラボ  
石質鑑定 株式会社バリノ・サーヴェイ

- 8 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図を複製使用したもので、出典を図右下に記した。
- 9 引用・参考文献は執筆者の敬称を省略し、各編ごとにまとめて掲載した。
- 10 本書に収録した遺跡の調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 11 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の機関から御指導・御助言をいただいた。

南相馬市教育委員会 東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所

## 用 例

1 本書の遺構実測図の用例は、次のとおりである。

- (1) 座標値 4遺跡の座標値は、すべて世界測地系で設定した。
- (2) 方位 図中の方位は、表記がない遺構図は、全て図の真上を座標北とする。
- (3) 縮尺 掃図のスケールは右脇のカッコ内に示した。原則的には、竪穴住居跡・木炭窯跡・柱列跡は1/60・1/40縮尺、土坑・集石遺構・焼土遺構は1/30縮尺、溝跡は1/60縮尺で採録した。
- (4) ケバ 遺構内の傾斜部はⅢの記号で表現し、相対的に緩傾斜の部分はⅣで表現した。また、後世の搅乱部や人為的な削土部はⅤの記号で表現した。
- (5) 土層 遺構外堆積土はローマ数字でⅠ・Ⅱ…、遺構内堆積土は算用数字で1・2とした。土色については、『新版標準土色帖 22版』(小山正忠・竹原秀雄編著1999日本色研事業株式会社発行)を基準とした。
- (6) 線種 実線は上端・下端・搅乱範囲・調査区間を示す。  
破線は推定線・抉り込み線・摺形を示す。その他の場合は、用例を掃図中に示した。
- (7) 標高 海抜高度を示す。
- (8) 網点 遺構に関する網点等の用例は、掃図中に示した。
- (9) ピットの深さ ピット番号の( )内には、検出面からの深さを「cm」で示した。

2 本書における遺物実測図等の用例は、次のとおりである。

- (1) 縮尺 掫図のスケール右脇に表示した。原則的には、土器・土製品を1/2・1/3・1/4縮尺、石器を1/2・1/3・2/3縮尺、拓本を2/5・1/3・1/4縮尺で採録した。  
捲図中に、2個以上スケールがある時は、掲載点数の少ない対象遺物番号をスケール右下に示した。
- (2) 遺物番号 遺物は捲図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば、図1の2番の遺物を「図1-2」とし、捲図中では「1図2」とし、写真図版中では「1-2」と表示した。
- (3) 遺物註記 出土グリッド、出土層位は遺物番号の右脇に表示した。
- (4) 計測値 計測値・石質は各実測図脇に表示した。( )内の數値は推定値、〔 〕内の數値は遺存値を示す。
- (5) 遺物断面 粘土積上痕は一点鎖線で表記した。胎土に植物纖維を混和する土器は、断面に「▲」印で示した。
- (6) 網点 遺物に関する網点等の用例は各捲図に示した。

3 本文中で使用した略号は次のとおりである。

南相馬市	- M S C	小池田遺跡 - K I □	戸鳥土遺跡 - T T □
切付遺跡	- K T	片倉遺跡 - K K	グリッド - G
遺構外堆積土	- L	遺構内堆積土 - 1	竪穴住居跡 - S I
木炭窯跡	- S C	土坑 - S K	集石遺構 - S S
焼土遺構	- S G	溝跡 - S □	柱列跡 - S A
特殊遺構	- S X	小穴 - P または G P	

# 目 次

## 序 章

第1節 調査の経緯	1
第2節 遺跡の位置と自然環境	5
第3節 歴史的環境	6
第4節 調査の方法	7

## 第1編 小池田遺跡（1次調査）

第1章 調査経過	13
第2章 遺構と遺物	14
第1節 遺構の分布と基本土層	14
第2節 製文土器の分類	15
第3節 土坑	17
1号土坑(17)      2号土坑(17)      3号土坑(18)      4号土坑(18)	
5号土坑(18)      6号土坑(19)      7号土坑(19)      8号土坑(19)	
9号土坑(23)	
第4節 集石遺構	23
1号集石遺構(23)      2号集石遺構(24)      3号集石遺構(24)	
第5節 焼土遺構	26
1号焼土遺構(26)	
第6節 特殊遺構	26
1号特殊遺構(27)      2号特殊遺構(27)      3号特殊遺構(27)	
第7節 遺物包含層	28
遺物の出土状態(29)      土器(30)      石器・石製品(44)	

## 第2編 小池田遺跡（2次調査）

第1章 調査経過	63
第2章 遺構と遺物	64
第1節 遺構の分布と基本土層	64
第2節 出土遺物の分類	67
第3節 積穴住居跡	67
1号住居跡(67)      2号住居跡(77)      3号住居跡(79)      4号住居跡(81)	

第4節 土 坑	82		
11号土坑 (82)	12号土坑 (83)	13号土坑 (83)	14号土坑 (83)
15号土坑 (84)	16号土坑 (84)	17号土坑 (85)	
第5節 木炭窯跡	88		
1号木炭窯跡 (88)	2号木炭窯跡 (89)		
第6節 遺物包含層	91		
遺物の出土状態 (91)	土 器 (93)	土製品・羽口 (105)	石器・石製品 (105)
第3章 ま と め	114		
遺物について (114)	遺構について (115)		
<b>第3編 戸鳥土遺跡</b>			
第1章 調査経過	137		
第2章 遺構と遺物	138		
第1節 遺構の分布と基本土層	139		
第2節 積穴住居跡	140		
1号住居跡 (140)			
第3節 土 坑	144		
1号土坑 (144)	2号土坑 (144)	3号土坑 (145)	4号土坑 (145)
第4節 塚 跡	147		
1号塚跡 (147)			
第5節 溝 跡	147		
1号溝跡 (148)			
第6節 遺構外出土遺物	150		
遺物の出土状態 (150)	遺 物 (150)		
第3章 ま と め	151		
<b>第4編 切付遺跡</b>			
第1章 調査経過	163		
第2章 遺構と遺物	165		
第1節 遺構の分布と基本土層	165		
第2節 土 坑	165		
1号土坑 (167)	2号土坑 (167)	3号土坑 (167)	4号土坑 (168)
5号土坑 (168)	6号土坑 (168)	7号土坑 (168)	8号土坑 (169)
9号土坑 (169)	10号土坑 (169)	11号土坑 (170)	12号土坑 (170)

13号土坑(170)	14号土坑(173)	15号土坑(174)	16号土坑(175)	
17号土坑(175)	18号土坑(176)	20号土坑(177)	22号土坑(177)	
24号土坑(178)	25号土坑(178)	27号土坑(178)	28号土坑(179)	
第3節 柱列跡.....				178
1号柱列跡(183)		2号柱列跡(183)	3号柱列跡(184)	
第4節 溝跡.....				184
1号溝跡(184)				
第5節 小穴群.....				186
小穴群(186)				
第6節 遺構外出土遺物.....				187
遺物の出土状態(187)		遺物(187)		
第3章 まとめ.....				191

## 第5編 片倉遺跡

第1章 調査経過.....				201
第2章 遺構と遺物.....				202
第1節 遺構の分布.....				202
第2節 基本土層.....				203
第3節 積穴住居跡.....				203
1号住居跡(203)		2号住居跡(205)		
第3章 まとめ.....				206

付編1 福島県南相馬市小池田遺跡・戸鳥土遺跡・切付遺跡出土炭化材・木炭の放射性年代測定結果.....	211
付編2 福島県南相馬市小池田遺跡・戸鳥土遺跡・切付遺跡出土炭化材・木炭の樹種同定結果.....	215

# 挿図・表・写真目次

## 序 章

### [挿 図]

図 1 常磐自動車道位置図	1
図 2 遺跡周辺の環境	5

## 第1編 小池田遺跡（1次調査）

### [挿 図]

図 1 小池田遺跡調査区位置図	13
図 2 造堀配置図	14
図 3 基本土層	16
図 4 1～3・7号土坑	20
図 5 4～6・8・9号土坑	21
図 6 土坑出土遺物（1）	22
図 7 土坑出土遺物（2）	23
図 8 1～3号集石造堀、出土遺物	25
図 9 1号焼土造堀	26
図 10 1～3号特殊造堀、出土遺物	28
図 11 グリット別出土土器点算	29
図 12 遺物包含層出土 I群土器	33
図 13 遺物包含層出土 I群 3類土器 II群 1・2類土器	34
図 14 遺物包含層出土 II群 3類土器（1）	35

### [写 真]

1 調査区全景	55
2 基本土層、土坑	56
3 土坑、集石造堀	57
4 集石造堀、焼土造堀、特殊造堀、 遺物包含層	58

## 第2編 小池田遺跡（2次調査）

### [挿 図]

図 1 造堀配置図	64
図 2 基本土層	66
図 3 1号住居跡（1）	68
図 4 1号住居跡（2）	70
図 5 1号住居跡出土遺物（1）	71
図 6 1号住居跡出土遺物（2）	72
図 7 1号住居跡出土遺物（3）	73
図 8 1号住居跡出土遺物（4）	74
図 9 1号住居跡出土遺物（5）	75

### [挿 図]

図 3 周辺の遺跡	8
図 15 遺物包含層出土 II群 3類土器（2）	36
図 16 遺物包含層出土 II群 3類土器（3）	37
図 17 遺物包含層出土 II群 3類土器（4）	38
図 18 遺物包含層出土 II群 3類土器（5）	39
図 19 遺物包含層出土 II群 3・5類土器	40
図 20 遺物包含層出土 II群 4類土器	41
図 21 遺物包含層出土 II群 5類土器	42
図 22 遺物包含層出土 III群 2・3類土器	43
図 23 遺物包含層出土 III群 4類土器	44
図 24 遺物包含層出土石器（1）	45
図 25 遺物包含層出土石器（2）	50
図 26 遺物包含層出土石器（3）	51
図 27 遺物包含層出土石器（4）	52
図 28 遺物包含層出土石器・石製品	53

5 出土遺物（1）	59
6 出土遺物（2）	60

図 10 1号住居跡出土遺物（6）	76
図 11 2号住居跡	78
図 12 2号住居跡出土遺物	79
図 13 3号住居跡、出土遺物	80
図 14 4号住居跡	81
図 15 4号住居跡出土遺物	82
図 16 11・12・14号土坑	85
図 17 13・15号土坑	86
図 18 16・17号土坑、土坑出土遺物	87

図19	1号木炭窯跡	89
図20	1号木炭窯跡出土遺物	90
図21	2号木炭窯跡	90
図22	グリッド別出土土器点数	92
図23	遺物包含層出土Ⅰ群1~3類土器	95
図24	遺物包含層出土Ⅰ群2・4類土器	96
図25	遺物包含層出土Ⅰ群3・4類土器	97
図26	遺物包含層出土Ⅱ群2類土器(1)	98
図27	遺物包含層出土Ⅱ群2類土器(2)	99
図28	遺物包含層出土Ⅱ群3類土器(1)	100
図29	遺物包含層出土Ⅱ群3類土器(2)	101
[表]		
表1	小池田遺跡出土石器・石製品の石材組成	118
表2	小池田遺跡出土礫石器の石材組成	118
表3	小池田遺跡出土石器・石製品組成	118
表4	福島県内の大大2a式期の大型住居跡	119
[写真]		
1	調査区全景	125
2	調査区全景、基本土層	126
3	1号住居跡	127
4	1・2号住居跡	128
5	2・3号住居跡	129
[表5]	福島県浜通り地方における大大4式期の遺跡	121
表6	福島県内の開放窯型木炭窯跡	123
表7	開放窯型木炭窯跡出土土炭の樹種と年代測定値	123
[図30]	遺物包含層出土Ⅲ群3・5類土器(1)	102
図31	遺物包含層出土Ⅲ群3・5類土器(2)	103
図32	遺物包含層出土Ⅲ群4・5類 Ⅲ群1類土器	104
図33	遺物包含層出土Ⅲ群3類土器	106
図34	遺物包含層出土Ⅲ群4類土器、 土製品、羽口	107
図35	遺物包含層出土石器(1)	110
図36	遺物包含層出土石器(2)	111
図37	遺物包含層出土石器(3)	112
図38	遺物包含層出土石製品	113

### 第3編 戸鳥土遺跡

#### [写真]

図1	戸鳥土遺跡調査区位置図	137
図2	遭壙配置図	138
図3	基本土層	140
図4	1号住居跡	141
図5	1号住居跡出土遺物(1)	143
図6	1号住居跡出土遺物(2)	144
[写真]		
1	調査区全景	153
2	調査区全景、基本土層	154
3	1号住居跡	155
4	1号住居跡、2号土坑	156
[図7]	1~4号土坑	146
図8	1号塚跡	147
図9	1号溝跡	148
図10	1号溝跡出土遺物	149
図11	遭壙外出土遺物	151

### 第4編 切付遺跡

#### [写真]

図1	切付遺跡調査区位置図	163
図2	遭壙配置図	164
図3	基本土層	166
図4	1~4・7号土坑	171
図5	5・6・8・10号土坑	172
[図6]	9・11号土坑	173
図7	12・13・15号土坑	174
図8	14・16・17号土坑	178
図9	18・22・24・25号土坑	181
図10	20・27・28号土坑	182

図11 土坑出土遺物	183	図15 小穴群、出土遺物(2)	189
図12 1~3号柱列跡	185	図16 造塙外出土遺物(1)	190
図13 1号溝跡出土遺物	186	図17 造塙外出土遺物(2)	191
図14 小穴群、出土遺物(1)	188		
[写 真]			
1 調査区全景	183	4 土坑(3)	186
2 基本土層、土坑(1)	184	5 土坑(4)、小穴	187
3 土坑(2)	185	6 出土遺物	187

## 第5編 片倉遺跡

### [掲 図]

図1 片倉遺跡調査区位置図	201	図3 1号住居跡	204
図2 造塙配置図、基本土層	202	図4 2号住居跡、1号住居跡出土遺物	205

### [写 真]

1 調査区全景	207	3 1・2号住居跡	209
2 基本土層、1号住居跡	208	4 出土遺物	209

### [付編1 図]

図1 曆年補正結果	214
-----------	-----

### [付編2 表]

表1 小池田遺跡、戸鳥土遺跡、切付遺跡における樹種同定結果	217
-------------------------------	-----

### [付編1 表]

表1 放射性炭素年代測定結果	213
表2 曆年校正年代	214

### [付編2 写真]

写真1 小池田遺跡、戸鳥土遺跡出土 炭化材・木炭	217
写真2 小池田遺跡、切付遺跡出土 炭化材・木炭	218

# 序 章

## 第1節 調査の経緯

### 1 平成18年度までの調査経過

埼玉県三郷市を起点とする常磐自動車道は、平成11年3月までにいわき四倉インターチェンジ（以下、ICと略す）までの供用を開始している。供用が開始された福島県内区間の四倉ICまでに所在する埋蔵文化財の内、いわき市四倉町大野地区10遺跡の発掘調査については、福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター（現、財団法人福島県文化振興事業団）に委託して実施した。さらに福島県教育委員会では、いわき四倉IC以北の路線内に所在する埋蔵文化財に関して、平成6年度より表面調査を実施し、平成10年度までに宮城県境まで終了している。

表面調査の成果を受けて、平成7年度よりいわき四倉IC～富岡IC間の試掘調査を実施し、平成9年度からは同区間に所在する遺跡の発掘調査が開始されている。平成9年度はいわき市の5遺跡と広野町の1遺跡の発掘調査を実施し、平成10年度はいわき市の4遺跡、広野町の3遺跡、楢葉町の3遺跡、富岡町の2遺跡の発掘調査を実施した。平成11年度は、広野町内の4遺跡、楢葉町内の5遺跡について実施した。平成12年度は、広野町の1遺跡、楢葉町の7遺跡、富岡町内の5遺跡について実施した。平成13年度の調査では、楢葉町の1遺跡、富岡町の5遺跡について発掘調査を実施し、13年度までの調査によって楢葉町大谷上ノ原遺跡の2期線部分を残して楢葉町以南の発掘調査を全て終了した。平成14年度は、富岡町の1遺跡、大熊町の2遺跡について発掘調査を実施した。なお、平成14年度には、当初富岡ICまでについて日本道路公团（現、東日本高速道路株式会社）

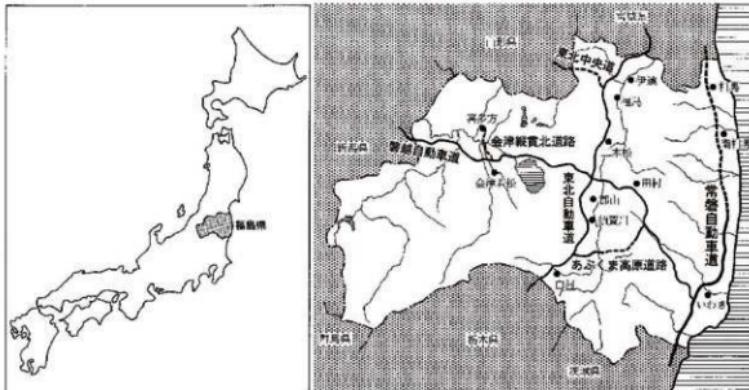


図1 常磐自動車道位置図

## 序 章

東北支社いわき工事事務所、富岡ICから大熊町以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが、年度途中から富岡IC～浪江ICまでの区間についてもいわき工事事務所が管轄することとなった。平成15年度は、相馬工事事務所が管轄する区域でも発掘調査が実施されるようになり、相馬市の2遺跡、いわき工事事務所管轄区内に所在する浪江町の2遺跡について発掘調査を実施した。平成16年度は、いわき工事事務所管轄区域である双葉町の3遺跡、相馬工事事務所管轄の相馬市の1遺跡、南相馬市鹿島区の2遺跡について発掘調査を実施した。平成17年度は、いわき工事事務所管轄区域である大熊町の3遺跡、双葉町の2遺跡、浪江町の2遺跡、相馬工事事務所管轄の相馬市の1遺跡、南相馬市の5遺跡である。平成18年度の常磐自動車道関連の調査は、いわき工事事務所管轄区域である浪江町の4遺跡、相馬工事事務所管轄の南相馬市の13遺跡である。

### 2 平成19年度の調査経過

平成19年度の常磐自動車道(浪江～相馬)建設予定地に関する遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき遺跡調査部の職員17名を配置して実施した。計画段階では南相馬市原町区の中山C遺跡を含め13遺跡、計51,040m<sup>2</sup>の調査が予定されたが、工事計画の変更等もあり関係機関で協議した結果、調査対象遺跡および調査範囲の調整を行い、南相馬市原町区に所在する小池田遺跡(2次調査)・西内遺跡・石神遺跡・戸鳥土遺跡・赤柴遺跡(2次調査)・切付遺跡・片倉遺跡の7遺跡と、同市小高区に所在する茨原遺跡(4次調査)・君ヶ沢B遺跡・大田切遺跡(2次調査)・横大道遺跡・大田和広畑遺跡(2次調査)・広谷地遺跡(2次調査)の6遺跡、計13遺跡を対象に発掘調査を実施した。調査面積は総計で51,100m<sup>2</sup>である。

東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所(以下、相馬工事事務所と略す)との事前協議を受けて、当初、原町区内で優先度の高いとされた小池田遺跡・赤柴遺跡と小高区内で工事着手の早い大田切遺跡と広谷地遺跡、調査予定面積の広い茨原遺跡の発掘調査を優先に計画したが、茨原遺跡では春先にかけて調査予定地の南側隣接地で、環境省公表の鳥類レッドリストの準絶滅危惧種に指定されるオオタカの巣巣が確認されたことから、調査開始がオオタカの雛鳥の巣立ち以降に先送りされることとなったため、茨原遺跡の代わりに同じ小高区内の大田和広畑遺跡を加えた計5遺跡について4月より発掘調査を開始した。

原町区内の小池田遺跡の2次調査は、工事工程との調整から前年度中に先行して表土剥ぎを実施した2,800m<sup>2</sup>の範囲について4月9日から着手した。工事隣接地での調査となつたため、発掘作業員の通勤路の確保をはじめとして条件整備の面で厳しい調査となつたが、縄文時代前期の大型住居跡等を検出、5月末で調査を終了し6月からは同じ原町区の戸鳥土遺跡の調査へと移行した。同じ原町区内に所在する赤柴遺跡も昨年度に続く2次調査となつたが、他遺跡での試掘調査の結果次第では調査面積の調整が予定されたため、1次調査の隣接地区3,000m<sup>2</sup>について優先的に4月から調査を開始し、昨年度に続き縄文時代早期の竪穴住居跡等を検出した。

小高区に所在する大田切遺跡の2次調査は、市道の付け替え工事が終了したことを受け4月13日から着手した。当初より予定された旧市道の道路下500m<sup>2</sup>の調査となつたが、近世以降の所産と

される道跡等を検出した。農繁期でもあり近接する農地への作業用通路の確保を行いつつの調査となつたが、5月15日には調査を終了し同じ小高区内の横大道遺跡の調査へと移行した。大田和広畠遺跡も、昨年度に続く2次調査となつた。当初、2期線部分を除く3,100m<sup>2</sup>の調査を予定したが、現況の道路部分の調査が先送りされたことから2,900m<sup>2</sup>の調査となり、4月9日より調査を開始、5月には、縄文時代中期の複式炉を持つ大型の竪穴住居跡を検出した。広谷地遺跡の2次調査は、原町区の小池田遺跡と同様に工事工程との調整から前年度中に一部の表土剥ぎを実施した。2期線部分を除く4,400m<sup>2</sup>について4月9日から調査に着手し、平安時代の竪穴住居跡のほか1次調査に続き遺跡の中央部を南北に縦断する道跡を検出した。5月から調査を開始した横大道遺跡は、廐塙場跡や木炭窯跡の調査にあたって作業の安全上の問題等から2期線部分を含めて調査することで相馬工事事務所の了承を得た。なお、原町区の赤柴遺跡同様、他遺跡の試掘調査の結果次第では調査面積の調整が予定されたため、製鉄炉廐塙場跡を含む4,000m<sup>2</sup>から調査に着手した。

6月に入り、原町区では戸鳥土遺跡と赤柴遺跡の調査を進めた。戸鳥土遺跡では竪穴住居跡のほか、消滅したと思われた戸鳥土塚群の痕跡と思われる遺構を検出した。なお、同時に進められた試掘調査の結果では新たな調査対象遺跡の追加が無いくことから、赤柴遺跡の調査区を遺跡南端部の斜面まで拡張し調査を進めることとなつた。小高区では、大田和広畠遺跡の調査終了をうけて荻原遺跡の調査を開始することとなり、オオタカの営巣による規制から遠い北側9,100m<sup>2</sup>から調査に着手した。また、調査も終盤となってきた広谷地遺跡では、道跡が当初の調査区からさらに南側へ続くことが確認されたため、協議の結果、新たに200m<sup>2</sup>調査区を拡張することとなつた。

7月には、原町区で戸鳥土遺跡の調査員と作業員を二手に分け、併行して切付遺跡の調査に着手した。小高区の横大道遺跡では、廐塙場跡の調査に伴い大量の鉄滓・羽口等が出土したことから、現地での洗浄と分類・計量とに多大な労力を要することとなつた。8月になると、連日の猛暑のなか調査の進捗も滞りがちとなつたが、原町区では戸鳥土遺跡の調査終了後に片倉遺跡900m<sup>2</sup>の調査を開始し、平安時代の竪穴住居跡等を検出した。小高区では荻原遺跡の隣接地でオオタカの幼鳥の巣立ちが確認されたことから、これまで作業を見合させていた南側5,700m<sup>2</sup>の調査に着手することとなり、広谷地遺跡の調査終了後、荻原遺跡の新たな調査区へ移行した。

9月になると、原町区で切付遺跡と片倉遺跡の調査を順次終了したが、切付遺跡では調査区が民家に隣接する状況から、相馬工事事務所の要請により全面的に埋め戻しを実施した。当初9月から予定された西内遺跡の調査は、隣接する花栽培農家の配慮から11月以降に延期されたため、代わりに石神遺跡の調査計画を立て早々に実施することとなつた。石神遺跡の調査面積は、試掘調査の段階では3,100m<sup>2</sup>とされたが、路線の一部設計変更があり実際は3,300m<sup>2</sup>である。赤柴遺跡の調査では、試掘調査で縄文時代の遺物包含層とした遺跡南端の斜面部分で、調査の進行と共に平安時代の遺構と縄文時代後期の集落跡が重複して確認されたことから、相馬工事事務所と協議の結果、斜面部1,200m<sup>2</sup>については平安時代と縄文時代の2面の調査と積算し調査面積に追加することとなつた。小高区では、横大道遺跡の北部地区での試掘調査の結果から、さらに3,400m<sup>2</sup>の調査区を追加し今

## 序 章

年度の調査面積は計7,400m<sup>2</sup>となった。荻原遺跡でも斯たな試掘調査の結果から、1,500m<sup>2</sup>の調査区を追加し今年度に調査を実施することとなった。調査面積は合計で16,300m<sup>2</sup>である。

10月に入り、原町区の石神遺跡の調査では、深い谷地形のために掛土処理に苦心しつつも繩文時代から近世にかけての遺構が検出された。また、赤柴遺跡では、事業全体の調整から600m<sup>2</sup>の調査区を追加し、今年度の調査面積は合計で7,400m<sup>2</sup>となった。小高区では、横大道遺跡で奈良時代から平安時代にかけての製鉄炉群が検出され、高速道路建設予定地を含めた一帯が大規模な製鉄遺跡であることが明らかとなった。また、荻原遺跡の南部地区でも、試掘調査で検出されていた廃滓場跡とともに製鉄炉跡が検出され鉄型も出土した。なお、横大道遺跡では、10・11月にかけて事業全体の調整から900m<sup>2</sup>の表土剥ぎを実施したが、対象とした地区には製鉄炉・木炭窯跡等が密に分布し今年度中の調査終了は困難と判断したため、協議の結果、表土剥ぎまでに留めることとなった。

11月からは、原町区の西内遺跡で、当初の計画から調査面積を減じて500m<sup>2</sup>を対象に調査を実施した。小高区では、試掘調査の結果から新たに遺跡登録となった君ヶ沢B遺跡(●D-B9)の400m<sup>2</sup>について、工事用道路建設の工程上、今年度中の調査終了が必要とされたため、急速調査を実施することとなった。また、荻原遺跡の調査区の一部1,500m<sup>2</sup>については、用水路のボックス工事のため11月16日に引き渡しを行った。なお、12月8日には奈良・平安時代の製鉄遺跡として斯たな知見の得られた横大道遺跡の現地説明会を実施した。

9月以降は、度重なる雨の影響で発掘作業の中断を余儀なくされたが、11月には天気も安定し調査工程の遅れを取り戻すため作業の進捗を図った。その結果、12月14日には原町区の石神遺跡と赤柴遺跡の調査を終了し、12月21日には小高区の荻原遺跡の調査も終了にこぎ着けたこととなった。なお、赤柴遺跡の町道に接した部分は、相馬工事事務所の依頼により路肩全体の埋め戻しを行った。最後に残った横大道遺跡の調査では、70トンを超える鉄滓の処理に加えて製鉄炉の度重なる造り替えが確認されたため、当初予定した調査期間を大幅に延長することとなったが、工事工程との調整の結果、12月21日で年内の作業を終了し、平成20年1月以降に製鉄炉跡の補足調査を実施することにした。なお、その後の協議の結果、製鉄炉跡の補足調査が次年度に持ち越しとなったことから、翌年度の調査工程を考慮し、調査予定地区の一部1,800m<sup>2</sup>について平成20年2月に表土剥ぎを先行して実施した。

また、調査以外では、平成16~18年度に発掘調査を実施した南相馬市の北山下遺跡と、平成18年度に発掘調査を実施した仲山B遺跡について、福島県文化財調査報告書第442集『常磐自動車道遺跡調査報告47』として11月に報告書を刊行した。同じく、平成15~18年度に発掘調査を実施した相馬市の山岸硝庫跡について、福島県文化財調査報告書第443集『常磐自動車道遺跡調査報告48』として11月に報告書を刊行した。また、平成18年度に発掘調査を実施した南相馬市の原B遺跡と、平成18~19年度に発掘調査を実施した大田切遺跡について、福島県文化財調査報告書第441集『常磐自動車道遺跡調査報告46』として平成20年2月に報告書を刊行した。

(吉 田)

## 第2節 遺跡の位置と自然環境

福島県は東北地方南端に位置し、面積13,782km<sup>2</sup>である。この内、およそ8割は山地で占められ、東部には太平洋に沿って阿武隈高地、中央部には奥羽山脈、西部には越後山脈がせまっている。これらの山地はほぼ南北に走り、県内は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の三地域に区分される。

第1～5編で扱う小池田遺跡・戸鳥土遺跡・切付遺跡・片倉遺跡はいずれも、浜通り地方北部の南相馬市原町区に所在する。南相馬市は、平成18年1月に原町市と相馬郡鹿島町・小高町が合併し

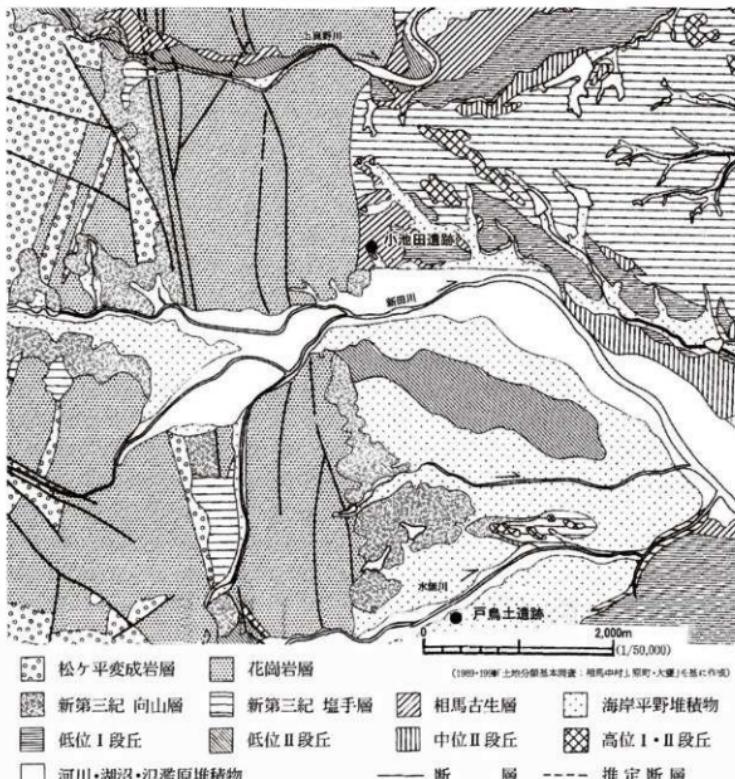


図2 遺跡周辺の環境

## 序 章

て誕生した。行政区画では、小池田遺跡は原町区深野地区に、戸鳥土遺跡は押釜地区、切付遺跡は馬場地区、片倉遺跡は片倉地区に位置する。

小池田遺跡は、南相馬市原町区深野字小池田に所在し、北緯 $37^{\circ}40'18''$ 、東経 $140^{\circ}55'7''$ に位置する。遺跡は、斯田川北岸の丘陵平坦面上に位置し、遺跡の標高は53～57mである。遺跡の範囲は、丘陵平坦面上に沿ってさらに西側へと続いている。今回発掘調査を行った範囲の南西側にある狭い沢に沿って約200m北上した地点の沢及び丘陵斜面裾部からは、流出津が採取できる。このことから、遺跡西側の丘陵東斜面周辺には製鉄関連の遺跡が存在する可能性が高い。

戸鳥土遺跡は、南相馬市原町区押釜字戸鳥土に所在し、北緯 $37^{\circ}37'51''$ 、東経 $140^{\circ}55'35''$ に位置する。遺跡は、水無川の南岸の段丘平坦面上に位置し、遺跡の標高は約56～68mである。遺跡の北側約500mの丘陵頂部には、平成18年度に発掘調査を実施した石神遺跡が位置する。

切付遺跡は、南相馬市原町区馬場字切付に所在し、北緯 $37^{\circ}36'37''$ 、東経 $140^{\circ}55'50''$ に位置する。遺跡は、斯田川の支流である笹部川南岸に位置し、遺跡の標高は約67mである。遺跡の北側約500mの丘陵東斜面及び頂部には平成18年度から発掘調査を実施している赤柴遺跡が位置する。

片倉遺跡は、南相馬市原町区片倉字片倉に所在し、北緯 $37^{\circ}40'37''$ 、東経 $140^{\circ}55'7''$ に位置する。太田川の南岸の低位Ⅱ段丘平坦面上に位置し、遺跡の標高は約54mである。遺跡の北側、太田川北岸の丘陵頂部には、平成18年度に発掘調査を行った原B遺跡が位置する。

南相馬市原町区の地質構造は、ほぼ南北に走る双葉断層を挟んだ東方の低地帯と西方の阿武隈高地で大きく異なる。断層の西側は新生代第三紀中新世に形成された火山性堆積物により緩やかな地形が連続する。断層の東側は新生代第三紀に形成された層上に、第三紀鮮新世に形成された大年寺層などが堆積する。これらの層は、断層東側の丘陵部のほとんどを構成する。

南相馬市原町区を流れる主な河川は、北から斯田川・水無川・太田川である。これらの河川は阿武隈高地に源を発し、山間部で急峻で樹枝状の渓谷が形成されている。双葉断層の東側に入ると河床勾配は緩やかになり、河川两岸には河岸段丘地形や氾濫原が発達している。この段丘は、標高の高い方(年代の古いもの)から、高位段丘(I・II面)、中位段丘(I～IV面)、低位段丘(I・II面)と呼ばれる。今回報告する小池田遺跡の周辺には、主に丘陵地と低位段丘面が発達している。そのほかの遺跡の周辺は、氾濫原が形成されている。(久保他1994)。

(阿 部)

## 第3節 歴史的環境

南相馬市原町区における原始・古代の遺跡については、最も古い時期のものは、後期旧石器時代にある(図3参照)。原町区の畦原A・C遺跡、西町遺跡、橋本町A・B遺跡などがある。

縄文時代の遺跡としては、段丘面上や丘陵周辺に分布している。遺跡の数が増えるのは縄文時代の早期末葉以降である。馬場地区の原B遺跡(25)は、平成18年度に発掘調査を実施し早期末葉と中期前葉の集落跡、赤柴遺跡(24)は平成18年度から3次にわたって発掘調査を行ない早期後半～後期

前・中葉の集落であることが分かった。片倉地区にある八重米坂A・B遺跡(30・31)、羽山B遺跡(29)は、平成元年度から4ヵ年わたって発掘調査を実施し早期後半～前期前葉が主体とした集落跡である。その他には中期後葉の植松A遺跡、晩期中葉の高見町A遺跡などがあげられる。

弥生時代の遺跡は、東側の金沢・泉・波佐地区に小規模な遺跡が見られるようになり、内陸部では発見しにくいようである。前期の遺跡は知られていない。中期の遺跡としては、中期後葉の桜井式土器の標識遺跡として知られる上波佐地区の桜井遺跡がある。後期の遺跡には、十王台式土器を出土した高見町A遺跡がある。

古墳時代になると、上波佐地区を基盤とするかのように、東流する新田川右岸に全長75mの桜井古墳を中心に前期の首長系譜が形成されている。後期～終末期になると、中太田地区や北高平地区周辺に古墳と横穴墓群が混在する形で分布している。

奈良・平安時代になると、丘陵および沖積地を問わず遺跡の広がりが見られるようになる。律令制の施行とともに陸奥国行方郡が当地域に置かれ、郡衙跡は新田川北岸の泉地区にある泉庵寺跡と考えられている。8世紀代の布目瓦が出土する上高平地区的植松庵寺や、この植松庵寺に瓦供給したとされる入道瓦窯跡が知られている。このほかに製鉄関連遺跡が散見される。鹿島区と原町区にまたがる金沢地区製鉄遺跡群や、鹿島区にある大迫遺跡群・割田遺跡群などで複数年次にわたる発掘調査が行われた。これら遺跡での鐵つくりは7世紀後半に開始され9世紀の後半まで続けられたことが分かった。馬場地区の赤柴遺跡でも、発掘調査の結果、鐵生産に関わる集落跡が確認された。平安時代後期以降の様相をうかがうことのできる遺跡は少ない。『和名抄』によると、南相馬市域には、行方郡には「吉名」、「大江」、「多珂」、「子鶴」、「真野」の五郷が置かれたと記されている。

中世の遺跡には、深野地区の小池館跡(5)、牛越地区的牛越城跡(21)、金沢館跡など多くの館跡が知られる。集落跡の発掘調査事例は無く、様相はよく分かっていない。深野地区的仲山B遺跡(8)は平成18年度に発掘調査を行い、中世初頭頃と考えられる銀冶炉跡2基とその付属施設を確認した。

南北朝時代には相馬氏は北朝側に立ち、行方郡奉行を与えられている。戦国時代には相馬氏と伊達氏との間で抗争が激化した。鹿島区内の館跡の多くは、この時期に造営されたと考えられている。

江戸時代には相馬氏の所領となり、幕末まで受け継がれてゆく。また、相馬野馬追祭りで有名な雲雀ヶ原を中心、野馬の放牧と教練を目的に野馬土手を築いたことが知られる。片倉地区的市渡戸には野馬土手が今も残っている。

(阿 郎)

#### 第4節 調査の方法

平成18年度に調査を実施した小池田遺跡(1次調査)、平成19年度に調査を実施した小池田遺跡(2次調査)・戸鳥土遺跡・切付遺跡・片倉遺跡では、以下に基づいて行った。

**グリッドの設定** 4遺跡すべてのグリッド設定は、世界測地系公共座標に一致させている。いずれの遺跡も一辺5m方眼を単位とした。グリッドの座標値は、小池田遺跡では平成18年度の1次調

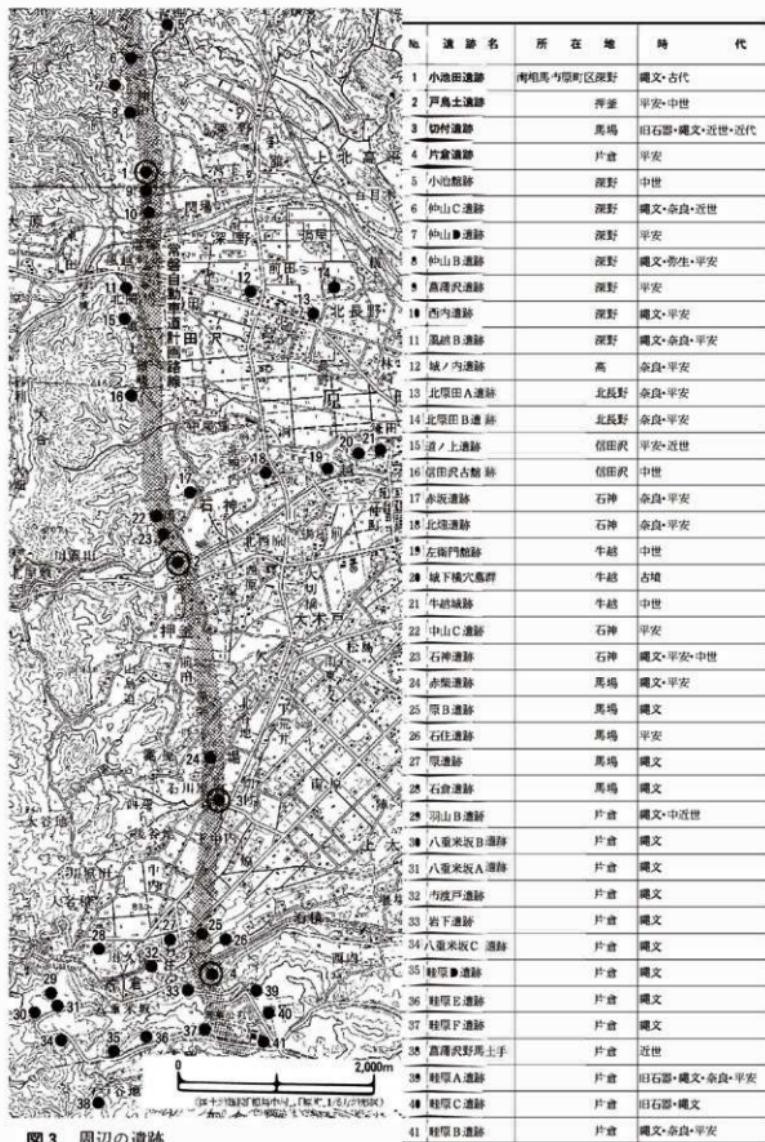


図3 周辺の遺跡

査を踏襲し第1編図2・第2編図1中、戸鳥土遺跡では第3編図2中、切付遺跡では第4編図2中、片倉遺跡では第5編図2中にそれぞれ示した。

いずれの遺跡も、個別のグリッドは東西方向に西から東へアルファベットA・B…、南北方向に北から南へ算用漢字で1・2…とし、両者を組み合わせて、■6グリッドなどと呼称している。

**基準線の設定** 遺構の平面図を作成する際には、各グリッドを1mの方眼に分割し、これを基準線とした。基準線の座標上の位置については、各グリッドの北西端部を原点(E 0, S 0)とし、ここから東へ1m行くごとにE 1~4、南へ1m行くごとにS 1~4として表した。これにそれぞれのグリッド番号を組み合わせて、調査区域内全ての基準線の座標位置を表示した。例えば、F10-E 2・S 3とは、F10グリッドの北西端の杭から、東に2m、南に3m離れた場所を示す。

**発掘作業** 発掘作業では、表土は重機を用いて除去した。その後、人手により包含層を除去し、遺構・遺物の検出作業を行った。遺構の掘り込み作業にあたっては、各遺構の形状・大きさ、重複関係に留意して、土層観察用のベルトを設定した。竪穴住居跡は4分割法を用いた。土坑など小型の遺構については、長軸方向にベルトを設定した。

**遺物の取り上げ** 遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては、上記の区画ごとに、層位を確認した上で取り上げた。遺構外の遺物については、いずれの遺跡でも、出土グリッドの呼称と併せて、遺物の出土層位も付した。層位名を付す際は、基本層位はローマ数字を用いてL I・L IIと表した。遺構内堆積層は、算用漢字を用いて壹・貳と表した。

第1編の小池田遺跡1次調査では、遺構内外の約3,600点強の遺物について光波測距儀を用い、出土地点の座標値と標高値を算出している。しかしながら、1次調査区は南に向かって傾斜していく丘陵の先端部分に位置し、図化した基本土層が調査区北側の1箇所のみ(1編図3)であったため、算出した座標・標高値だけでは、遺物の出土位置と層位との関係を十分検討することができなかつた。そのため、1次調査時の出土遺物の座標・標高値は第1編中で活用できなかつた。小池田遺跡2次調査での遺構内外出土の遺物の取り上げ時には、座標・標高値の算出は行っていない。

**記録作成** 調査の成果は、実測図と写真で記録した。遺構図の縮尺は、小穴群が1/40、住居跡が1/20、土坑等の小さなものは1/10で作成した。微細な記録が必要と判断したものについては、1/10で随时作成し、調査区内の地形図や遺構配置図は、1/200で作成した。

土層観察における色調判断は、『新版標準土色帖』(小山・竹原1999)を基準とした。

調査現場での写真撮影は、小池田遺跡1次調査において35mm一眼レフカメラ、6×4.5判の中型一眼レフカメラを併用した。それ以外の調査では35mm一眼レフカメラ、6×4.5判の中型一眼レフカメラ、デジタルカメラを併用した。

**遺物・記録の保管** 4遺跡の発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は、報告書作成完了後、遺跡ごとに台帳を作成し、福島県文化財センター白河館(まほろん)に収蔵する予定である。

(阿 部)

## 引用・参考文献（序章から第5編）

- 原町市史編纂委員会編 1968 「原町市史」 福島県原町市
- 木本元治 他 1982 「第4章 考 察」『東北新幹線開通跡跡調査報告V』福島県教育委員会・日本国有鉄道
- 芳賀英一 他 1982 「青宮西遺跡」会津高田町教育委員会
- 松本 茂 1996 「福島県浜通り北海岸見立古器」『しのぶ考古』
- 久保和也 他 1996 「原町及び大源地城の地質」地盤地質研究報告 地質調査所 通商産業省工業技術院
- 高橋博志 他 1991 「「影遺跡」郡山西部第二工事団地開発跡跡調査報告書4」郡山市教育委員会・郡山市商工労政部
- 丸山泰輔 他 1993 「宇賀合遺跡」「水原小谷地区農道改良工事開通跡跡調査報告」福島市教育委員会
- 久保和也 他 1994 「渡江及び磐梯富岡地城の地質」地盤地質研究報告 地質調査所 通商産業省工業技術院
- 佐藤典邦 他 1996 「周取貝塚 第1・2次調査報告」いわき市教育委員会
- 目黒吉明 1997 「キノコ形土器製品について」『福島考古第3号』福島県考古学会
- 宇佐見雅夫 他 1997 「赤粉遺跡」猪苗代町教育委員会
- 鈴木公雄 1999 「出土鐵貨の研究」東京大学出版会
- 福島県教育委員会 1996 「福島県遺跡地図 浜通り地方」 2002~2007 「福島県内遺跡分布調査報告8~13」
- 財团法人福島県文化振興事業団 福島県文化財センター・河野路
- 門脇秀典 他 2002 「猪苗代町馬場前遺跡の調査成果」「研究紀要2002」
- 福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター
- 芳賀英一 他 1996 「第2編 下谷ヶ地平 ■ C遺跡」「国宮会津農業水利事業開通跡跡調査報告IV」
- 芳賀英一 他 1996 「第3編 青宮西遺跡」「国宮会津農業水利事業開通跡跡調査報告V」
- 松本 茂 1994 「柏久保遺跡」「真野ダム開通跡跡調査報告VI」
- 松本 茂 1996 「若下 ■ 遺跡」「真野ダム開通跡跡調査報告VII」
- 松本 茂 1997 「若下向A遺跡」「真野ダム開通跡跡調査報告VIII」
- 鈴鹿良一 他 1995 「羽白 ■ 遺跡(第2次)」「真野ダム開通跡跡調査報告X I」
- 鈴鹿良一 他 1995 「羽白C遺跡(第3次)」「真野ダム開通跡跡調査報告X II」
- 鈴鹿良一 他 1995 「羽白C遺跡(第3次)」「宮内A遺跡 第1次」「真野ダム開通跡跡調査報告X III」
- 鈴鹿良一 他 1996 「羽白C遺跡(第3次)」「宮内A遺跡 第2次」「真野ダム開通跡跡調査報告X V」
- 福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター・東北電力株式会社
- 斎藤克明 他 1996 「第1編 五台山 ■ 遺跡」「原町火力発電所開通跡跡調査報告I」
- 吉田亨子 他 1991 「第7編 羽山 ■ 遺跡」「原町火力発電所開通跡跡調査報告II」
- 藤谷 誠 他 1992 「第7編 羽山 ■ 遺跡」「第8編 八重坂A遺跡」「原町火力発電所開通跡跡調査報告III」
- 藤谷 誠 他 1994 「第6編 八重坂B遺跡」「第7編 八重坂C遺跡」「原町火力発電所開通跡跡調査報告IV」
- 福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団・建設省東北地方建設局滑川ダム工事事務所
- 鈴鹿良一 他 1995 「新子内遺跡(第3次調査)」「滑川ダム開通跡跡調査報告V」
- 福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団・日本道路公團
- 山岸実夫 他 1995 「第4編 仲ノ郷 ■ 遺跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告15」
- 佐藤 啓 他 1995 「第4編 駄駄遺跡」「第5編 馬場A遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告4」
- 吉田 功 他 2000 「第1編 下小塙上 ■ 頸遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告20」
- 能登谷宜康 他 2001 「蒙佐治遺跡(2次調査)」「常磐自動車道遺跡調査報告24」
- 門脇秀典 他 2002 「第1編 上郡 ■ 遺跡」「三浦武司 他」「第2編 本町西A遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告32」
- 國井秀紀 他 2002 「第1編 上本町G遺跡」「門脇秀典 他」「第2編 上平A遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告33」
- 福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団・日本高速道路株式会社
- 吉野道夫 2005 「第1編 立ノ沢遺跡」「大河原勉 他」「第2編 宮前遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告40」
- 高橋真人 2006 「第6編 八房平 ■ 遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告45」
- 国井秀紀 他 2005 「第1編 原 ■ 遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告46」
- 吉野道夫 他 2005 「第2編 朴伯 ■ 遺跡」「阿部知己「第3編 朴伯C遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告50」
- 福島県教育委員会・財團法人福島県文化振興事業団・福島県土木部
- 吉野秀典 他 1999 「第1編 関林A遺跡」「福島空港公園遺跡調査報告2」
- 山元 出 他 2003 「第1編 南倉沢遺跡」「一般国道288号南倉沢バイパス遺跡調査報告1」
- 山元 出 他 2005 「第2編 西田日遺跡」「こまちダム遺跡調査報告3」

# 第1編 小池田遺跡

(1次調査)

遺跡略号 MSC-K1  
所 在 地 南相馬市原町区深野字小池田  
調査期間 平成18年10月18日～12月8日  
調査員 笠井 崇吉・佐藤 洋  
報告作成 阿部 知己・今野沙貴子



## 第1章 調査経過

小池田遺跡は、遺物の散布が確認されたことにより、急遽平成18年度に新たに発見・登録となつた遺跡である。工事が急がれる区域であったため、同年9月には、常磐自動車道建設地内の4,800m<sup>2</sup>を対象に試掘調査が実施され、南へと張り出した丘陵部分を中心に3,800m<sup>2</sup>が保存を要する面積とされた(福島県教育委員会2007)。以下に、調査の概要を記す。

保存を要する面積のうち、南西部の300m<sup>2</sup>については平成18年度内の工事着工が予定されていた。このため、平成18年度の調査は、福島県教育委員会、東日本高速道路株式会社、財団法人福島県文化振興事業団の三者間で協議し、保存面積3,800m<sup>2</sup>のうち南側の1,000m<sup>2</sup>を対象として実施した。

10月18日には、調査員2名を配置し、調査区の範囲確認や周辺住民への挨拶、そして器材の搬入などを実施した。10月19日、重機を導入して表土剥ぎを実施した。遺跡は自動車の乗り入れ不可能な丘陵末端部分に位置するため、隣接地に駐車場および休憩所の用地となる場所が確保できなかったことから、調査前の準備に手間取った。10月26日から作業員14名を投入し、引き渡しの急がれる南西部の300m<sup>2</sup>部分から遺構の確認・精査作業を開始した。南西部については、西端から3基

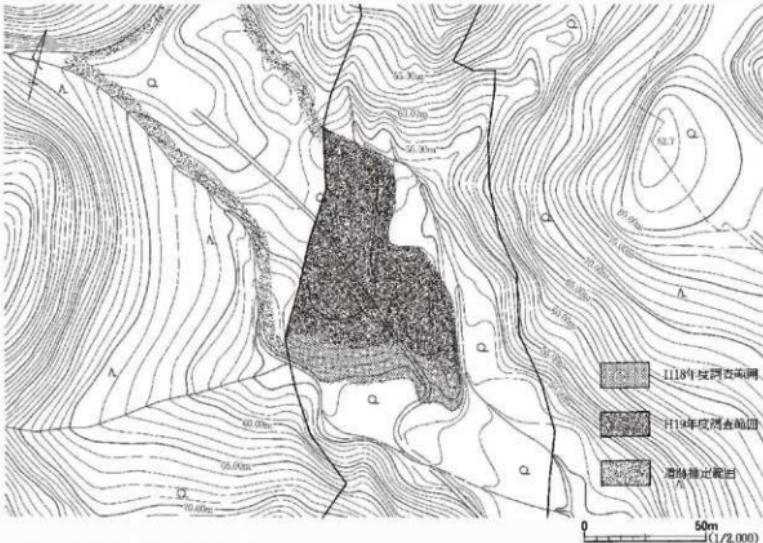


図1 小池田遺跡調査区位置図

## 第1編 小池田遺跡（1次調査）

の集石遺構（SS1～3）を相次いで検出した。また、周囲から縄文土器を中心とした多くの遺物が出土したことから、光波測距儀を使って遺物の取り上げを行なながら、遺構の検出及び精査を進めた。工事着工の急がれる南西部300m<sup>2</sup>分については11月17日に発掘調査を終了し、11月27日に福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団と、東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所による現地の終了確認及び引き渡しを実施した。

11月下旬から12月初旬にかけては、残りの700m<sup>2</sup>について遺構の検出と精査を継続した。12月8日には、700m<sup>2</sup>の調査を終了し、12月14日に福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団と、東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所による現地の終了確認及び引き渡しを実施した。平成18年度の小池田遺跡1次調査で検出した遺構は、土坑8基、集石遺構3基、焼土遺構1基、特殊遺構3基、遺物包含層1,000m<sup>2</sup>で、発掘調査に要した日数は延べ35日である。

また、平成18年度に発掘調査を実施した北側の2,800m<sup>2</sup>については、平成19年度の工事着工が急がれることから、平成19年3月5～12日に調査員2名が赴き表土剥ぎを実施した。（阿部）

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の分布と基本土層

#### 遺構の分布（図2）

小池田遺跡1次調査では、南へと張り出す丘陵の末端部分を対象とした。検出された遺構は、土坑8基、集石遺構3基、焼土遺構1基、特殊遺構3基と遺物包含層である。遺構は調査区の南西端

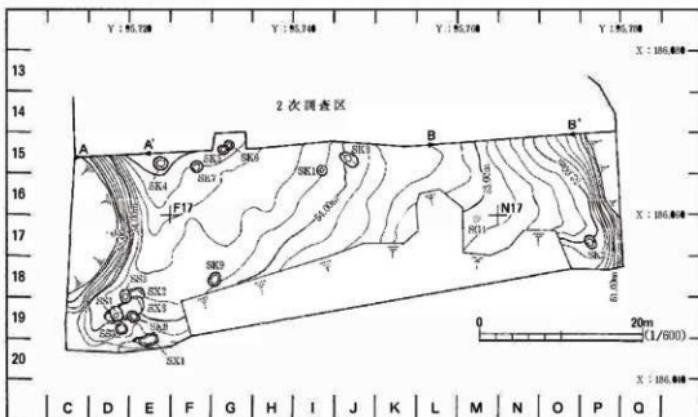


図2 遺構配置図

に集まっている傾向が伺える。1次調査区南側の平坦面南端部分は、伐採木の搬出等によりすでに削平された状況であった。黄褐色砂質土(L II)中から出土した遺物は、縄文時代早期後半から晩期、そして弥生時代のもので、特に縄文時代前期後葉の大木4式とその併行する型式の土器が大半を占めている。1次調査で確認した遺構のうち、時期の判明したものは縄文時代早期後半から前期頃の集石遺構(S S 1)、縄文時代前期および晩期後半～弥生時代初頭の土坑(S K 3～9)であった。

また、平成18年9月に実施した試掘調査の際には、土師器内面に黒色処理を施さない赤焼土器杯の破片が出土している。赤焼土器に関連した9世紀後半頃の遺構については、1次調査区内で確認できなかった。

小池田遺跡の占地する丘陵上は、ほぼ一様な平坦面である。この平坦面は保存範囲の西側境からさらに約100m西へと続いている(図1)。平坦面の最大規模は180×60mほどで、その南北側には小さな沢が入る。平坦面から南北の沢底までの比高差は3～6mほどで、沢には絶えず水が流れ、遺跡直下の沢底には岩盤の露呈している箇所が見られ、遺物を含む堆積層の存在は認められなかった。

#### 基本土層(図3、写真2)

平成18年度に発掘調査を実施した1次調査区の基本土層については、色調、混入物等からL I～L IVの4層に細分された。堆積状況の確認は、2次調査区との境である北側のみで土層の観察を行った。L IIIについて、平成19年度の2次調査の結果からa～cの3層に細分できることから、2次調査での層位に対応させ、「L IIIa」とした。L IIIaとL IVは、いずれも1・2調査区内の基盤をなす地層で、無遺物層である。

L Iは、黒褐色砂質土で、調査区全体を覆う表土である。層の厚さは10～70cmで、層中から縄文土器・弥生土器片がわずかに出土している。

L IIは、黄褐色砂質土で、調査区のはぼ全域で確認できた土層である。層の厚さは10～45cmで、層中には縄文時代早期後半～中期前葉・後期・晩期、弥生時代前葉の遺物を含んでいる。特に、縄文時代前期後葉の遺物が多く出土するが、1次調査区からは当該期の遺構は確認できていない。

L IIIaは、明黄褐色砂質土で、丘陵平坦面のはぼ全域に堆積し、無遺物層である。層の厚さは、図5で示したSK 8の土層断面A-A'で見ると約70cmである。

L IVは、灰黄褐色粘質土で、図5左下に示したSK 8底面付近において確認でき、無遺物層である。

(阿部)

## 第2節 出土遺物の分類

小池田遺跡の1次調査で出土した土器については、以下のように時期分類した。挿図中には、その分類番号を1点ごとに略表記し、該当する時代・時期を示した。例えば、II群3類の土器は「II3」のように表記した。また、後述する具体的な説明中では、a～c種などの細分を設けた。

第1編 小池田遺跡（1次調査）

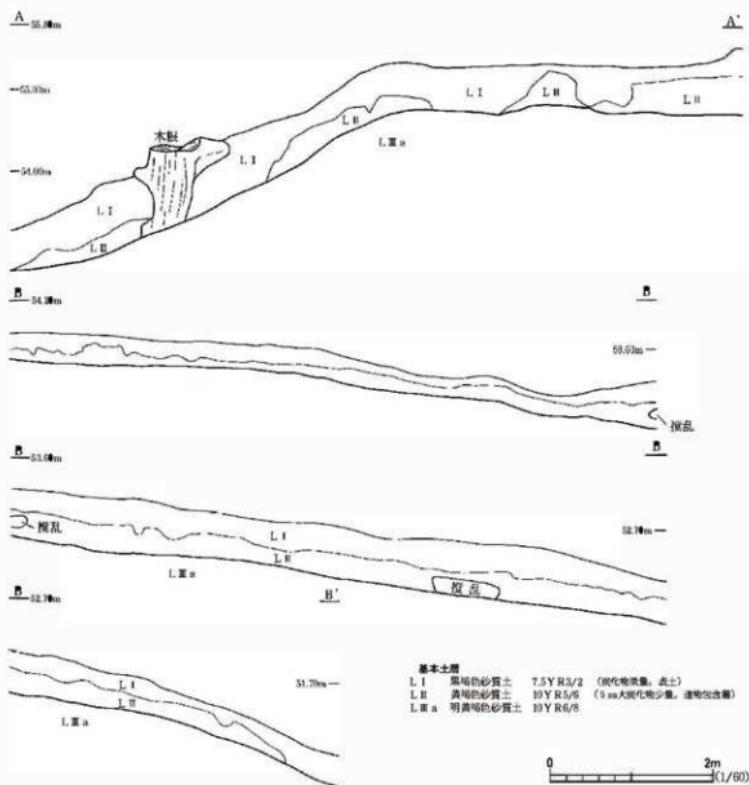


図3 基本土層

I群土器…縄文時代早期の土器から、縄文時代前期の大木2式土器

1類 縄文時代早期の土器

2類 花積下層式、大木1式とその併行の土器

3類 大木2式の土器

4類 地文のみの土器。前期前葉の土器と思われるが、型式名が特定できないもの

II群土器…縄文時代前期の大木3式から大木6式土器

1類 大木3式的土器

2類 諸磯・浮島系の土器

3類 大木4式的土器

4類 大木式の土器

5類 地文のみの土器。前期中葉～後葉の土器と思われるが、型式名が特定できないもの

### III群土器…縄文時代中期から弥生時代の土器

1類 縄文時代中期の土器

2類 縄文時代後期の土器

3類 縄文時代晚期の土器

4類 弥生時代の土器

5類 地文のみの土器

土製品、石器、石製品については、形態ごとの分類に留めた。石器、石製品については、出土位置、計測値と併せて、石質鑑定の結果を参考に石質を表記した。

(阿部)

## 第3節 土 坑

小池田遺跡の1次調査では、8基の土坑の調査を実施した。土坑は、調査区の北側および南西部に位置している。なお、調査の過程で土坑と認定できないことが確認できたものについては、欠番とした。欠番としたものは、10号土坑である。

### 1号土坑 SK1(図4、写真2)

本遺構は、調査区北端のI 15グリッドに位置し、L II・IIIa上面で検出した。北東側2mにはSK 3がある。平面形は楕円形である。規模は長軸98cm、短軸83cm、検出面からの深さは14cmである。底面はほぼ平坦である。周壁は、東壁において急傾斜で立ち上がる。西壁は東壁よりも残りが悪く、立ち上がりが緩やかに見えるが、本来は東壁と同様、急傾斜で立ち上がっていたものと考えられる。堆積土は、焼土粒・炭化物を含む黒褐色砂質土の単一層で、人為堆積か自然堆積か判断できなかった。

本遺構は、浅い楕円形状の土坑であることは確認できたが、その機能を特定することは難しい。時期については、遺構からの出土遺物がなく不明である。

### 2号土坑 SK2(図4、写真2)

本遺構は、調査区南東隅のP 17グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。平面形は楕円形である。規模は長軸164cm、短軸106cm、検出面からの深さは20cmである。底面は概ね平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、2層に分けられ、全体的にレンズ状の堆積状況が観察されることから、自然堆積と判断した。

本遺構は、浅い楕円形状の土坑であることは確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、遺構からの出土遺物がなく不明である。

3号土坑 SK3 (図4・6、写真2)

本遺構は、調査区北端のJ15グリッドに位置し、LII・IIIa上面で検出した。南西2mにはSK1がある。平面形は橢円形である。規模は長軸225cm、短軸115cm、検出面からの深さは18cmを割る。底面は、多少の凹凸はあるものの、概ね平坦である。周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は、炭化物混じりの褐色砂質土の単一層で、人為堆積か自然堆積かについて判断できなかった。

遺物は、1から縄文土器片116点、石器10点が出土した。その内、8点を図6-1～8に示した。1～3は大木4式の土器片である。1の口縁部片は半截竹管を用いて縄文地に縦位の区画線が描かれている。2は口縁部の無文地にゆるやかな波状沈線を、3は綾格文を施している。6は浮島系の土器片で、菱形または三角形状の沈線文を施している。5・8は大木4式系の土器片で、地文に斜行縄文を施している。4・7は大洞A式土器で、4は小型の精製深鉢または壺形土器片、7は複合口縁部上端に斜行縄文を施した広口の壺または深鉢形土器の口縁部である。

本遺構は、浅い橢円形状の土坑であること確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、出土遺物から縄文時代晚期後半頃と考えられる。

4号土坑 SK4 (図5・6、写真2)

本遺構は、調査区北西隅のE15グリッドに位置し、LIIIa上面で検出した。平面形は不整円形である。規模は直径150cm、検出面からの深さは32cmである。底面は平坦で、周壁は急傾斜で立ち上がる。堆積土は、4層に分けられ、1～4はレンズ状の堆積状況を示すことから、自然堆積と判断した。

遺物は、1から縄文土器片5点、石器2点が出土し、その内1点を図6-10に示した。10の器面は著しく摩耗しているが、かすかに縄文を地文としていたことが分かる。

本遺構は、不整円形の土坑であることだけは確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、出土遺物から縄文時代前期頃と考えられる。

5号土坑 SK5 (図5・6、写真3・5)

本遺構は、調査区北西のG15グリッドに位置し、LIIIa上面で検出した。SK6と重複し、本遺構が新しい。平面形は不整円形である。規模は長軸96cm、短軸86cm、検出面からの深さは38cmである。底面は概ね平坦で、周壁は急傾斜で立ち上がる。堆積土は、炭化物混じりの褐色砂質土の単一層で、人為堆積か自然堆積かについて判断できなかった。

遺物は、縄文・弥生土器片19点、石器2点がすべて1より出土した。その内3点を図6-9・11・12に示した。9には網目状燃糸文が、12には燃糸文が施されている。11は小型の深鉢形土器で、大洞A式直後の弥生土器である。口縁部は欠損するが、残存した破片から推測して4単位の波状口縁であったと考えられる。肩部には太い沈線で変形工字文を、その下の体部には斜行縄文を施している。

底面には木目状の圧痕を残している。

本遺構は、SK 6より新しい不整円形土坑であることが確認されたが、機能を特定することは難しい。時期については、出土遺物から、縄文時代晩期終末から弥生時代前期頃と考えられる。

#### 6号土坑 SK 6 (図5・6, 写真3)

本遺構は、調査区北西のG15グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。SK 5と重複し、本遺構の方が古い。平面形は楕円形である。規模は長軸残存部78cm、短軸60cm、検出面からの深さは24cmを測る。底面は概ね平坦で、周壁は急傾斜で立ち上がる。堆積土は、3層に分けられ、壁際から流れ込んだ堆積状況が顯著に見られるため自然堆積と判断した。

遺物は、I 1・3から縄文土器片13点が出土し、ほとんどがI 1からの出土である。その内、4点を図6-13~16に示した。4点は、いずれも縄文時代前期の土器片である。13は大木1式併行の土器片で、の口縁部片の胎土中には纖維の混入が認められる。14・15は器面に斜行縄文を施した脛部片、16は無文の底部片である。

本遺構は、SK 5よりも古い楕円形土坑であることだけ確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、出土遺物から縄文時代前期前葉頃と考えられる。

#### 7号土坑 SK 7 (図4・6・7, 写真3・5)

本遺構は、調査区北西のF15グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。平面形は不整楕円形である。規模は長軸120cm、短軸105cm、検出面からの深さは18cmを測る。残存している底面はほぼ平坦であり、周壁も緩やかに立ち上がる。堆積土は3層に分けられ、全体的にレンズ状の堆積状況も観察されることから自然堆積と判断した。

遺物は、I 1から縄文土器片25点、石器4点が出土した。その内、10点を図6-17~21、図7-1~5に示した。図6-18・19・21、図7-1~3の6点は大木4式土器で、いずれも器面に綾格文を施している。図6-18は2単位の突起を持つ深鉢形土器で、端部に刻みを入れた口縁部が無文となり、体部には結節回転文を横位に施している。図6-17・20、図7-4は、器面に斜行縄文を施した縄文時代前期の土器片である。図7-5は縄文土器の底部片で、底面に網代痕を残す。

本遺構は、浅い不整楕円形土坑であることだけ確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、出土遺物から縄文時代前期頃と考えられる。

#### 8号土坑 SK 8 (図5, 写真3)

本遺構は、調査区南西隅のD-E 19グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。本遺構周辺は調査遺構が密集している。本遺構はSK 3と重複し、本遺構が古い。平面形は不整楕円形である。規模は、上端で長軸146cm、短軸112cm、中端で長軸92cm、短軸84cm、検出面からの深さは100cmである。底面は、概ね平坦で、L IVを45cmほど掘り込んで形成している。周壁は、急傾斜で立ち上がる。

第1編 小池田遺跡（1次調査）

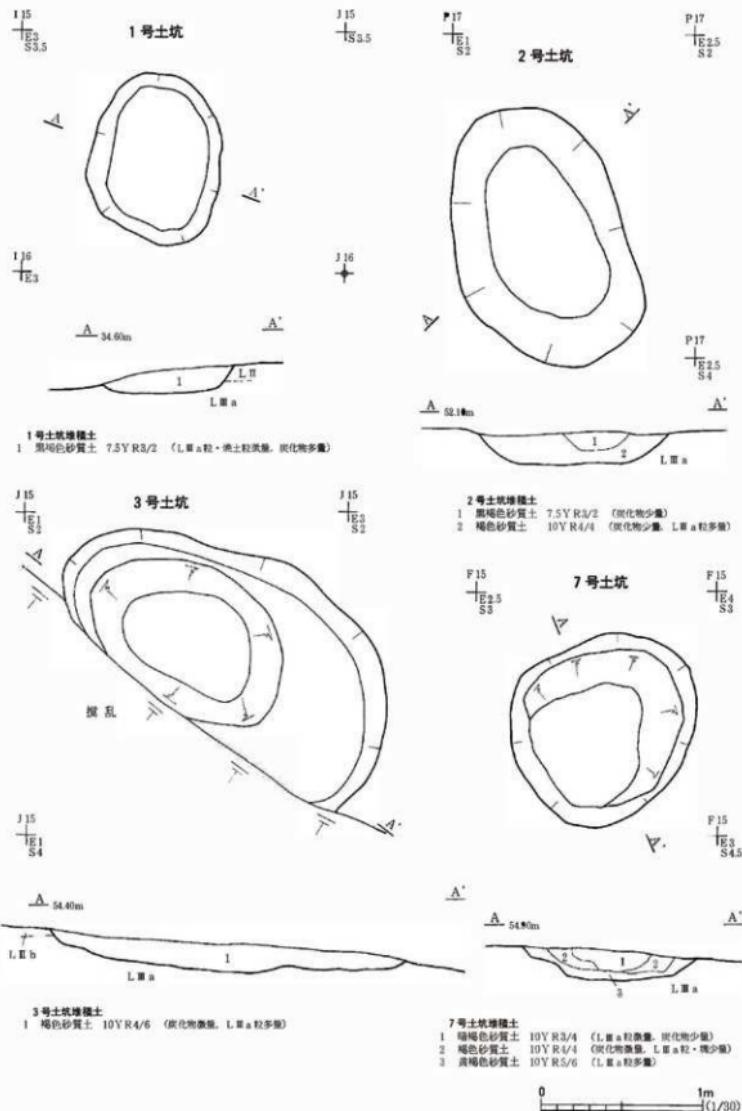


図4 1～3・7号土坑

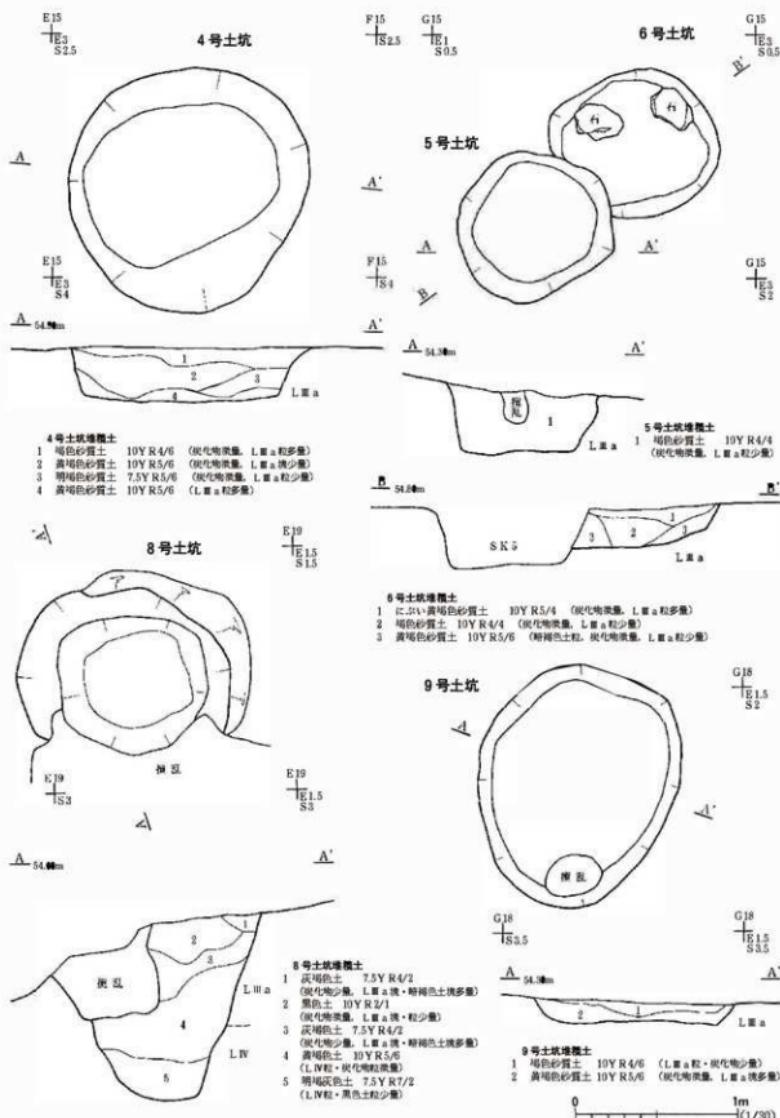


図5 4～6・8・9号土坑

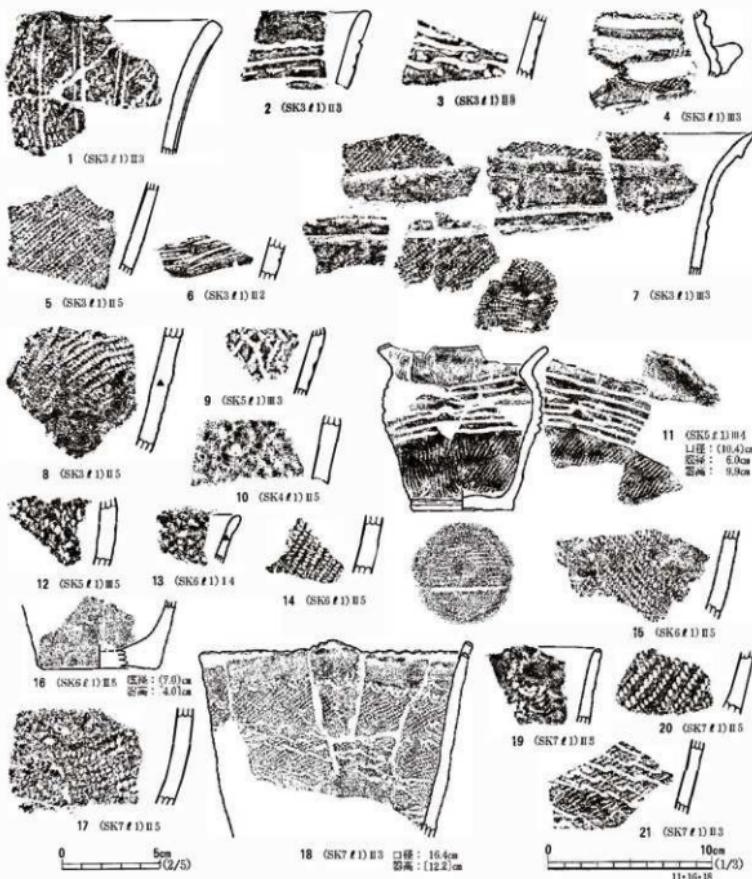


図6 土坑出土遺物(1)

堆積土は5層に分けられ、 $\ell 3 \sim 5$ は壁際からの崩落土と考えられることから自然堆積と判断した。

遺物は、 $\ell 3$ から剥片1点が出土したが、図化していない。

本遺構は、SX3より古い不整梢円形土坑であることだけ確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、出土遺物が乏しく難しいが、重複した遺構との関連から縄文時代前期頃と考えられる。

## 9号土坑 SK9 (図5・7, 写真3)

本遺構は、調査区南西のF・G18グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。平面形は梢円形である。規模は長軸147cm、短軸122cm、検出面からの深さは15cmを測る。底面は概ね平坦で、周壁は急傾斜で立ち上がる。堆積土は、2層に分けられ、レンズ状の堆積状況が確認できることから自然堆積と判断した。

遺物は、 $\ell$  1から縄文土器片20点、石器2点が出土した。その内、5点を図7-6～10に示した。9・10は大木4式土器で、器面には綾络文を施している。6・7は大木6式土器の口縁部片で、無文部には連続鋸歯文を描いている。8は非結束の原体で、羽状縄文を施している。

本遺構は、浅い梢円形状の土坑であることは確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、出土遺物から縄文時代前期後葉頃と考えられる。  
(今野・阿部)

## 第4節 集石遺構

小池田遺跡の1次調査では、3基の集石遺構の調査を実施した。これらすべては、調査区南西端に造られている。

## 1号集石遺構 S S 1 (図8, 写真3・4)

本遺構は、調査区南西隅のD18グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。半径1m以内にS S

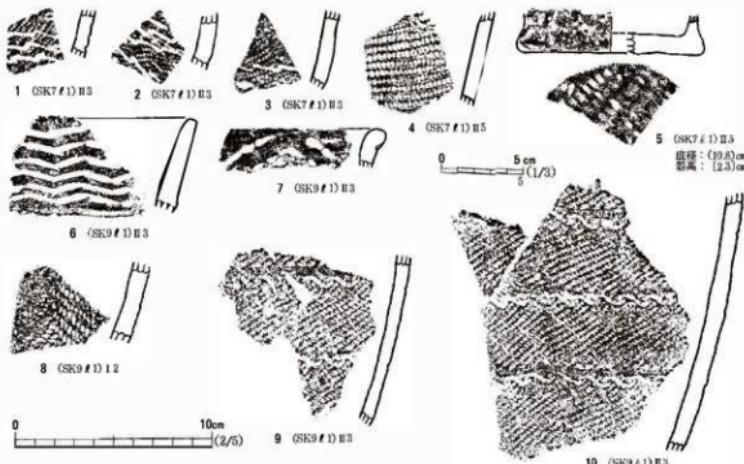


図7 土坑出土遺物(2)

### 第1編 小池田遺跡（1次調査）

2・3、SK8などの遺構が集中する。SX3と重複し、本遺構が新しい。掘形の平面形は、隅丸方形である。掘形の規模は、南北168×150cm、検出面からの深さは55cmである。掘形の底面は、L IIIa中に形成され、ほぼ平坦である。掘形の周壁は、底面から36~42cmの高さまでは急傾斜で立ち上がり、一旦平坦面を形成し、再び急傾斜で立ち上がる。底面から周壁の下部にかけては、熱を受け赤褐色に変色している。被熱変色した範囲の深さは最大5cmである。掘形内の堆積土は、2層に分けられ、いずれも礫と共に埋め戻された人為堆積土と判断した。E2中の礫は、不規則に混ざり込み、礫の大きさは6~22cmで、すべて焼けていた。

掘形の中端と、その周辺からは小穴を6個（P1~6）確認した。それは、中端縁に沿って4個（P3~6）、北壁側に2個（P1・2）設けられている。小穴の平面形は、概ね円形である。小穴の規模は、直径6~8cm、中端上面からの深さは11~22cmである。写真4bには、6個以上的小穴らしい影が掘形を囲んでいるように見えるが、調査した結果、確実な小穴は6個であった。

遺物は、焼けた礫以外に出土しなかった。

本遺構は、隅丸方形の掘形内に焼けた礫を投棄した集石遺構である。時期については、礫以外に遺物が無く特定が難しいが、E2から出土した炭化材について放射性炭素の年代測定を実施したところ「6,140±40yrBP」という年代が示されている（付編1参照）。このことから、本遺構は縄文時代早期後半から前期頃の所産と考えられる。

### 2号集石遺構 SS2（図8、写真3・4）

本遺構は、調査区南西隅のB17・18、E17・18グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。0.5~1mほど離れたところにSS1、SK8がある。SX2・3と重複し、本遺構が最も新しい。掘形の平面形は、隅丸長方形である。掘形の規模は、南北140cm、東西115cm、検出面からの深さ50cmである。掘形の底面はL IIIa中に形成され、周壁は南側で急傾斜に立ち上がり、北側で一旦平坦面を形成し、再び急傾斜で立ち上がる。掘形内の堆積土は、6層に分けられ、いずれも焼けた礫と共に埋められた人為的堆積土である。礫は、主にE3中に不規則に混ざり込んでいる。

遺物は、焼けた礫の他に、縄文土器片が1点出土し、図8-1に示した。1は無文の深鉢形土器胴部片である。

本遺構は、隅丸方形の掘形内に焼けた礫を投棄した集石遺構である。時期については、礫以外に遺物が少なく特定することは難しいが、重複した遺構との関連から縄文時代早期後半から前期頃と考えられる。

### 3号集石遺構 SS3（図8、写真3）

本遺構は、調査区南西隅のB18グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。半径1m以内にSS1、SK8がある。SS1、SX3と重複し、本遺構が最も新しい。掘形の平面形は、楕円形である。掘形の規模は、中端で長軸104cm、短軸88cm、検出面からの深さは37cmである。掘形の底面は

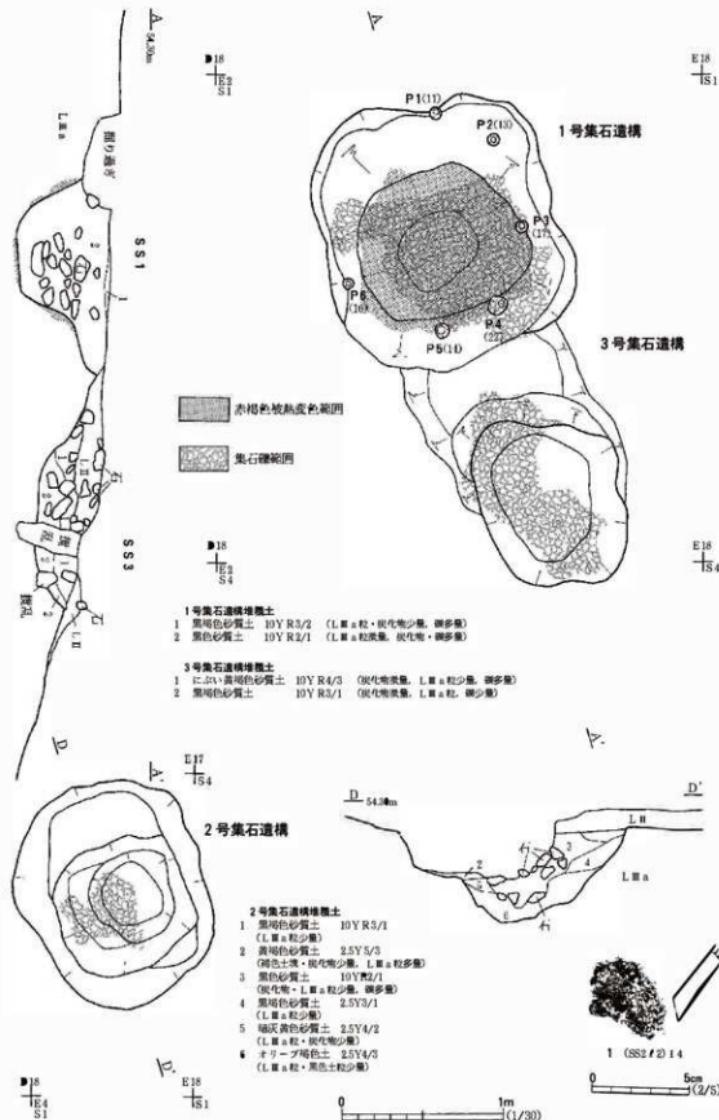


図8 1～3号集石遺構、出土遺物

## 第1編 小池田遺跡（1次調査）

ほぼ平坦で、L IIIa中に形成されている。周壁は緩やかに立ち上がる。掘形内の堆積土は2層に分けられ、いずれも煤けた礫と共に埋められた人骨が堆積土と判断した。掘形中には、6~16cm大の煤けた礫が大量に集められていた。礫は掘形の西側に集中し、東側では希薄であった。

本遺構からの遺物は、煤けた礫以外に出土しなかった。

本遺構は、楕円形の掘形内に煤けた礫を投棄した集石遺構である。時期については、出土遺物が少なく特定することは難しいが、SS 1より新しい縄文時代早~前期頃と考えられる。（今野・阿部）

## 第5節 燃土遺構

小池田遺跡の1次調査では、1基の燃土遺構の調査を実施した。

### 1号燃土遺構 SG 1（図9、写真4）

本遺構は、調査区南側のM17グリッドの平坦面縁に位置する。検出面はL II上面で、不整楕円形状に広がる赤褐色に被熱変色した範囲を検出した。被熱変色範囲の規模は98×86cm、検出面からの深さは最大10cmである。本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構は不整楕円形状に被熱変色した燃土遺構である。時期については、遺物の出土が無く特定することが難しいが、周囲の遺構の関連性から縄文時代前期頃と考えられる。（今野）

## 第6節 特殊遺構

小池田遺跡の1次調査では、3基の特殊遺構の調査を実施した。ここでは、遺構の機能について

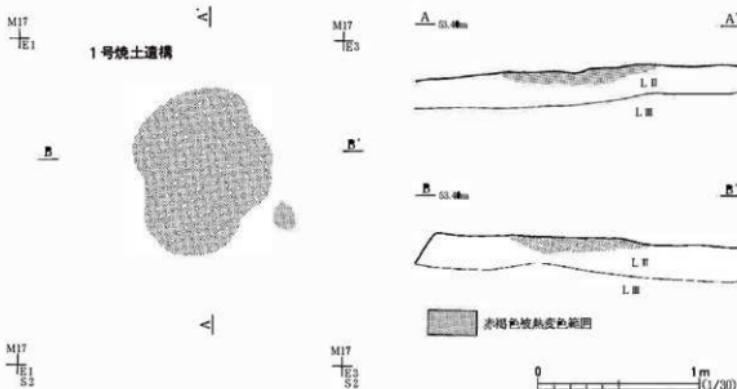


図9 1号燃土遺構

豎穴住居跡と特定するにも明確な根拠を見出すことのできなかったものについて特殊遺構として位置づけた。

#### 1号特殊遺構 SX 1 (図10、写真4)

本遺構は、調査区南西隅のE18・19グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。1.5~2mほど離れたところにSS 3とSK 8がある。平面形は、東西方向に長い不整な隅丸方形である。規模は南北166cm、東西312cm。検出面からの深さは6cmである。底面はL IIIa中に形成されほぼ平坦で、底面北側から人頭大の砂岩が2点出土した。周壁はすべて緩やかに立ち上がる。堆積土は炭化物を少量含む單一層で、自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。

遺物は、縄文土器片10点、石核1点が出土した。土器は細片のため図示しなかったが、石核を図10右側に示した。図10-1は珪質頁岩の石核である。

本遺構は、不整な隅丸方形の特殊遺構であることだけは確認できたが、機能については不明である。時期については、遺物が少なく特定が難しいが、堆積土中から出土している土器細片から判断して縄文時代前期頃と考えられる。

#### 2号特殊遺構 SX 2 (図10)

本遺構は、調査区南西隅のD17、E17・18グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。SS 2、SX 3と重複し、本遺構が最も古い。平面形は、その大半を重複する遺構に壊され、残存したのは遺構の北東部分のみであったため不明である。残存部の規模は、184×134cm。検出面からの深さは16cmである。L IIIa中に形成された底面はほぼ平坦で、残存した周壁は緩やかに立ち上がる。本遺構内からの出土遺物は無かった。

本遺構は、遺構の重複関係から、SS 2とSX 3よりも古い特殊遺構であることだけ確認できたが、機能については不明である。時期については、遺物の出土が無く特定が難しいが、重複遺構との関連から縄文時代早期後半から前期頃と考えられる。

#### 3号特殊遺構 SX 3 (図10)

本遺構は、調査区南西隅のD18、E17・18グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。本遺構は、SK 8、SS 1~3、SX 2の5基の遺構と重複し、SS 1~3より古く、SK 8とSX 2よりは新しい。平面形は、隅丸方形である。規模は、南北264cm、東西456cm。検出面からの深さは40cmである。底面はL IIIa中に形成され、ほぼ平坦である。北と東側に残存した周壁は、緩やかに立ち上がる。堆積土は、炭化物を少量含む單一層で、自然堆積か人為堆積かについては判断できなかった。遺物は、すべてL IIから出土し、本遺構に伴う遺物は確認できなかった。L II中から出土した遺物の内訳は、縄文土器片418点、剥片56点である。

本遺構は、遺構の重複関係からSS 1~3より古い隅丸方形を呈する特殊遺構であるだけ確認で

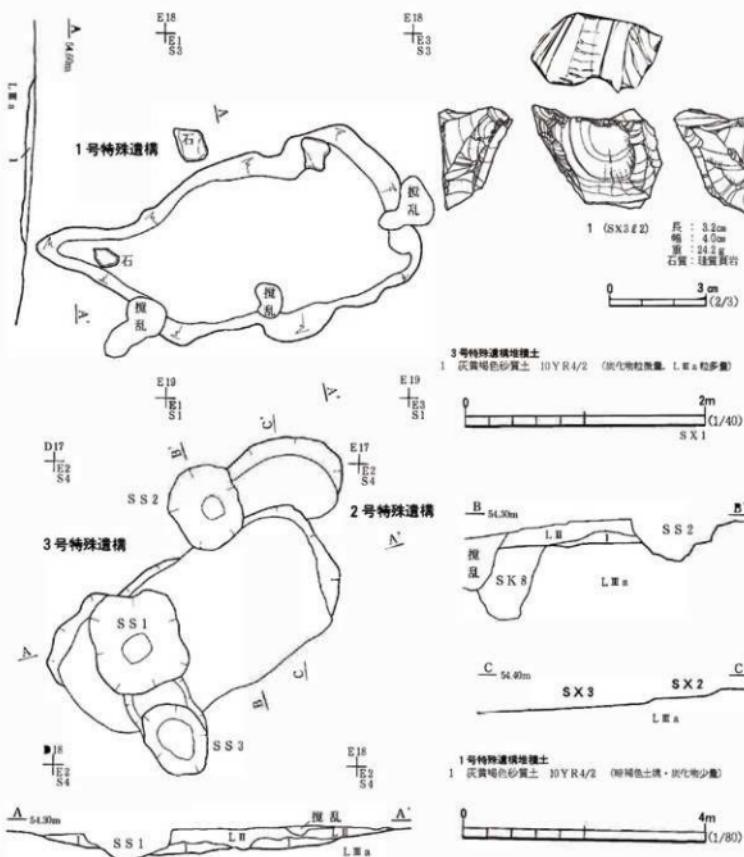


図10 1～3号特殊遺構、出土遺物

きたが機能については不明である。時期については、本遺構に伴う遺物が無く特定は難しいが、重複遺構との関連から縄文時代早期後半から前期頃と考えられる。

(今野・阿部)

## 第7節 遺物包含層

小池田遺跡の1次調査では、調査区のほぼ全域に遺物包含層が形成されていることを確認した。出土遺物のほとんどは、調査段階で3層に区分したL II中から出土している。「L II」については、

第2章第1節で報告した。以下では、遺物包含層から出土した遺物について報告するが、表土や撒乱穴等から出土した遺物についても本節で扱う。

#### 遺物の出土状態 (図11)

小池田遺跡の1次調査における遺物包含層から出土した土器片は3,333点である。これらの土器片は、すべてLIIから出土している。このうち、主体を占める土器群は、縄文時代前期中～末葉に比定されるII群土器である。II群土器の中でも、土器型式名の判明した「II群3類土器」の出土量が最も多い。図11にはLIIから出土した土器片の合計点数を平面分布として示した。

土器の分類別に出土位置を見ると、縄文時代前期前葉の「I群2類土器」は1次調査区西側のE17・18, F16~18, G15・16の7グリッドに集中し、東側はK15, J・M・O16, N17の5グリッドから出土している。縄文時代前期末葉とした「II群4類土器」は、調査区南側のF16・17, G17, K16, M17の5グリッドから出土している。縄文時代後期とした「III群2類土器」は、調査区の東・西側にあるF・G15, M・O16の4グリッドで出土している。縄文時代晩期とした「III群3類土器」も、縄文後期の土器と同様、調査区の東西に分けて出土する傾向が伺え、F・G・H15, F・G・M・N16, F・M・P17の計10グリッドで出土する。弥生時代の土器とした「III群4類土器」の分布は、主に調査区東側(F16~18, G16・17, H15グリッド)に分布する傾向にあり、その他では調査区中央のJ15グリッド、西側のM17グリッドからそれぞれ出土している。上記以外の「II群3類土器」とした縄文時代前期後葉の土器は、調査区のほぼ全域から出土し、中でも東側E～I15～18の計20グリッド(500m<sup>2</sup>)内に集中して出土している。

次に、石器の出土位置を見てみる。1次調査区から出土した加工された石器(打製・磨製石器)、砾石器(磨石・凹石など)、石製品および剥片などを含んだすべての出土点数は1,465点である。そのうち、特に石器がまとまって出土した範囲は、「II群3類土器」の集中域とほぼ重なり、調査区東側のE～G15～18の計12グリッド(300m<sup>2</sup>)である。石鎌、石錐、石匙、磨製・打製石斧、块状耳飾も、

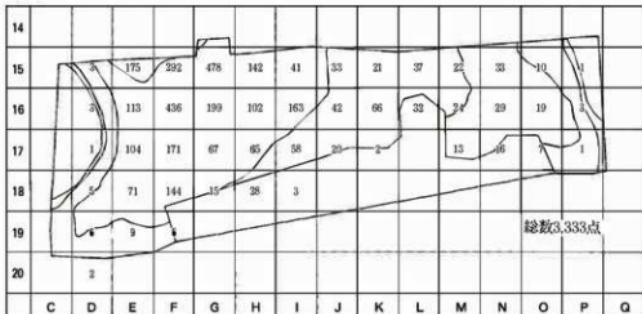


図11 グリッド別出土土器点数

## 第1編 小池田遺跡（1次調査）

この300m<sup>2</sup>の範囲内から主に出土している。この12グリッド内からは1,465点の石器のうち、1,226点の石器が出土し、中でもE15、F17・18、G15・16グリッドからの出土点数が多く、一グリッドあたり平均153点以上の石器が出土している。石器の回収点数が多いのは、唐鏡の使用を最小限に控え、出土遺物の取り上げの際に、すべての出土位置に座標値を与えてながら取り上げを実施した結果である。

### 土 器（図12～23、写真5）

小池田遺跡の1次調査区の遺物包含層から出土した土器は、縄文土器と弥生土器である。時期的には、縄文時代前期後葉の土器が大半を占めている。出土土器の分類については、第2章第2節で報告した内容に合わせた。I・III群土器については、「II群土器」に比べると出土量が極僅かであつたため、該当するほとんどの資料について図示し、「I群土器」は図12・13に、「III群土器」は図22・23に示した。1次調査区からは「III群1類」とした縄文時代中期の土器は出土していない。

#### I群1類土器（図12-1～4）

本類は、縄文時代早期中葉から後葉の土器で、図12-1～4に示した4点がすべてである。器形は深鉢形土器で、胎土に纖維混和痕が見られる。1は、早期中葉の日計式押形文土器の胴部片で、器面に重層山形押型文を施す。2・3は、いずれも早期中葉の常世1式土器に比定される。2の口縁部片は、円形刺突文と半截竹管の束もしくは櫛齒状工具を用いた直線文を組合せて施す。3は、器面に絶条体圧痕のみを横位に施している。4は、早期後葉の常世2式土器に比定される口縁部片で、内外面に絶条体条痕文を施し、口縁部付近に絶条体圧痕で山形状の区画文を施している。

#### I群2類土器（図12-5～21）

本類は、縄文時代前期前葉の大木1式土器に比定された土器片である。図12-5～21に図示した破片がすべてである。器形はどれも深鉢形土器で、胎土には纖維混和痕が見られる。5の口縁上端に細長いスリットを入れ、沈線文で円形文様を描く。6の口縁上端部には短いスリットを入れ、その下に短沈線と円形刺突文で文様を施す。7～21は器面に非結束の原体で羽状縦文を施している。

#### I群3類土器（図13-1・4・5）

図13-1・4・5に示した3点は、大木2a式土器に比定される。図示した破片がすべてである。器形は、どれも深鉢形土器と考えられる。1は、器面に半截竹管で波状文を施している。4は、斜行縦文地に、太い沈線で、2条一組の平行沈線と鋸歯文を上下に組合せた文様を描いている。5は、内傾する胴部に網目状捺糸文を施し、胎土には纖維混和痕が認められる。

#### I群4類土器（図12-22～24）

図12-22～24に示した3点は、いずれも器面に斜行縦文のみを施し、胎土に纖維混和痕が認められる。

#### II群1類土器（図13-2・3）

図13-2・3に示した2点は、いずれも大木3式土器に比定される。図示した破片がすべてであ

る。いずれも有孔土器の口縁部片で、頸部または口縁部直下に、焼成前に直径数mmの小孔を複数穿っている。

#### II群2類土器(図13-6~23)

本類は、浮島・諸磯系の土器で、図13に図示した破片がすべてである。図13-6~15には浮島系、図13-17~23は諸磯b式、図13-16は興津式の土器を示した。土器型式の違いから、「a~c」の3種に細分した。

a 種 図13-6~15は浮島系の土器片である。7~9・13~15の器面には、平行沈線文のみで文様を描いている。6・10~12は浮島Ⅲ式土器に比定される口縁部片である。6は、口縁端部と外側に半截竹管状の工具を用い連続刺突文を施す。10~12は、同一個体の波状口縁部片で、口端部には不鮮明であるが細い条線帯を、体部には貝殻の最も上端に当たる部位を用いて、口縁部に平行させた貝殻文を施している。

b 種 図13-17~23は、諸磯b式土器に比定される。17・20は、爪形文を用いて图形を描いている。18・19・21・22は、刻み付き浮線文を用いて曲線や直線の文様を描くことを特徴としている。18・21のように地文に斜行繩文が残るものもあるが、その他の破片では浮線をナデ付けた際に地文が消されている。23は、斜行繩文地の上から、斜位の集合沈線を施している。

c 種 図13-16の1点は、興津式土器に比定される。器面には、5本1単位の櫛歯状の工具で擬似貝殻文を施している。

#### II群3類土器(図14~図19-1~10)

本類は、大木4式土器に比定され、抽出した土器を図14~図19-1~10に示した。器形のほとんどが深鉢形土器で、図上で推定復元した図17-4だけが壺形を呈する。胎土に纖維混和痕は認められない。内面の調整を見ると、ヘラ状工具によるケズリのような擦痕を施したもののが大半を占める。文様の違いから「a~e」の4種に細分した。

a 種 図14・15に示した土器片は、口縁部と胴部の区画文様として、横走する多段の結節回転文が認められる。口縁部形状を見ると、図14-14・16のように内傾したものも見られるが、多くのものは外反している。また、口縁部は平縁のものが主体を占め、図14-10のような波状口縁も僅かに見られる。口縁端部には、刻みを持つもの(図14-4・7~10・15・16)と、そうでないものが認められる。

b 種 図16・17、図18-1~12に示した土器片は、沈線文を特徴とする。沈線文には、1条の沈線のみで施文するものと、2条一組の沈線で施文するもの2種類がある。

まず、1条の沈線で文様を描くものについて見てみる。図16-1~6・8、図17-3では、区画された口縁部無文帶に、緩やかな波の沈線と連続山形文を上下に組み合わせている。また、図16-7では口縁部無文帶と繩文境に1条の波状文を施している。図16-11・20、図17-1~3を見ると、無文帶への施文ではなく、体部の斜行繩文地の上に波状文を描いている。この1条の沈線の深さと断面を観察すると、器面から3~4mmと深くまで達し、断面は角の張った箱形を呈している。

#### 第1編 小池田遺跡（1次調査）

次に、2本一組の沈線で文様を描くものについて見る。図16-9・10・12～19・21、図17-4は、2本一組の沈線で、一列または複列の波状文や連続山形文を横位に描いている。図16-10・13～15、19・21では、口縁部無文帯内に沈線文を施している。それに対して、図16-16・17、図17-4では、口縁部無文帯内ではなく、体部の斜行繩文地の上から沈線文を描いている。図17-4の壺形土器は、器面全体に斜行繩文を施した後、口縁部付近にのみ2列の連続山形文を施すことで、横位に連続した菱形状の文様を描いている。

最後に、口縁部無文帯に沈線文で幾何学的な文様を描くものを見てみる。図18-2・7・10～12は、口縁部無文帯から体部文様帯へ向かって、縦位の波状文を施している。図18-3～5・8は、口縁部無文帯に1条の沈線で、円形文や直線文を描いている。

c 種 図18-13～22・24～30、図18-1～4に示した土器片は、波状の粘土紐や、ボタン状の粘土による貼付文を特徴とする。図18-13～16・18～20は、口縁端部に波状の粘土紐を部分的に貼り付ける。図18-27・28は繩文地の上から縦長の波状貼付文を、図18-30は、斜行繩文地に波状の貼付文を横位に運らせている。図18-1・4は刻み付きの細い粘土紐を、斜行繩文地に貼付け幾何学的な文様を施している。図18-2・3は内傾する口縁部直下に一条の隆帯と、その下に太い波状の貼付文を運らせている。

d 種 図18-1・6・9・23、図18-5～10には、その他の特徴が見られる土器を一括した。

図18-1・6・9は、口縁部無文帯から胴部文様帯に向かって、縦に結節部の回転文を施す。図18-23は、口縁端部を摘み、波状に整形している。図18-8は外反した無文の口縁部片である。図18-7・9・10は、器面に斜行繩文のみを施した口縁部片で、口縁端部に刻みを付ける。図18-5・6の2点は、半截竹管状の工具を用いて、断続的に刺突文を施す。

#### II群4類土器（図20）

本類は、大木6式土器に比定される深鉢形土器で、図20に示した7点がすべてである。器形は、4・5・7を見ると、肩の張った胴部に、外傾する口縁部を持つものである。1は、頸部から外傾した口縁部片で、無文地に波状に近い連続山形文を複列に施す。2の波状口縁部片は、体部に斜行繩文を施し、波状突起部には「V」字状の深い切り込みが入る。3の胴部片には、結節繩文を縦に回転施す。6・7は同一個体で、6の口縁部片には刻みを入れた浮線文を「M」字状の突起部に貼り付けている。口縁上部には2本、頸部に1本の浮線文で区画した内部には、細い粘土紐を鋸齒状に貼り付ける。胴部には、原体を縦に回転させることで、縦の結節回転文を施している。

4・5は、同一の器形を呈し、いずれも肉厚の短い口縁部を外傾させる。両者の口縁部を見ると、4は無文の平口縁で、5の突起部の左右には、刻みを入れた2本の粘土紐を貼り付けている。4・5の口縁部から頸部にかけての無文帯と体部の文様帯の境界を見ると、4では幅の狭い板状工具で横走する連続刺突文を1条施し、5では刻みを入れた細い粘土紐を1本貼り付けている。

#### II群5類土器（図19-11～17、図21）

本類は、器面に地文のみを施した深鉢形土器の胴部片と底部片を一括し、抽出したものを図19-

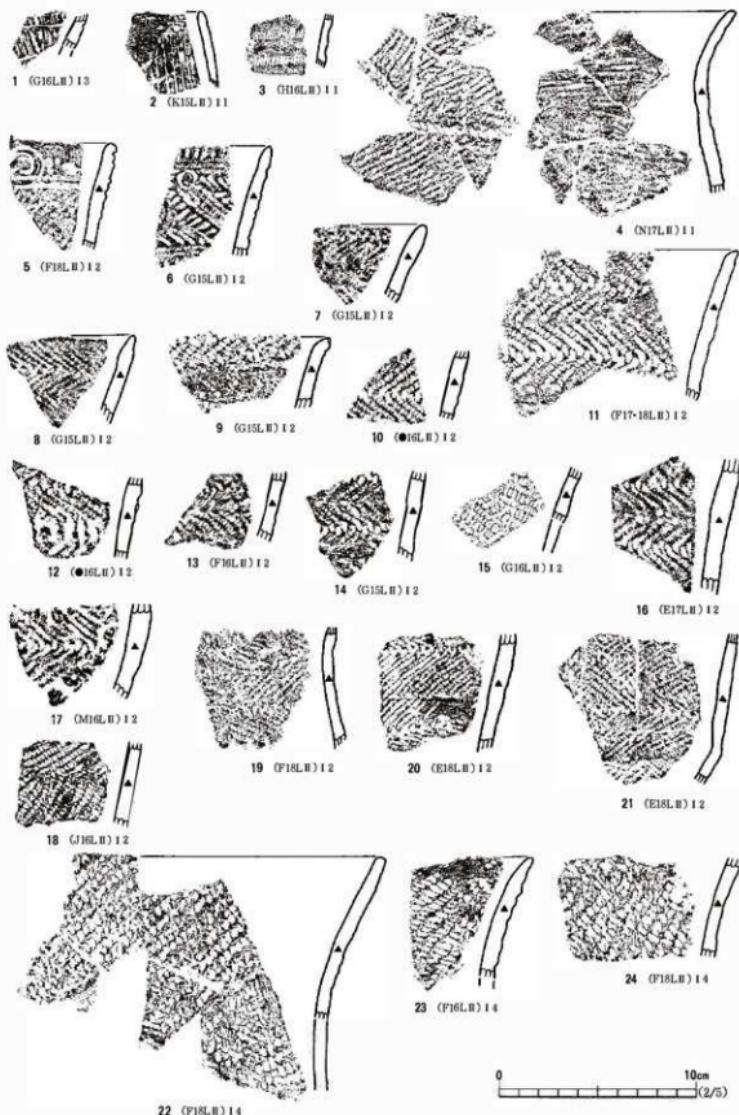


図12 遺物包含層出土 I 群土器



図13 遺物包含層出土 1群 3類土器、II群 1・2類土器

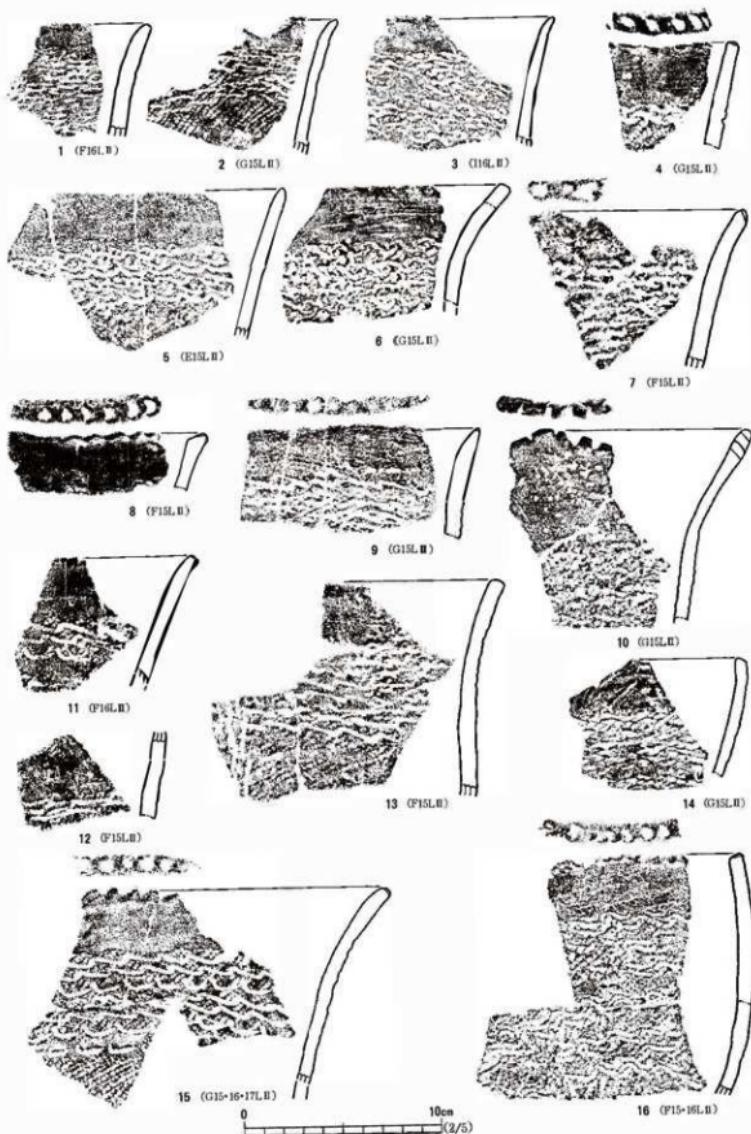


図14 遺物包含層出土II群3類土器(1)

第1編 小池田遺跡（1次調査）

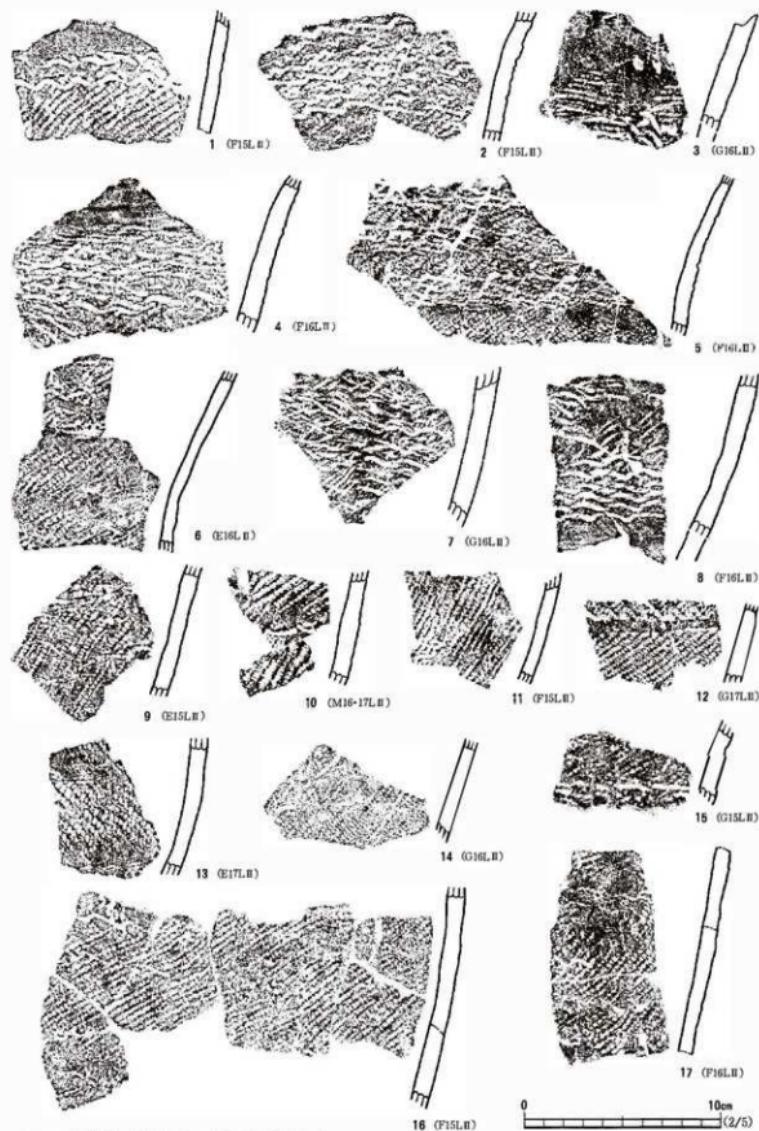


図15 遺物包含層出土Ⅱ群3類土器(2)

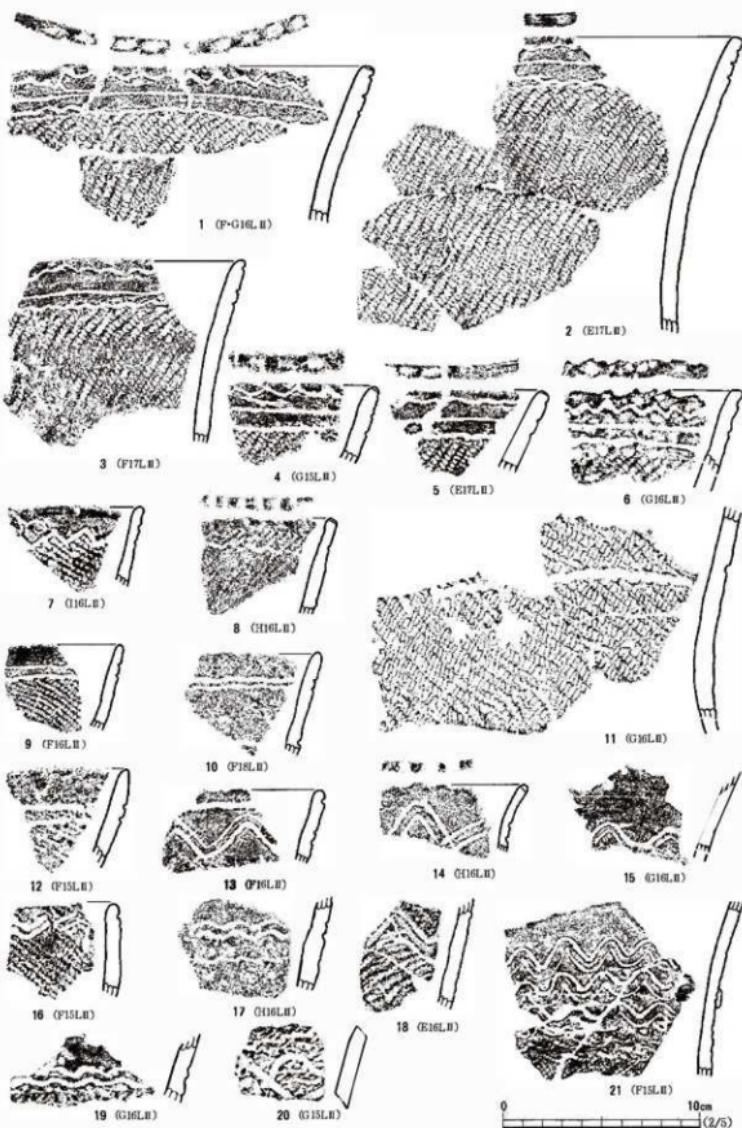


図16 遺物包含層出土II群3類土器(3)

第1編 小池田遺跡（1次調査）

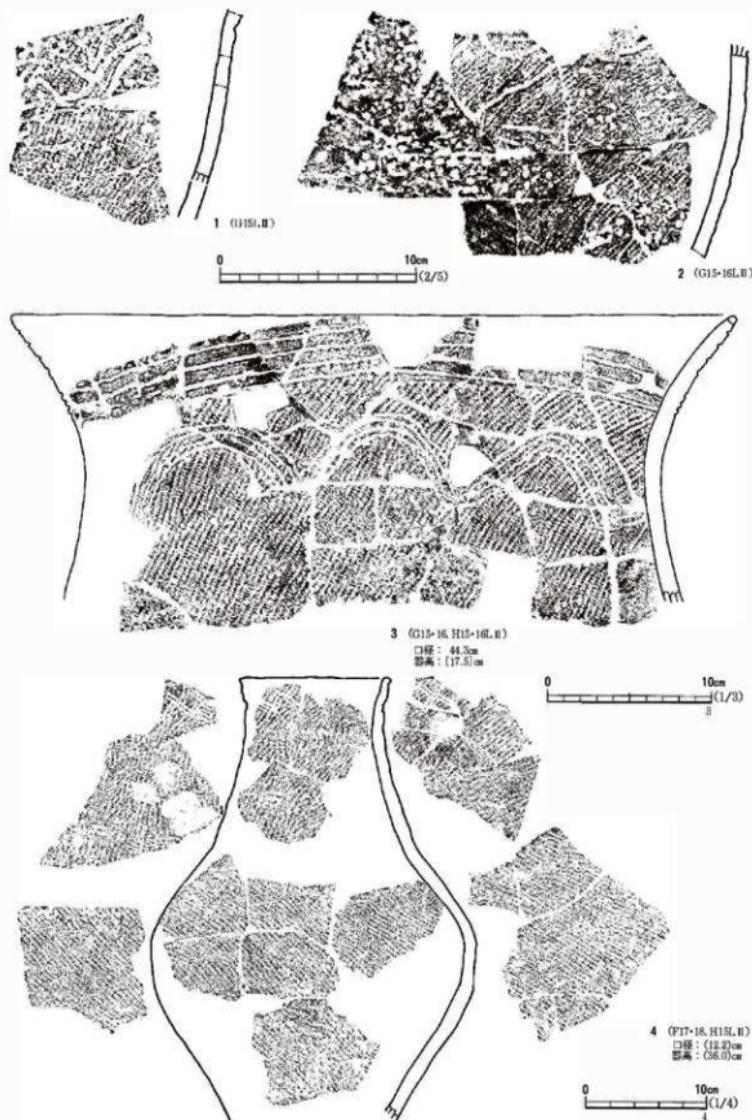


図17 遺物包含層出土 II群3類土器(4)



図18 遺物包含層出土 II 群 3 類土器 (5)

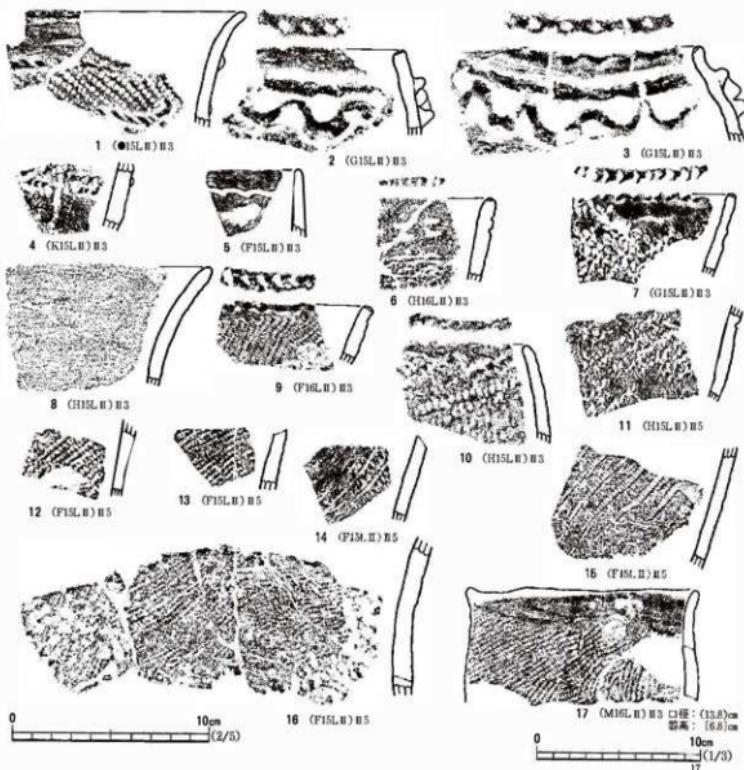


図19 遺物包含層出土II群3・5類土器

11~17、図21に示した。図19~11~17、図21~1~11は、器面に斜行縦文のみを施している。図19~17は、平口縁の深鉢形土器である。図21~12~20の底面には、網代編压痕が認められる。同図21には木葉痕が認められる。図21~22の底面には、ヘラ状工具によるケズリ・ナデの再調整が施されている。

### Ⅲ群2類土器（図22~1~4）

本類は、縄文時代後期初頭から前葉の深鉢形土器片を一括した。図22~1~4に示した破片がすべてである。1は、綱取I式土器に比定され、口縁部下位に隆帯を巡らす。2の波状口縁部片は、称名寺式土器に比定され、端部に沿って平行沈線と円形文を描いている。3・4は、器面に沈線で曲線文・直線文を描いている。

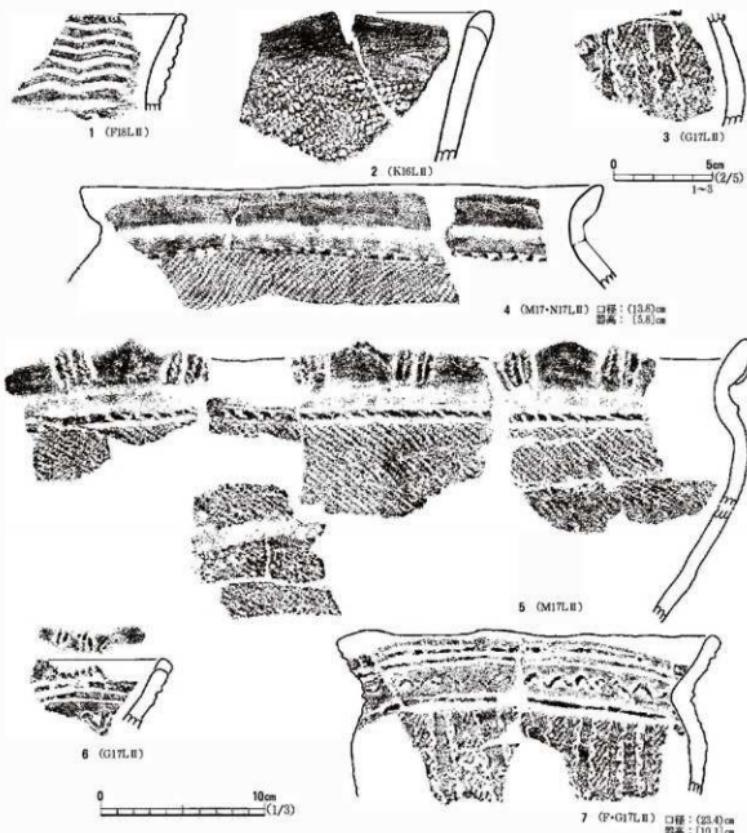


図20 遺物包含層出土 II群 4類土器

## III群 3類土器（図22-5～21）

本類は、縄文時代晩期の土器片を一括し、抽出したものを図22-5～21に示した。5～10は晩期中葉の大胴C2式土器に比定され、器形は半精製の浅鉢または深鉢形土器である。5・7・9・10は浅鉢形土器の口縁部で、数条の平行沈線を施す。6は深鉢口縁部は、平行沈線の有節線で加飾する。8は、縄文地の上にコブ状の貼付けを持ち、器面に赤色顔料が付着していた。

11～21は粗製の深鉢または浅鉢形土器で、11～14には密な櫛齒文を、15・16には粗い櫛齒文を施す。18～21は網目状撚糸文を、17は斜行縄文のみで施文している。

第1編 小池田遺跡（1次調査）

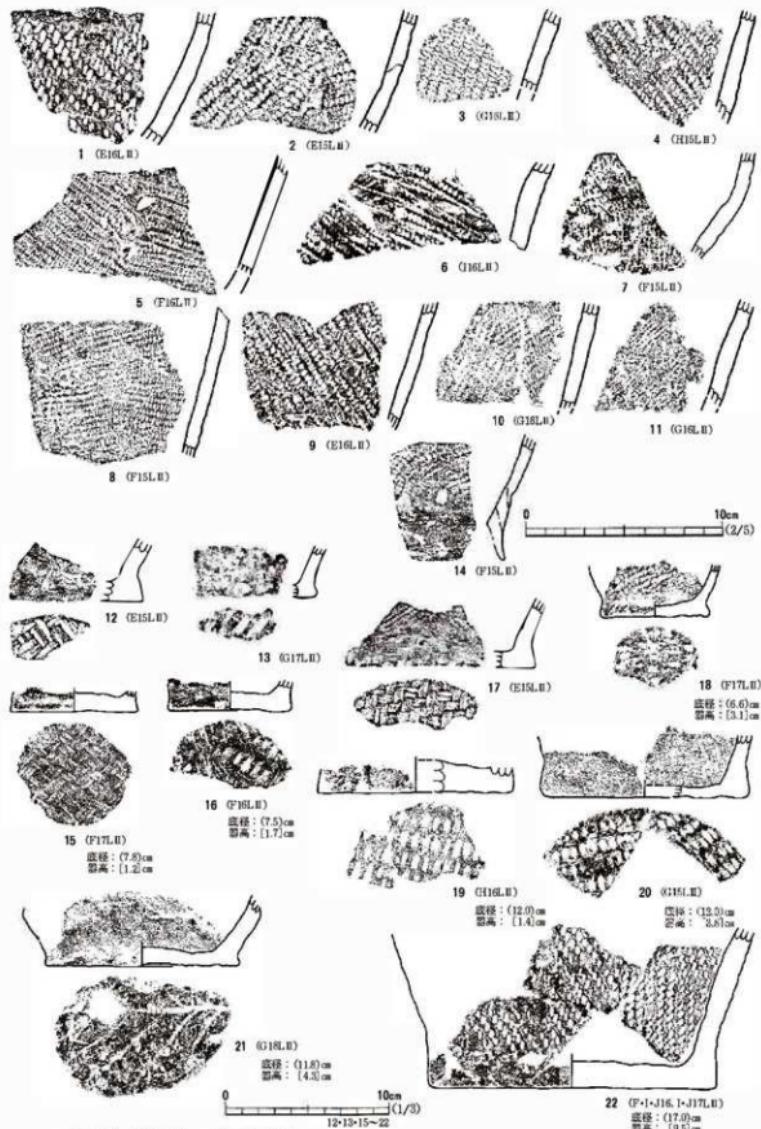


図21 遺物包含層出土 II群 5類土器

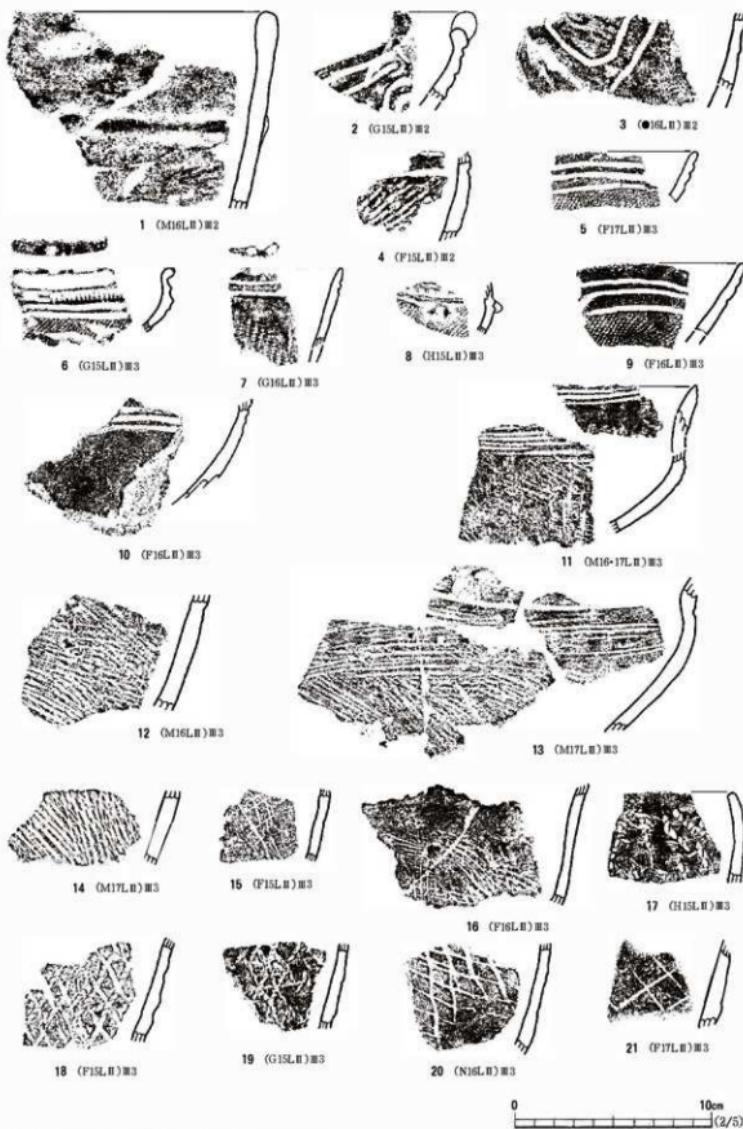


図22 遺物包含層出土Ⅱ群2・3類土器

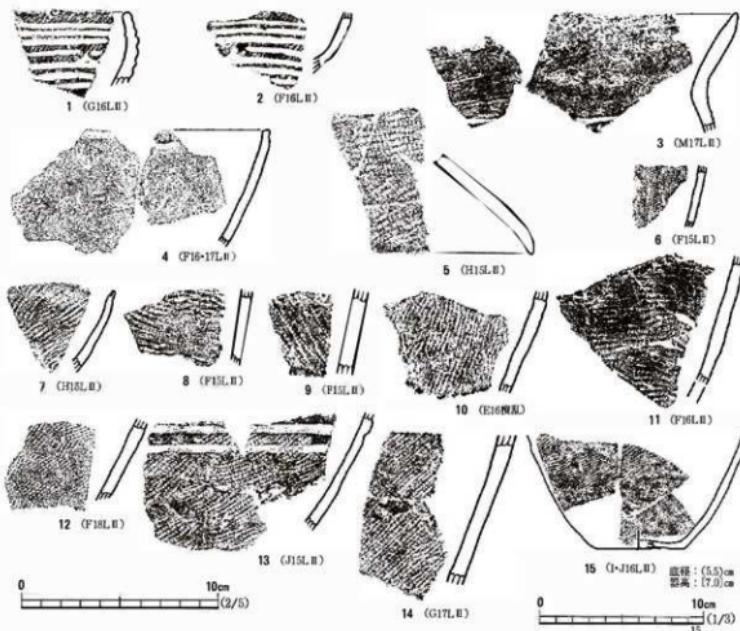


図23 遺物包含層出土土器群4類土器

### Ⅲ群4類土器（図23）

本類は、弥生時代前期の土器片を一括し、図23に示したものがすべてである。器形は、5の蓋以外は、細片のため器種を特定することが難しいが、鉢または深鉢形土器と考えられる。1・2は変形工字文を縄文地の上に描くものである。3・4は無文地の口縁部片で、3は「く」字状に大きく外傾している。6～15は胴部下半の破片で、器面に斜行縄文を主に施す。13は縄文地の上から2条の平行沈線を施したものである。

（阿 部）

### 石器・石製品（図24～28、写真6）

小池田遺跡の1次調査では、遺物包含層から出土した石器は、石鏃の他に、石槍、石匙、石錐、抉入石器、模形石器、削器、石籠、石剣未製品、刃部磨製石斧、打製石斧、チョッパー、凹石、磨石、敲石、砥石、剥片そして玦状耳飾である。

### 石 槍（図24-1）

石槍は、図24-1に示した。他にも2点の欠損品が出土しており、合計で3点になるが、図示した石槍が最も遺存度の高いものである。石材別に見ると珪質頁岩1点、ガラス質安山岩2点である。

1は、両面に精緻な調整剥離が加えられ、横断面形は凸レンズ状を呈する。基部が欠損しているが、有肩の形態をしていたものと考えられる。

#### 石 鐵 (図24-2~23)

石鐵は、抽出した22点を図24-2~23に示した。他にも未製品12点が出土しており、製品と未製品合わせて34点が1次調査区から出土している。石材別に見ると、珪質頁岩10点、頁岩3点、黒色頁岩3点、白色珪質岩1点、流紋岩8点、無鉻晶質流紋岩1点、ガラス質安山岩7点、アルコース砂岩1点である。出土点数における未製品の割合は38%である。

1・2次調査で出土した石鐵を併せて観察し、平面形状や基部の特徴の差異により、以下のように分類した。未製品については、分類の対象から除外している。また、1次調査区からは、「a類」とした有茎鐵は出土していない。

a類 基部に茎があるもの。

b類 基部に茎が無いもの。諸特徴によって、さらに6つに細分した。

b1類 基部に抉りがあり、平面形が細長い形態をしているもの。

b2類 基部の抉りが非常に浅いもの。

b3類 基部が浅く半円状に抉れているもの。

b4類 基部がやや深く半円状に抉れており、脚部末端が尖る形態をしているもの。

b5類 基部が深く三角形状に抉れており、長い脚部が作り出されているもの。

b6類 基部の抉りが半円状を呈し、脚部末端が平らな形態をしているもの。

b類 b1類は、図24-2・3に示した2点が該当する。b1類に属する石鐵は、本遺跡からは1次調査で出土したこの2点のみである。ともに左右の側縁は直線的である。2は、基部がわずかに内湾する。裏面左側で、わずかに張り出した脚部が欠損している。3は、基部がやや深く半円状に抉れ、基部両端に短く尖った脚部を作り出している。

b2類は、図24-19・21・22に示した3点が該当する。21は基部の弯曲がほとんどなく、左右の側縁が直線的で、平基無茎鐵に近い形態をしている。アルコース砂岩製で、粗質な石材から作られている。19・22の2点は、基部が弧状にわずかに内湾しており、左右の側縁が丸みを帯びる形態をしている。19は、背面に素材剥片の中央部分を残している。腹面側では、調整剥離が中央部にまで及んでいない様子が認められる。

b3類は、図24-5~7・12~15に示した7点が該当し、最も出土量の多い形態の石鐵である。左右の側縁が丸みを帯びる形態のものが多い。15は、b3類の中でも基部の抉りが深い石鐵である。5~7・12~14の6点は、基部の抉りが深い傾向にある一群で、ガラス質安山岩製のものが多く認められる。12は、抉りの形狀が爪形を呈するのが特徴的で、脚部も他に比べて最も鋭く鋏く作り出されている。

b4類は、図24-4・8・9に示した3点が該当する。左右の側縁が丸みを帯びる点が特徴的である。石材別に見ると珪質頁岩2点、ガラス質安山岩1点であり、緻密な石材が用いられている。

### 第1編 小池田遺跡（1次調査）

b5類は、図24-10・11・17・18に示した4点が該当する。左右の側縁が直線的に作られているものの割合が高い。石材は、珪質頁岩3点、黒色頁岩1点である。

b6類は、図24-16・20に示した2点が該当する。

図24-23は未製品である可能性が高いと判断したため、分類の対象としなかった。調整剥離が完全ではなく、肉厚な状態であるのが認められる。調整の最終段階で、折れてしまったものと考えられる。

#### 石匙（図25-1）

石匙は、図25-1に示した。1次調査区の遺物包含層から出土した石匙は、この1点のみである。珪質頁岩製の縦形石匙で、長軸上につまみがつく。つまみ部分への調整剥離はあまり行われず、簡素な作りとなっている。背面全体に、細かい連続した調整剥離が認められる。腹面では、右側縁には調整剥離を加えて両面調整の刃部を作り出しているが、左側縁には調整剥離を加えず片面調整の刃部としている。刃部の横断面形は菱形状で、両刃部分は厚く、片刃部分は薄く鋭い作りである。

#### 石錐（図25-2～5）

石錐は、図25-2～5に4点を示した。図示した以外にも3点の未製品が出土しており、合計で7点になる。石材別に見ると、珪質頁岩2点、粘板岩2点、流紋岩1点、無斑晶質流紋岩1点、アルコース砂岩1点と多様な石材が用いられている。2・3は、両面に丁寧な調整剥離が認められ、細く棒状に加工され、共に錐部先端が欠損している。残存した錐部の横断面形は、いずれも菱形を呈する。2は、両端部分から中央部に向かって膨らみ、平面形は不整な菱形状である。つまみは作り出されていない。3は基部に向かって幅広になり、つまみと思われる部分がある。4・5は、剥片の一端を若干加工している。錐部を作り出すことを主とした調整剥離が行われており、基部は素材剥片時の形状を残していて、特につまみらしいものは設けられていない。4・5とともに、錐部先端に磨滅が認められる。錐部横断面形は、4では三角形、5では薄い長方形である。

#### 抉入石器（図25-6）

抉入石器は、図25-6に示した。1次調査区の遺物包含層から出土した抉入石器は、この1点のみである。縦長剥片の側縁に抉れる調整が加えられており、そのくびれ部分に細かく急斜な調整剥離が認められる。背面左側縁に作り出された刃部の上部分には、磨滅の痕跡が認められる。両面とともに加えられた調整剥離はわずかであり、全体的に素材剥片時の形状を大きく残している。間接打法により剥片が取られたと見られ、腹面の打撲錐が非常に発達している。横断面形は、台形状である。石材は、珪質頁岩である。

#### 楔形石器（図25-7）

楔形石器は、図25-7に示した。1次調査区の遺物包含層から出土した楔形石器は、この1点のみである。方形を呈する剥片の上下両端から剥離痕が生じていること、剥片の上下両端に階段状の剥離痕が認められること、縦断面が凸レンズ状を呈することから、楔形石器として分類した。背面 上部縁辺中央から下へ向かい、亀裂が走っている。また、上部縁辺には鋸歯状の微細剥離が認めら

れる。背面左側縁にも、微細剥離が観察できる。腹面の大部分は、下端部側からの剥離で失われており、右側隅にボジ面がわずかに残っている。横断面形は、不整な長方形である。石材には、珪質頁岩を用いている。

#### 削 器 (図25-8・9, 図26-2・3)

削器は、図25-8・9、図26-2・3に4点を示した。図示したものの他に、7点の未製品・欠損品が出土しており、合計で11点になる。石材別に見ると珪質頁岩4点、頁岩1点、粘板岩2点、流紋岩1点、ガラス質安山岩3点である。図25-8・9は、ともに珪質頁岩製である。図25-8は、円形の削器である。背面には粗い、腹面には細かい調整剥離が認められる。腹面の右側縁に刃部を作り出しており、磨滅の痕跡も確認できる。図25-9は未製品である。基部の幅が狭い台形状で、両面の側縁部を中心に丁寧な調整剥離が認められる。台形の底辺に、鋭い縁辺を残している。腹面下部に、ボジ面を確認できる。図26-2・3は、ともに粘板岩製の縦長削器で、横断面形は凸レンズ状を呈する。図26-2は、腹面右側縁の刃部に磨滅が認められるため、削器とした。腹面全体には粗い調整剥離が加えられている。背面には、左側縁部のみに粗い調整剥離が加えられ、自然面が大きく残っている。図26-3は、削器の未製品または石剣の未製品である可能性が考えられる。先端の尖った平面形であり、背面上部側縁に基部を作り出す整形剥離が認められる。

#### 石 篦 (図25-10)

石箒は、図25-10に示した。1次調査区の遺物包含層から出土した石箒は、この1点のみである。10には、分厚い素材剥片が用いられている。両面に整形剥離が認められ、細かな調整剥離は刃部に集中し、基部に向かって簡素になる。刃部は、鋸齒状に作り出されている。横断面形は、台形状である。石材には、頁岩を用いている。

#### 石剣未製品 (図26-1)

石剣未製品は図26-1に示した。1次調査区の遺物包含層から出土した石剣は、この1点のみである。石材には、粘板岩を用いている。石槍の未製品である可能性も考えられるが、石槍にしては細身であるので石剣とした。側縁部を主として、両面に調整剥離が施され、研磨の痕跡は見られない。

#### 刃部磨製石斧 (図27-1・3)

刃部磨製石斧は、図27-1・3に示した。他にも4点の磨製石斧の欠損品・小破片が出土しているが、刃部まで遺存しているものは図示した2点の刃部磨製石斧のみである。石材別に見ると頁岩1点、粘板岩2点、緑色凝灰岩1点、輝緑凝灰岩2点である。1は、小形の刃部磨製石斧である。粘板岩の偏平な自然縁を彫形している。背面上部と先端部に、自然面を残す。腹面の先端にのみ研磨を加え、後は自然の形状を生かして刃部を作り出されている。刃部の形状は、弧状である。横断面形は、三角形状である。3は、頁岩の偏平な自然縁を石材としている。背面と、背面上部・右側縁が剥離しているが、基本的には自然縁の形状を生かした作りとなっている。腹面先端と右側縁に研磨を加えている。刃部は縁の先端に作り出され、腹面の研磨以外は自然の形状を生かし、弧

### 第1編 小池田遺跡（1次調査）

状の刃部としている。刃部を作り出す際に、仕上げに加える細かい研磨痕の他、最初に大まかに整形した際の粗い研磨痕も認められる。横断面形は、不整梢円形状である。

#### 打製石斧（図27-2・4・7）

打製石斧は、図27-2・4・7に抽出した3点を示した。他にも4点の未製品が出土しており、合計で7点を数え、石材はすべて粘板岩製である。2は、分銅形の打製石斧である。両面の下側縁に調整剥離を加え、両刃の刃部を作り出している。横断面形は、凸レンズ状である。4は、両面の上部と下側縁に調整剥離が認められ、上下に両刃の刃部を作り出されている。また、背面右側縁にも細かな調整剥離が加えられ、片刃の刃部となっている。右側縁の刃部は磨滅しており、使用痕であると考えられる。横断面形は、台形状である。7は、小形の打製石斧である。石材を擦形に整形しており、背面に大きく自然面を残す。背面下側縁右側と腹面下側縁左側に細かな調整剥離が認められ、両刃の刃部を作り出している。横断面形は、凸レンズ状である。

#### チョッパー（図27-8）

図27-8に、1点のチョッパーを示した。1次調査の遺物包含層から出土したチョッパーは、この1点のみである。粘板岩製の偏平な自然礫を石材としている。背面の上部を加工して、片刃の刃部を作り出している。腹面の中央部には、浅い敲打痕が2ヶ所形成されている。下側縁にも、わずかに敲打痕が認められる。横断面形は、台形状である。

#### 凹石・磨石・敲石（図27-5・6・8～11、図28-1・2）

図27-5・6・9～11、図28-1・2に7点の磨石・凹石・敲石を示した。他に18点の磨石・凹石・敲石が出土しており、合計で25点になる。その中で、遺存状態の良い7点を抽出し図示した。石材別に見ると石英岩1点、砂岩9点、泥岩1点、粘板岩4点、チャート1点、無斑晶質流紋岩1点、輝石安山岩2点、ディサイト4点、細粒花崗閃綠岩1点、花崗岩1点である。

図27-5は磨石である。石材には、断面が円形状を呈する細粒花崗閃綠岩の自然礫が用いられている。磨り面が1ヶ所認められ、稜を形成している。磨り面の左側面中央には、敲打による窪みが形成されている。礫の上部・下部にも、敲打痕らしい浅い窪みがいくつか認められる。

図27-9・10、図28-1・2は凹石である。図27-9・10、図28-2の3点は、礫の面中央部に敲打による窪みが形成されるものである。図27-9は、左右が欠損した砂岩自然礫を石材としており、礫の両面に窪みが認められる。図27-10は、輝石安山岩の自然礫を石材としている。両面の中央部に、広くて浅い敲打痕が形成されている。下側面にも、わずかに敲打痕を確認できる。図28-2は、直方体を呈する砂岩自然礫を石材とし、両面と側面の4面に敲打による窪みを1点ずつ形成するものである。窪みは、各面の中央部に作り出されている。礫の上部と下部は欠損しており、敲石として使われていた可能性もある。図28-1は、棒状のもので磨られて窪みが形成されたと考えられる。砂岩自然礫を石材とし、左側と下部を欠損している。窪みは、礫片面の中央よりや右下側に形成されている。窪みは径約1.2cmの円形状で、深さは約0.4cmを測る。小さく、深い窪みが特徴的である。窪みの断面形は、半円状を呈する。

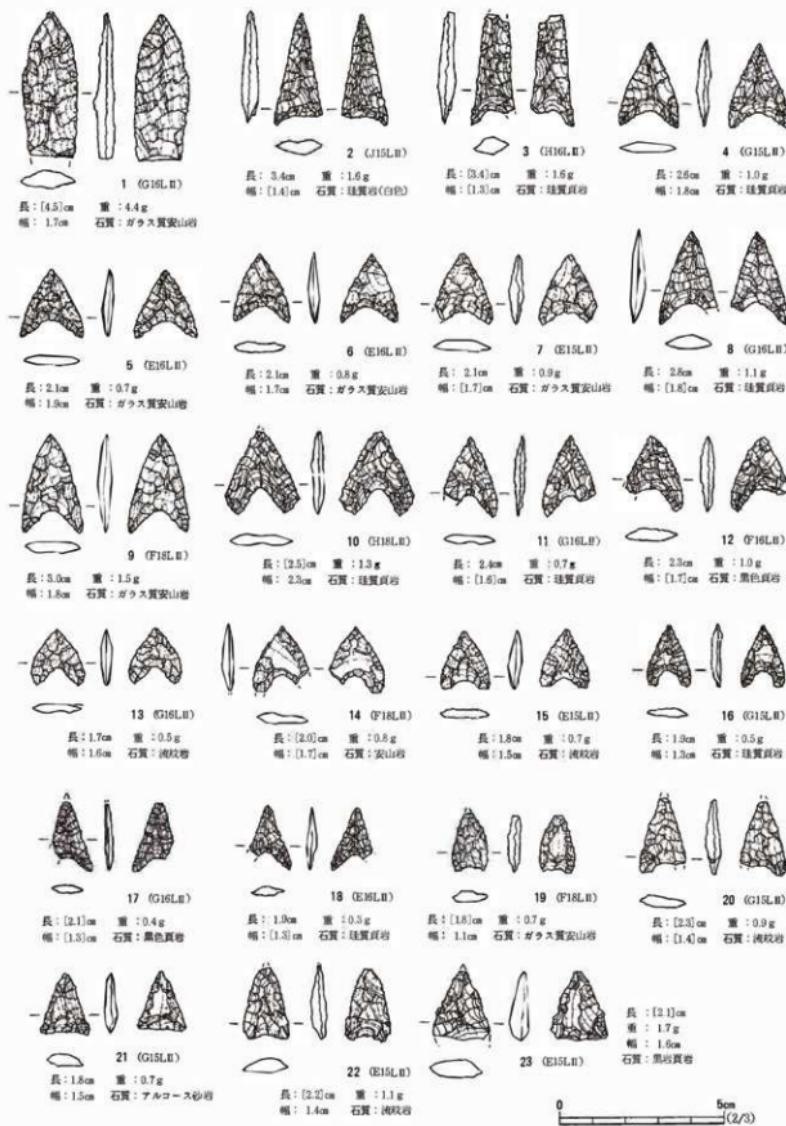


図24 遺物包含層出土石器(1)

第1編 小池田遺跡（1次調査）

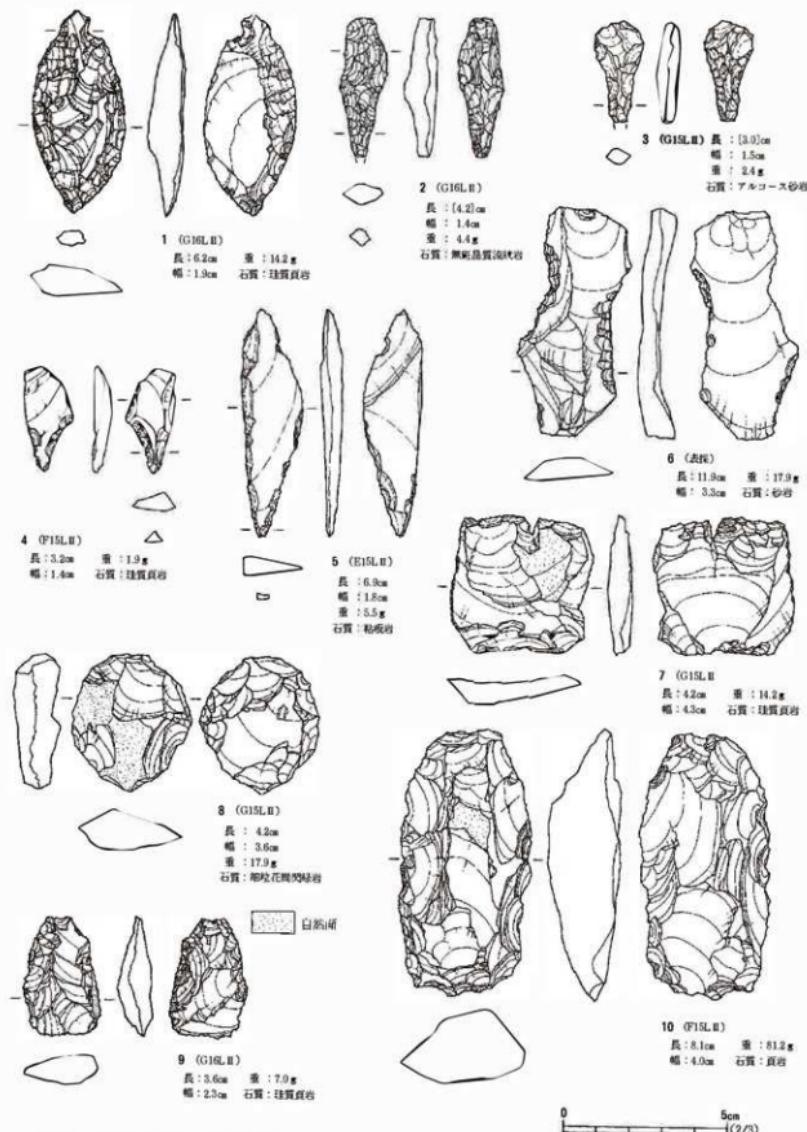


図25 遺物包含層出土石器(2)

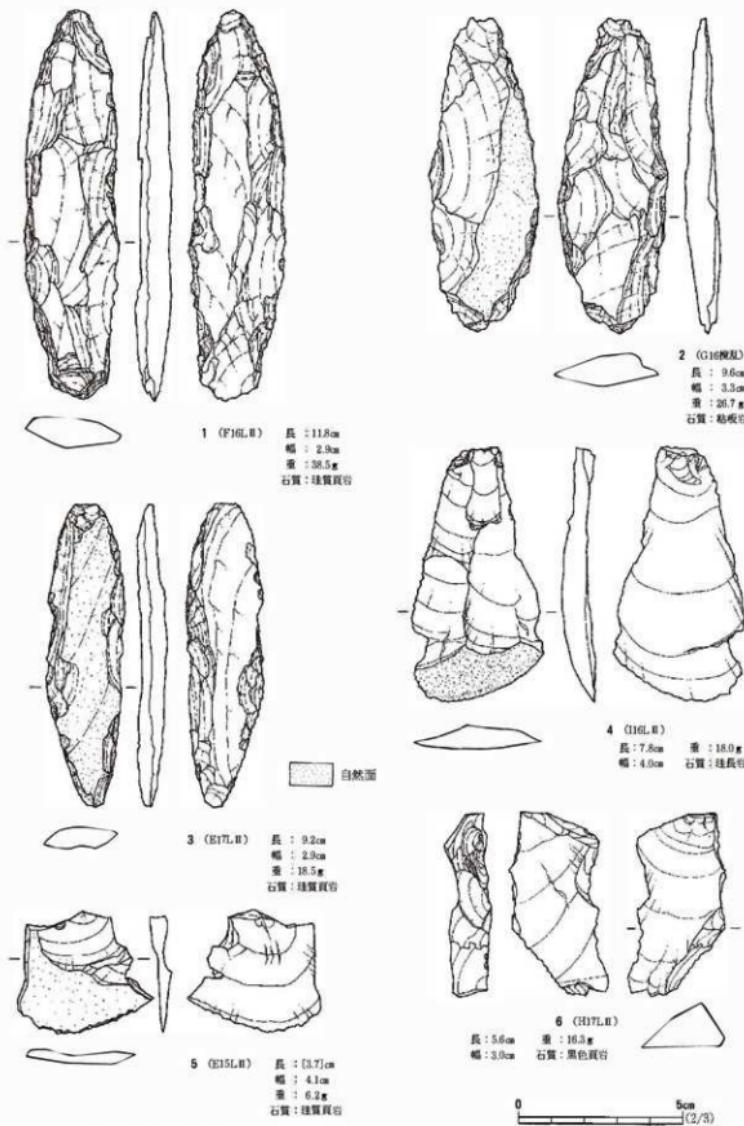


圖26 遺物包含層出土石器(3)

第1編 小池田遺跡（1次調査）

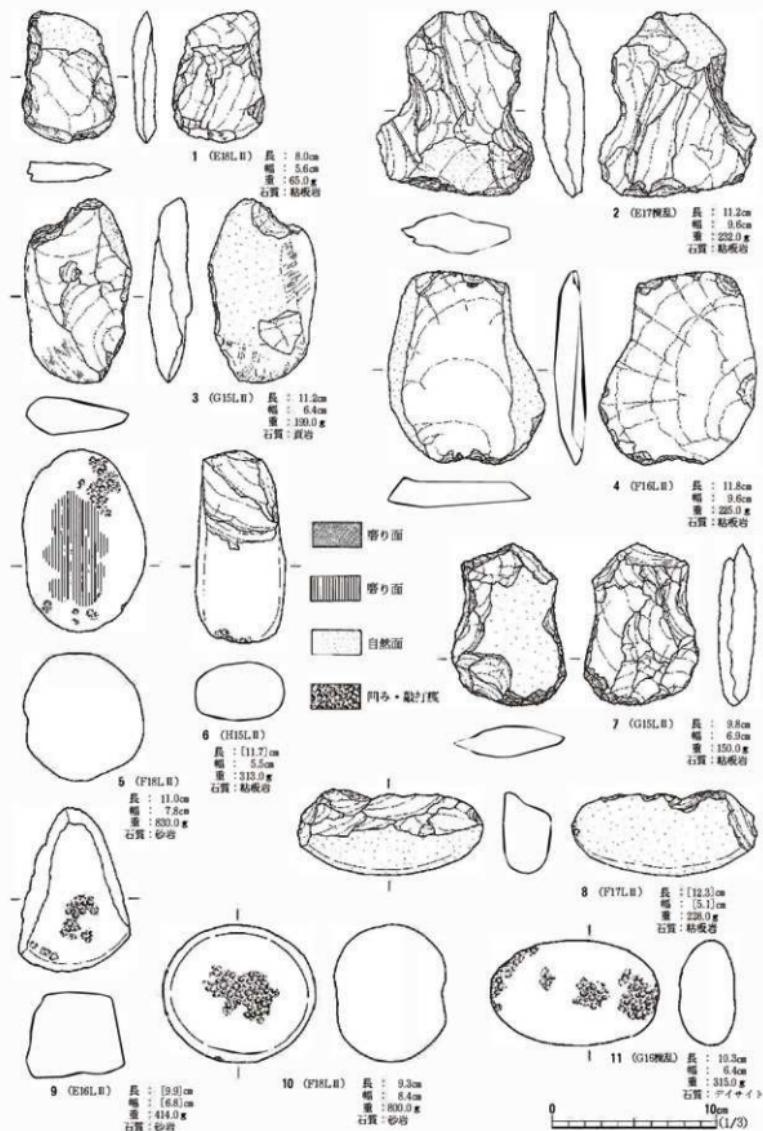


図27 遺物包含層出土石器(4)

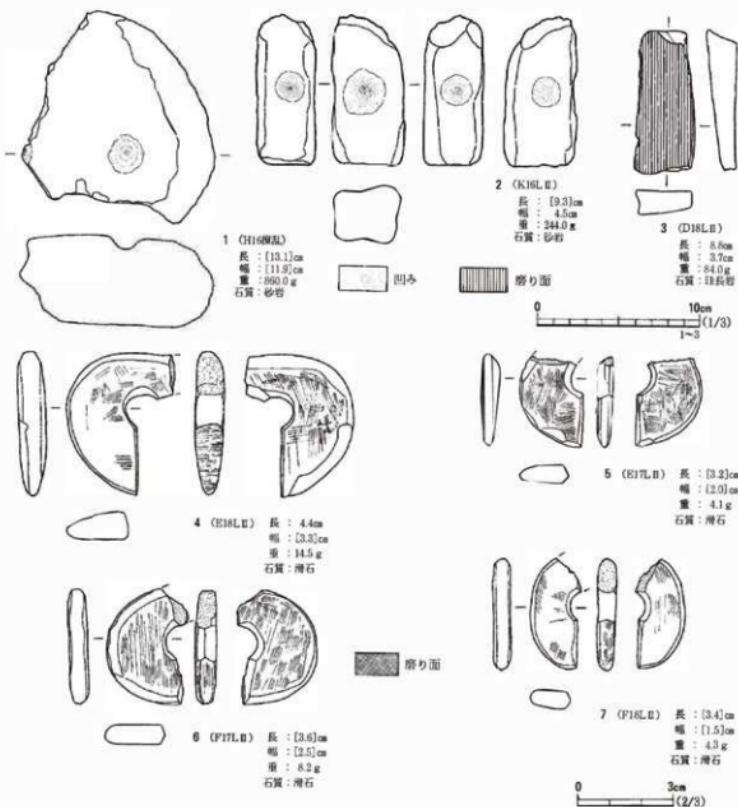


図28 遺物包含層出土上石器・石製品

図27-6・11は敲石である。図27-6は、粘板岩の自然縫を石材としている。縫の上部と下部に、敲打痕が認められる。上部は、敲石として使用中に割れてしまったものと考えられる。図27-11は、デイサイトの偏平な自然縫を石材としている。表面左側縁と下側縁右側に、敲打痕が認められる。両面中央にも敲打による浅い窪みが形成されている。

#### 砥 石 (図28-3)

図28-3に古代の砥石を示した。1次調査の遺物包含層から出土した砥石は、この1点のみである。石材は、直方体をした珪長岩の自然縫が用いられている。自然縫の片面全体に、縦方向へ磨った痕跡が認められる。横断面形は、不整な長方形を呈している。古代の所産と考えられる。

剥 片（図26-4～6）

剥片は、図26-4～6に3点を示した。すべて頁岩系の石材である。4は台形状の縦長剥片で、背面の左側縁に微細剥離が認められる。断面形は三角形状である。5では、貝殻状剥片の底辺に微細剥離を確認できる。6は、打面再生剥片である。背面の左側面の剥離痕は、石核の打面・石核作業面の一部と見られる。したがって打面再生にあたっては、打面を90°転位して本資料を剥離したことが分かる。石核の打面線にあたる部分が階段状に潰れており、打面を再生したことをうかがわせる。本資料の主要剥離面にみる打瘤は非常に発達しており、ハードハンマーによる打撃が想定される。また、腹面の左側縁下部に微細剥離が認められる。

块 状 耳 飾（図28-4～7）

块状耳飾は、図28-4～7に4点を示した。他に破片が1点出土しているが、非常に細かいため図示できなかった。すべて滑石製の欠損品である。全体に研磨が施されている。4は、偏平な角のとれた逆三角形状に整形されており、中央よりやや上側に穿孔されている。厚さ0.8cmと、肉厚な点が特徴的である。下端から穴への切断面は、丁寧に研磨されて平らに整形されている。横断面形は、角のとれた三角形状である。欠損面に加工は認められない。5は、遺存度の低い欠損品であるが、偏平な円形に整形され、ほぼ中央部に穿孔されていたものと考えられる。下端から穴への切断面は、背面側から腹面側に向かって若干傾くものの、丁寧に研磨されて平らに整形されている。横断面形は、角のとれた不整長方形状である。欠損面に加工は認められない。6は、偏平な横長楕円形に整形されており、中央よりやや上側に穿孔されている。下端から穴への切り込みは、腹面側から磨り切られている。両面と側面の間に明確な稜を作り出しているため、横断面形は隅丸方形状を呈する。欠損面に加工は認められない。7は、偏平な縦長楕円形に整形されており、中央よりやや上側に穿孔されている。下端から穴への切断面は、丁寧に研磨されて平らに整形されている。横断面形は楕円形で、丸みを帯びている。欠損面にも研磨の痕跡が認められる。

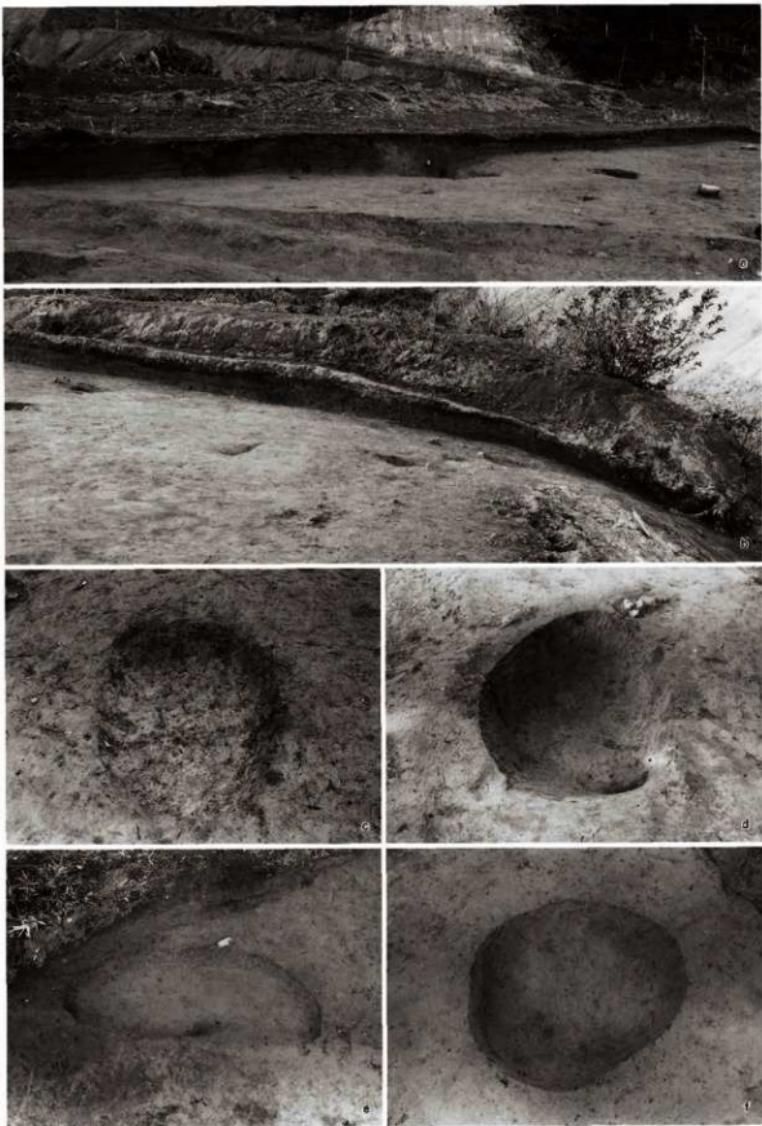
（今野）



1 調査区全景

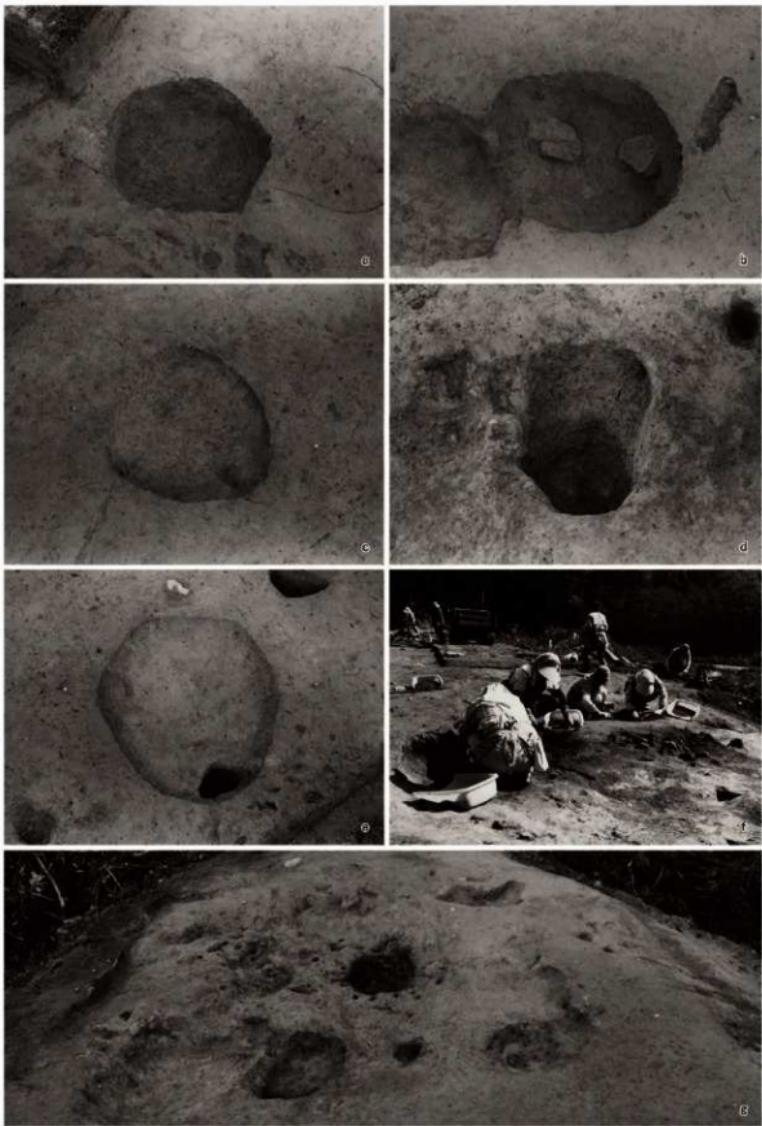
a 調査前調査区近景（南から）  
b 調査区遠景（東から）

第1編 小池田遺跡（1次調査）



2 基本土層、土坑

- a 基本土層1（南西から）
- b 基本土層2（南から）
- c 1号土坑全貌（南東から）
- d 2号土坑全貌（南から）
- e 3号土坑全貌（南西から）
- f 4号土坑全貌（南から）



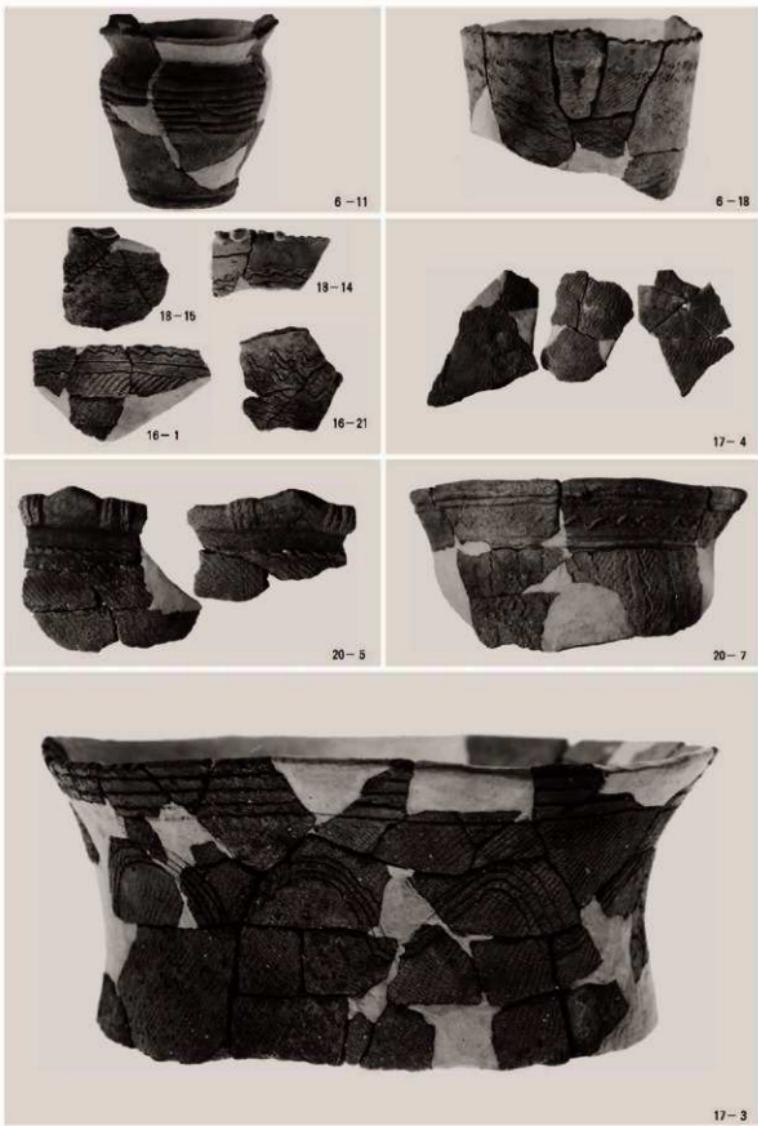
3 土坑、集石遺構

a	5 号土坑全景（南東から）	b	6 号土坑全景（南東から）
c	7 号土坑全景（南西から）	d	8 号土坑全景（東から）
e	9 号土坑全景（南西から）	f	作業風景（西から）
g	1～3号集石遺構近景（東から）		

第1編 小池田遺跡（1次調査）

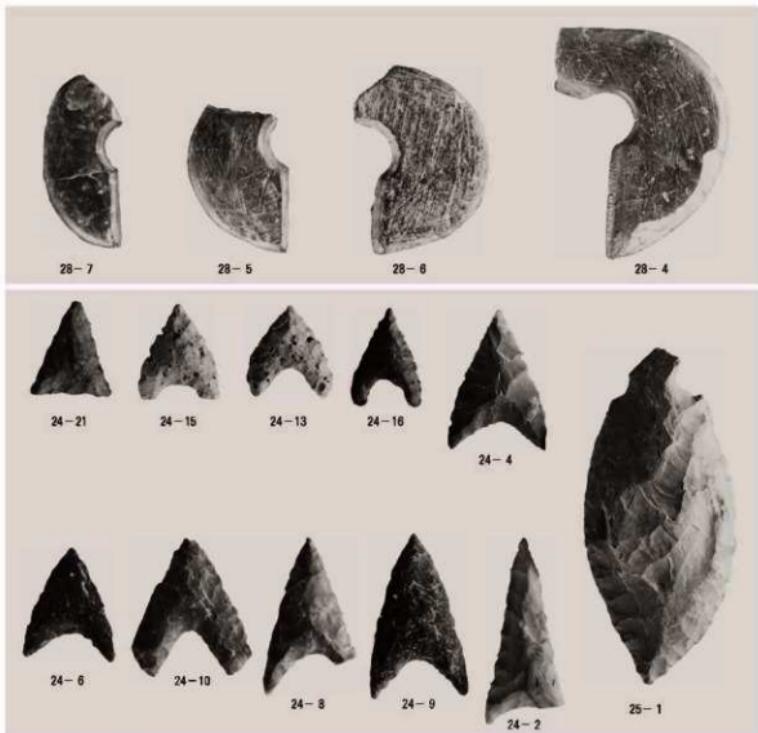


4 集石遺構、焼土遺構  
特殊遺構、遺物包含層



5 出土遺物(1)

第1編 小池田遺跡（1次調査）



6 出土遺物(2)

# 第2編 小池田遺跡

(2次調査)

遺跡略号 MSC-KI

所在 地 南相馬市原町区深野字小池田

調査期間 平成19年4月9日～5月20日

調査員 阿部 知己・堤 仙匡・今野沙貴子



## 第1章 調査経過

小池田遺跡は、遺物の散布が確認されたことにより、急速平成18年度に新たに発見・登録となつた遺跡である。同年9月には、常磐自動車道建設地内の4,800m<sup>2</sup>を対象に試掘調査が実施され、南へと張り出した丘陵部分を中心に3,800m<sup>2</sup>が保存を要する面積とされた(福島県教育委員会2007)。

発掘調査については、平成18年度に1,000m<sup>2</sup>を対象に1次調査を実施し、土坑8基、集石遺構3基、焼土遺構1基、特殊遺構3基、遺物包含層1,000m<sup>2</sup>を確認した。平成19年度は、残りの2,800m<sup>2</sup>を対象に2次調査を実施した。以下に、2次調査の概要を記す。

4月9日には、調査員3名を配置し、調査区の範囲確認や周辺住民への挨拶、そして器材の搬入などを実施した。2次調査区の2,800m<sup>2</sup>については、平成18年度末に表土剥ぎを先行して実施していたが、表土剥ぎ時の指示を誤り、地表面から20~30cmの深さ掘削したため、縄文時代前期後葉の遺物を主に包含する褐色砂質土(L II)の上層を除去してしまった状況であった。

4月12日から作業員15名を投入し、本格的な調査に着手した。L II面での検出作業を進めると、調査区の南側から落し穴状土坑や木炭窯跡などが相次いで検出され始めた。調査区の西端に沿って、トレンチを設け堆積土層の確認を実施した結果、厚さ10~20cmの黒褐色砂質土の表土(L I)の下から、縄文時代前期後葉の遺物を包含した黄褐色砂質土(L II)、調査区の基盤をなす黄褐色系の砂質土(L IIIa~c)、そしてその下層に砂岩を主体とした砂礫層(L V)が堆積することを確認した。

L IIは、調査区のほぼ全域を覆っていることが判明した。遺物の取り上げについては、1次調査時には光波測距儀を使って遺物の取り上げを実施していたが、1次調査の成果を精査すると、観察している土層が調査区境の1本のみとなかったため、遺物の出土位置と出土層位との関係を十分に検討できないことが分かった。そのため、2次調査での遺物の取り上げについては、1次調査の手法は踏襲せず、各グリッド内において堆積土層を除去するごとに遺物を取り上げ、併せて遺構の検出と土層の観察を進めた。

4月下旬には、作業員16名を増員し、合計34名の作業員と調査員3名で、遺物包含層であるL IIの掘り下げと、遺構検出・精査そして遺構の図化作業を行った。5月中旬には、遺物を包含したL II層の掘り下げと遺構検出の進捗に伴い、土坑、木炭窯跡そして4軒の竪穴住居跡以外に遺構が無いことが分かってきた。5月下旬以降には、遺構の精査と併行して、再度検出作業を実施した。遺構および遺物包含層の掘り残しが無いことを確認した上で、5月30日に発掘調査を終了した。同日中に、福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団と東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所による現地の終了確認及び引き渡しを実施した。

平成19年度の小池田遺跡の2次調査で検出した遺構は、竪穴住居跡4軒、土坑7基、木炭窯跡2基、遺物包含層2,800m<sup>2</sup>で、発掘調査に要した日数は延べ37日である。

(阿 部)

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 遺構の分布と基本土層

#### 遺構の分布（図1、写真1・2）

小池田遺跡の2次調査では、南へと張り出す丘陵の平坦面を対象とした。検出された遺構は、堅

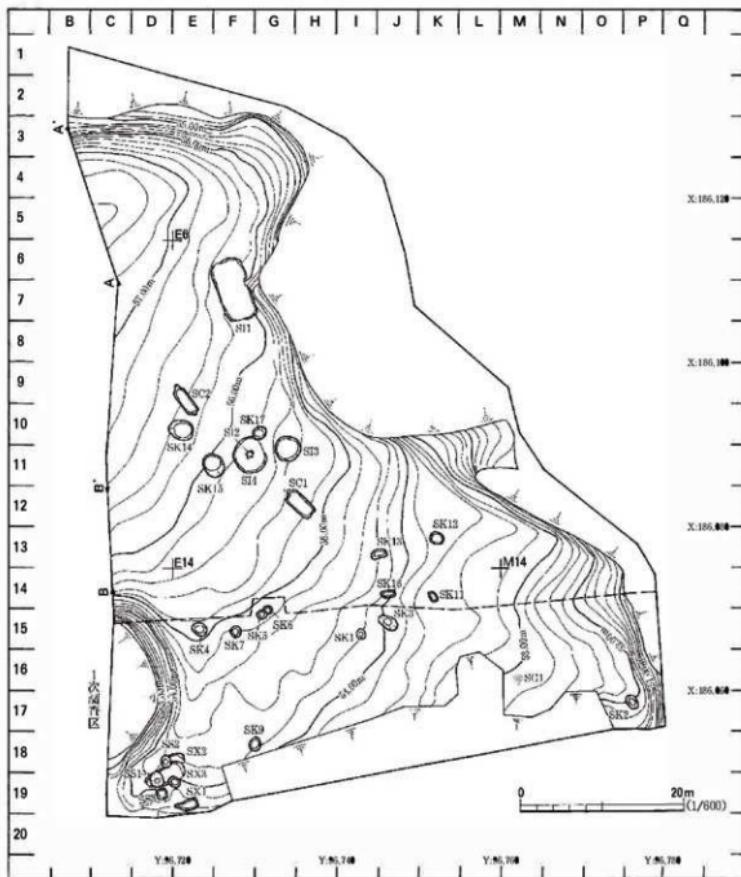


図1 遺構配置図

穴住居跡4軒、土坑7基、木炭窯跡2基と遺物包含層である。造構の分布には粗密があるものの、概ね2次調査区の中央部に集まっている。造構別に分布状況をみると、豊穴住居跡は調査区の北側に1軒(S I 1)、中央部に3軒(S I 2~4)が位置する。このうち1号住居跡は、縄文時代前期中葉(大木2a式期)に属し、隅丸方形の平面形を呈した大型のものである。この住居跡は、廃絶後、縄文時代前期後葉(大木4式期)の遺物を大量に包含した黄褐色砂質土(L II)に上層が覆われ埋没していた。1号住居跡と同時期の造構は、1・2次調査区内では他に確認できていない。

円形を呈した2~4号住居跡は、縄文時代前期後葉(大木4式期)に属している。大木4式期の造構は、他に確認できていない。土坑は、1・2次調査区境付近に散在している。7基の土坑のうち、2基が落し穴状土坑(S K 13・16)である。木炭窯跡は、調査区中央部に位置し、長軸方向を概ね同じくして造られている。時期については、年代測定の結果から中世である可能性が高い。

平成18年9月の試掘調査時に出土した赤焼土器に関連する9世紀後半頃の造構については、2次調査区内でも確認できなかった。

1次調査時の成果を加えた小池田遺跡の造構数は、豊穴住居跡4軒、土坑15基、木炭窯跡2基、集石造構3基、焼土造構1基、特殊造構3基そして3,800m<sup>2</sup>の遺物包含層である。

また、小池田遺跡の調査区境から、谷筋に沿って北西へ約200m(第1編図1左上、方位の位置から約50m北西)の川底から大量の流出岸を探取することができる。このことから、小池田遺跡のある常磐自動車道建設予定地の西側には、新たに製鉄関連遺跡が存在していることが分かった。

#### 基本土層(図2、写真2)

平成19年度に発掘調査を実施した2次調査区の基本土層については、色調、混入物等からL IからL Vの5層に細分された。堆積状況の確認は、2次調査区西端で土層の観察を行っている。L IIIについてはa~cの3層に細分できた。

L Iは、黒褐色砂質土で、調査区全体を覆う表土である。2次調査区には西端に沿って幅2mほど残存していた。層の厚さは10~70cmで、層中から縄文土器・弥生土器片がわずかに出土している。

L IIは、黄褐色砂質土で、調査区のはば全域で確認できた土層で、層厚は10~45cmである。調査区北側法面肩部付近では本地層直下に、砂礫層(L V)が堆積することを確認した。本地層中には、縄文時代早期後半~中期前葉・後期・晩期、弥生時代前葉の遺物が含まれている。包含される遺物の多くは、縄文時代前期後葉の遺物である。

L III~L Vは、丘陵平坦面の基盤をなす地層で、すべて無遺物層である。

L IIIaは、明黄褐色砂質土で、丘陵平坦面のはば全域に堆積する。層の厚さは、調査区北側で図3下段に示したS I 1の土層断面C-C'をみると約6cm、調査区南側では図18左上に示したS K 16の土層断面A-A'をみると約4cmと、南へ向かって薄くなっている。

L IIIbは、にぶい黄橙色砂質土で、S I 1周辺に堆積し、細かい粒径の砂礫層(L IIIc)への漸移層である。層中には遺物を含まず、5~10cm大の砂岩が多く混ざっている。層の厚さは、図3下段に示したS I 1の土層断面C-C'をみると約5cmである。

## 第2編 小池田遺跡（2次調査）

L IIIcは、明褐色砂礫層で、細かい粒径の砂礫層である。図18で示したSK16の土層断面A-A'でみると層の厚さは約48cm、L IIIaの直下に堆積している。

L IVは、灰黄褐色粘質土で、図17・18で示したSK13・16（落し穴状土坑）の底面は、この地層中に形成される。

L Vは、砂岩を主体とする褐色砂礫層である。2次調査区の北側では、遺物を包含したL II直下で本地層を確認した。  
(阿部)

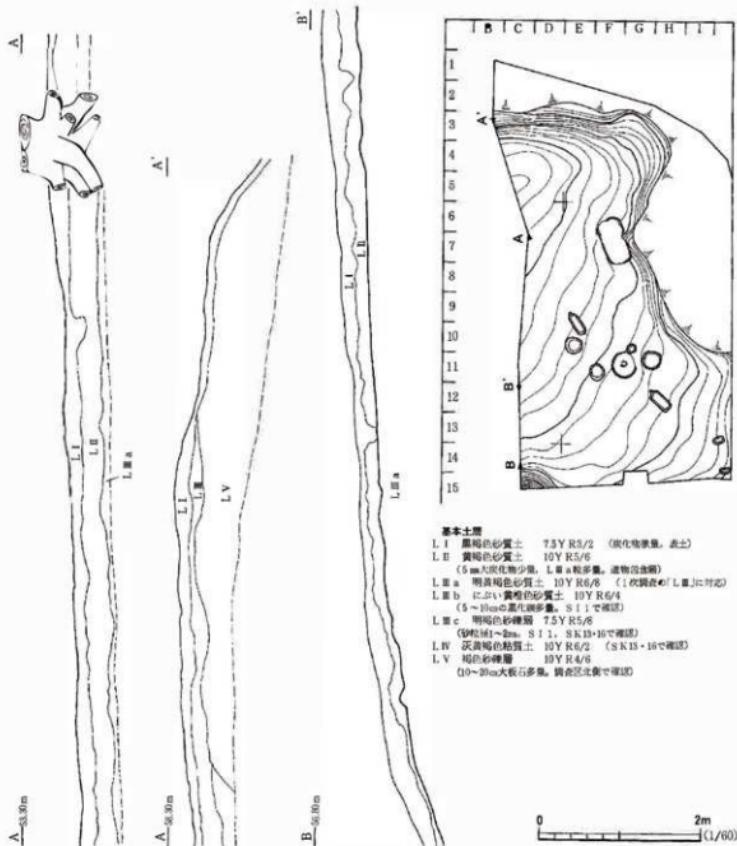


図2 基本土層

## 第2節 出土遺物の分類

小池田遺跡の2次調査で出土した土器については、「第1編第2章第2節 出土遺物の分類」に載って、以下のように時期分類した。挿図中には、その分類番号を1点ごとに略表記し、該当する時代・時期を示した。例えば、II群3類の土器は「II 3」のように表記した。

土製品、石器、石製品については、形態ごとの分類に留めた。石器、石製品については、出土位置、計測値と併せて、石質鑑定の結果を参考に石質を表記した。  
(阿 部)

## 第3節 壇穴住居跡

小池田遺跡の2次調査では、4軒の壇穴住居跡の調査を実施した。4軒の住居跡は、調査区の中央部および東側に位置する。それぞれの所属時期については、1号住居跡は縄文時代前期前葉、2・4号住居跡は縄文時代前期後葉の所産である。

### 1号住居跡 S 1 1

#### 造 構(図3・4、写真3・4)

本住居跡は、調査区北寄りのF・G 6～8グリッドに位置し、L II中層およびIIIa上面で検出した。平面形は、上端では南北に長い不整橢円形を、中端と底面で隅丸長方形を呈する。規模は、中端で8.0×4.2m、底面で7.5×3.8mを測る。長軸方向はN19°W、検出面から床面までの深さは最大80cmである。床面はL IIIb上面に形成され、一様に平坦である。周壁は、底面から50cmの高さまで急傾斜で、それより上位では緩い傾斜となって立ち上がる。

住居跡内からは、17個の小穴を確認した。そのうち、主柱穴と考えられる小穴は、P 1～4、6～9の8個である。8個の主柱穴は、それぞれ東西南北一直線上に配置されている。主柱穴の平面形は、不整な円形あるいは橢円形を呈する。規模は、上端で長軸40～60cm、床面からの深さは23～58cmである。断面形状をみると、P 6・9以外はほぼ垂直に掘り込まれ、柱穴の底面はL IIIb中またはL IIIc上面に形成されている。P 6・9の断面形(図3下段C-C')をみると、垂直方向に対して30°ほど住居跡の内側に傾けて掘り込まれている。主柱穴の中心を測った心々距離は、P 2-P 3、P 3-P 4、P 6-P 7、P 7-P 8間で230～250cm、P 1-P 2、P 8-P 9間で280～290cmである。東西方向のP 1-P 9、P 2-P 8、P 3-P 7、P 4-P 6の心々距離は160～180cmである。東列であるP 1～4と、西列であるP 6～9の間の距離は120cm前後である。

西壁際に検出したP 10～13の4個の小穴は、主柱穴に比べ直径が小さく、それぞれ180cm前後の等間隔で並ぶことから判断すると壁柱穴と考えられる。壁柱穴の平面形は不整な橢円形で、規模は上端で25～35cm、床面からの深さは28～35cmである。

他に、主柱穴・壁柱穴と比べて浅い小穴を5個（P 5・14～17）確認した。そのうち、P 14～17の4個は、主柱穴のP 2とP 8の間に挟まるように配置されている。P 5は、P 4と重複し、その新旧関係は明確にできなかった。これら5個の小穴の平面形は、P 5・17が円形、残りの3個の小穴（P 14～16）は不整橿円形を呈する。規模は、長軸30～70cm、床面からの深さは17～27cmである。これらの小穴は、主柱穴を補助した支柱穴である可能性も考えられる。

堆積土は8層に分けられる。I 1はIIに相当し、本住居跡の内外を覆い、層中には縄文時代前期後葉の遺物を多く包含している。I 8は17個の小穴内堆積土で、炭化物を僅かに含んだ褐色砂質土である。I 2～6は、いずれもレンズ状の堆積状況が認められることから自然堆積土と判断した。P 1～P 9間の床面からは、砂岩の台石を（図10-7）確認した。

#### 遺 物（図5～10、写真9）

遺物は、堆積土中および床面上から縄文土器片1,227点、石器73点が出土した。そのうち、出土した遺物の約2割はI 1からの出土である。I 1～6から出土した遺物の大半は、縄文時代前期後葉の大木4式土器とそれに併行する土器片であった。I 7および床面から出土した縄文土器片64点の多くは、縄文時代前葉大木1・2式土器の破片である。以上のうち、抽出した縄文土器75点を図5～9に、石器7点を図10に示した。

本住居跡に伴う遺物は、図5-4・7・8・10～12の深鉢形土器片と、図10-7の合石である。図5-4・10～12は、大木2a式土器に比定される土器片で、いずれも胎土に纖維混和痕が認められる。4の胴部片は、斜行縄文地に、半截竹管で複列の波状沈線を描いている。7・8は器面に斜行縄文のみを施している。10・11の波状口縁部片は、半截竹管を用いて口縁部に沿って複列の平行沈線を施している。12は、床面から数cm上で出土したもので、口縁部に半截竹管を用いて複列の波状文を施し、胴部には非結束の原体による羽状縄文で、菱形状に施文している。図10-7は床面から出土した砂岩製の合石で、大型礫の片面に敲打による僅かな凹みが形成されている。

以下、I 1～6から出土した縄文土器は土器型式別に、石器については器種別に説明する。

図5には、大木1式および大木2式土器の深鉢形土器片を示した。このうち、図5-1～3・5・6は大木1式の土器片で、いずれも器面に重層するループ文を施文し、胎土に纖維混和痕が認められる。1の口縁部片は、口縁上端部に縦のスリットを、その下には3条の平行沈線文と、重層するループ文を施す。5は非結束の原体で羽状縄文を、6は斜行縄文を施している。

図5-9・13は大木2b式土器に比定されるもので、13の体部上半部には半截竹管を用いた刺突文帯により直線の図柄を描き、その図柄の交点または中心部に竹管円形刺突文を、体部下半にはS字状連鎖燃糸文を施している。

図6-1～5・18・19には浮島および諸磣系の深鉢形土器片を示した。図6-1～4は、浮島系の土器である。1・4は浮島II式土器に比定され、4の器面には2本1組の平行沈線を集合させて菱形文を描いている。2・3は浮島II式土器に比定され、いずれも貝殻の口に当たる部分を用いて波状貝殻文を横位に施している。2の口縁上端には縦のスリットを施文している。図6-5・18・

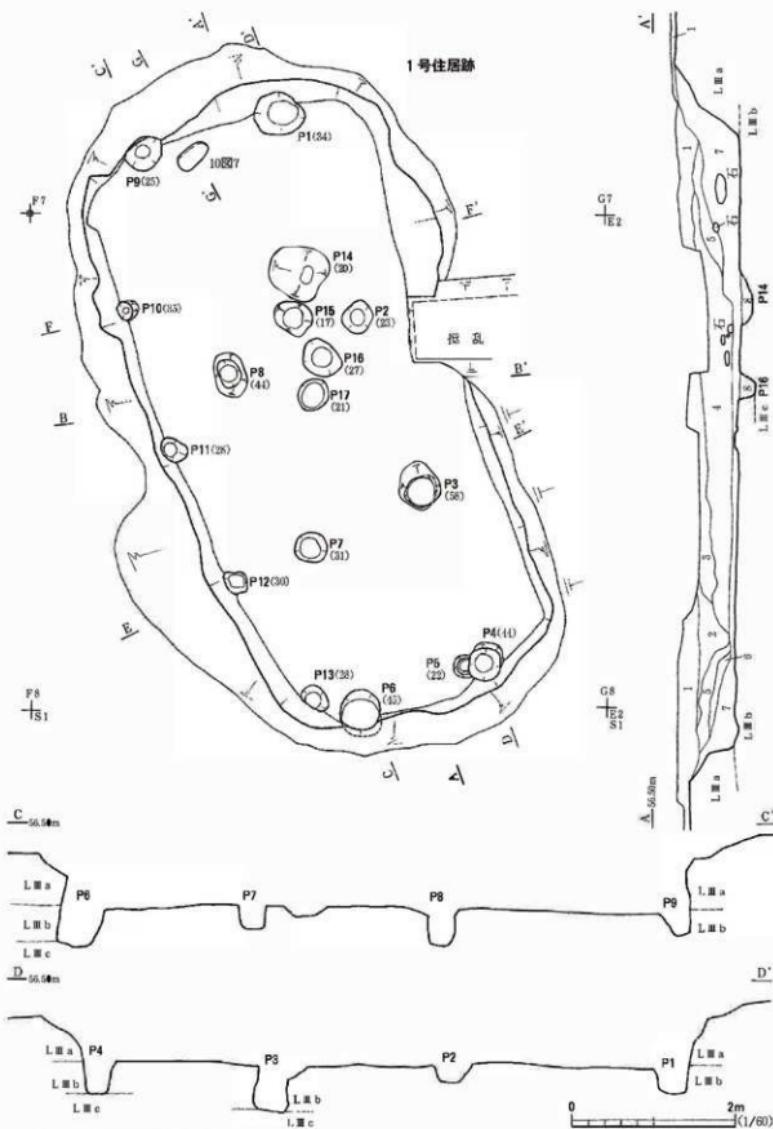


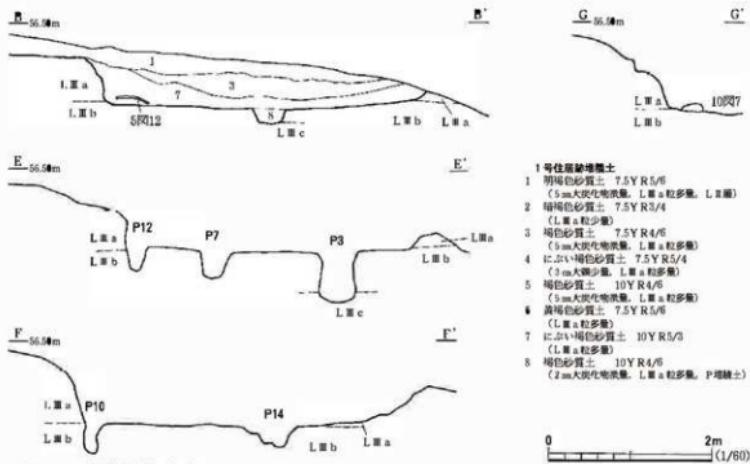
図3 1号住居跡（1）

19は諸磯系の土器片である。5は諸磯b式の口縁部片で、横の区画を爪形文で描いている。18・19は諸磯a式に比定される。18・19は同一個体の口縁部片で、口縁部に平行する爪形文を口縁部直下と体部上半に描き、その間に半截竹管を用いて縦の区画線と波状文を描いている。

図6-6～17・20、図7、図8-1～12、図9-3は、大木4式土器の深鉢形土器片を示した。全体形状の分かれる個体は、図9-4に示した1点しかない。内面の調整は、ヘラ状工具を用いたケズリのような擦痕を施したものが多いのが特徴である。胎土には、纖維混和痕が認められるものもあるが、ほとんどの土器片では見られなかった。図6-6～17、図7-1～7・9は、区画された口縁部無文帶内に、沈線文で文様を描いている。図6-6・7・14・16は口縁部に平行する複列の沈線文と、渦巻文、縦の波状文を組合せている。図6-20、図7-1・2は、斜行縄文地の上から、沈線文を描いている。図6-20の波状口縁部片は、口縁に平行する2条の平行沈線と、雷状の文様を組合せ施文している。図7-1・2は同一個体で、口縁部無文帶の境界付近に長方形文様を描いている。図7-3～7・9は、1条または2条の緩やかな波状文を無文帶に描いている。図7-8の底部片は、無文地に縦に区画線を描いている。図7-10～16、図8-1～8は、口縁部と胴部との区画文様として、意識的に横走る結節部の回転文を多段に施文し、口縁部は無文部となっている。図8-9～12は、粘土紐による貼付文がみられる。貼り付けられた粘土紐は、器面にナデ付けたりせず、円形または梢円形の断面がそのままの形で認められるのが特徴的である。

図8-13～16、図9-1～4・8～10は、器面に斜行縄文のみを施した胴部および底部片である。図9-8～10の底面には、網代編み圧痕が認められる。

図9-6は台部の破片で、欠損した部分も含めると6個の四角い脚部を底面に貼り付けている。



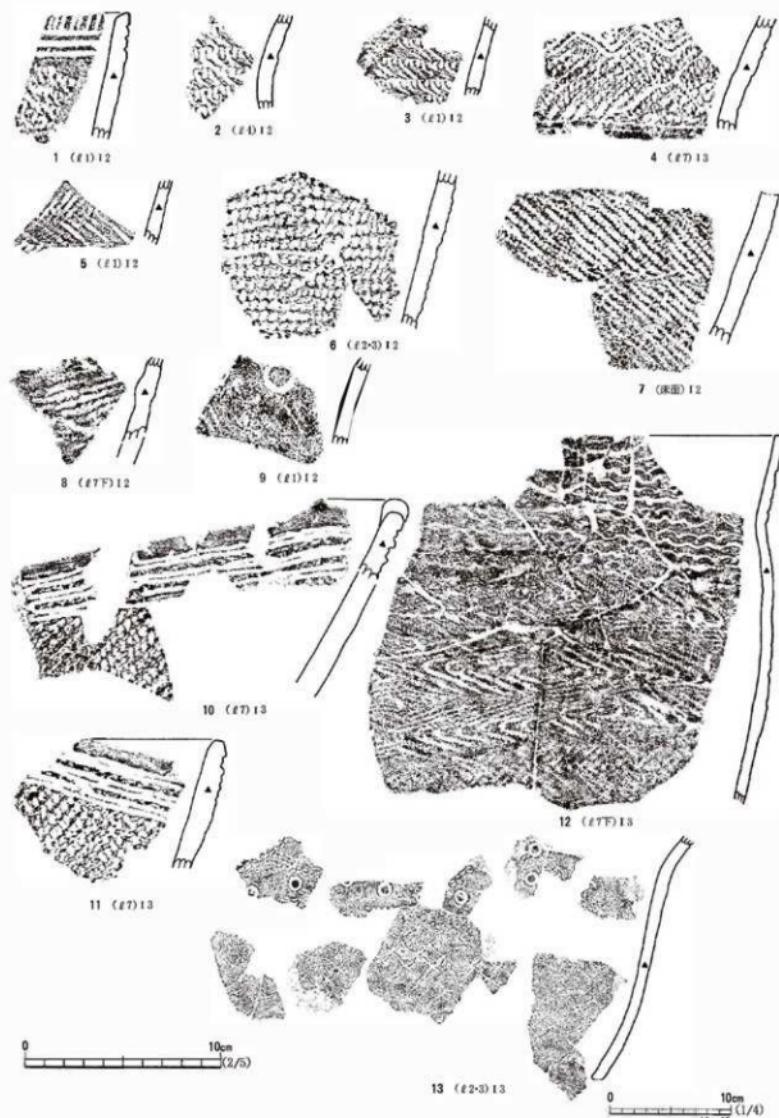


図5 1号住居跡出土遺物(1)

第2編 小池田遺跡（2次調査）

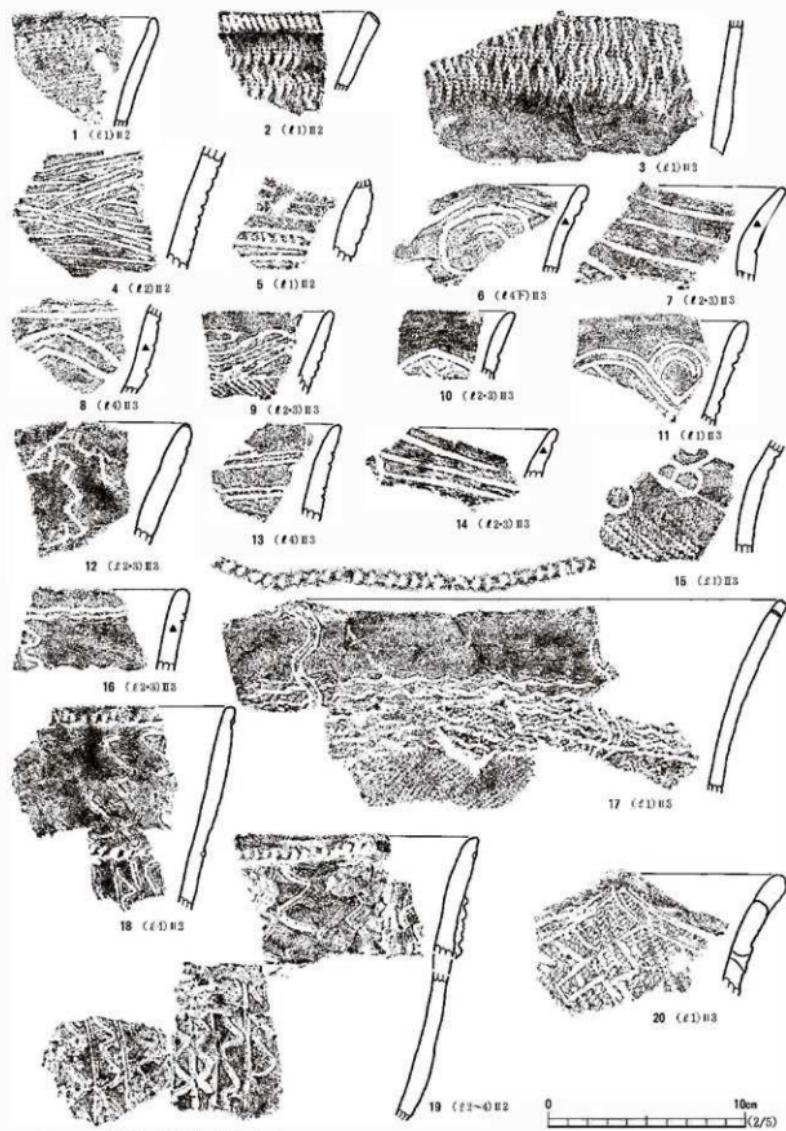


図6 1号住居跡出土遺物（2）

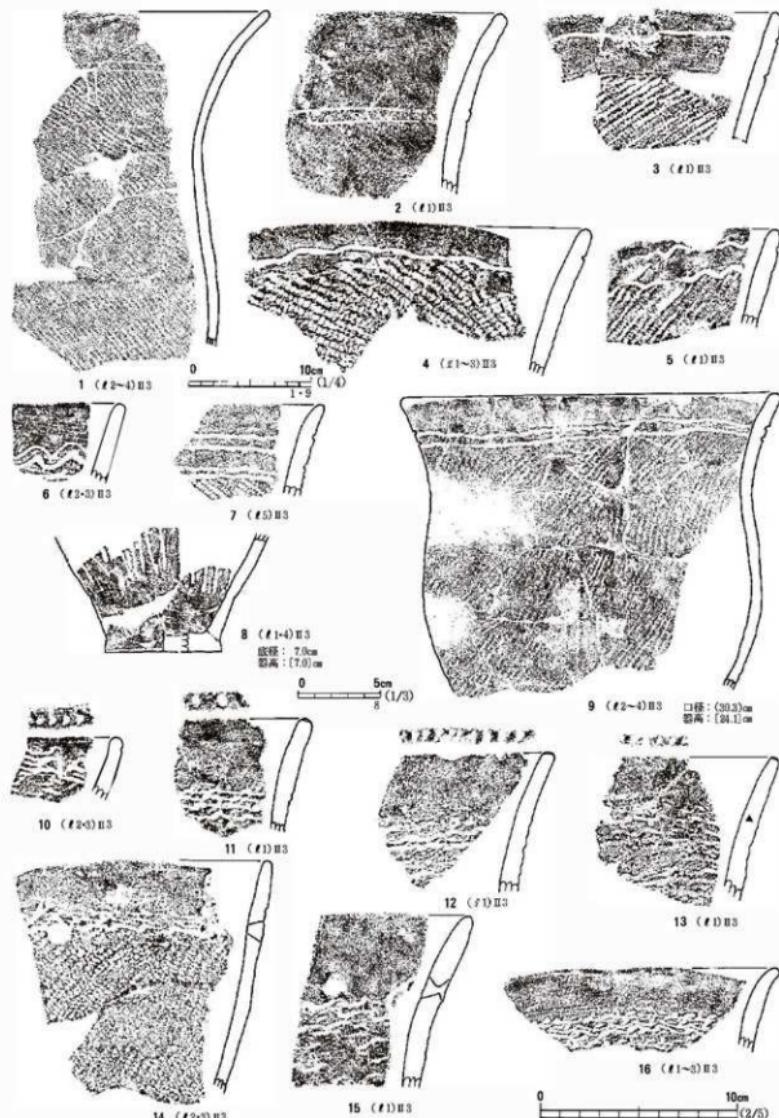


図7 1号住居跡出土遺物（3）

第2編 小池田遺跡（2次調査）

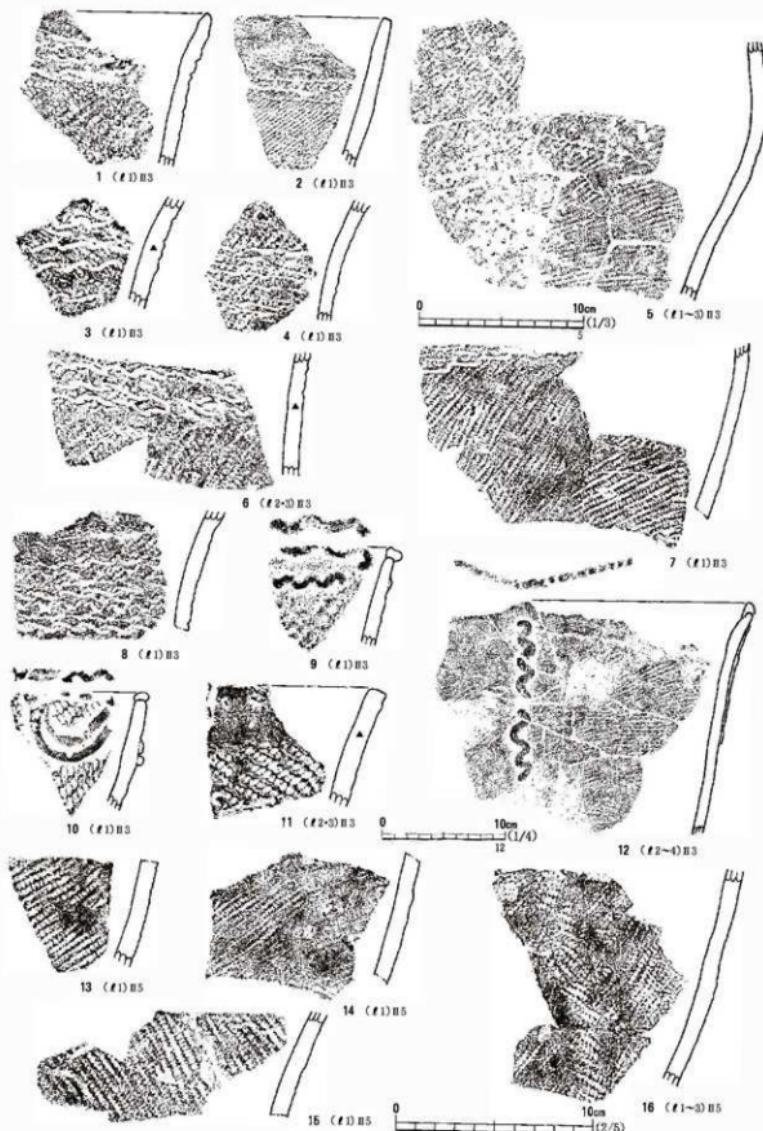


図8 1号住居跡出土遺物（4）

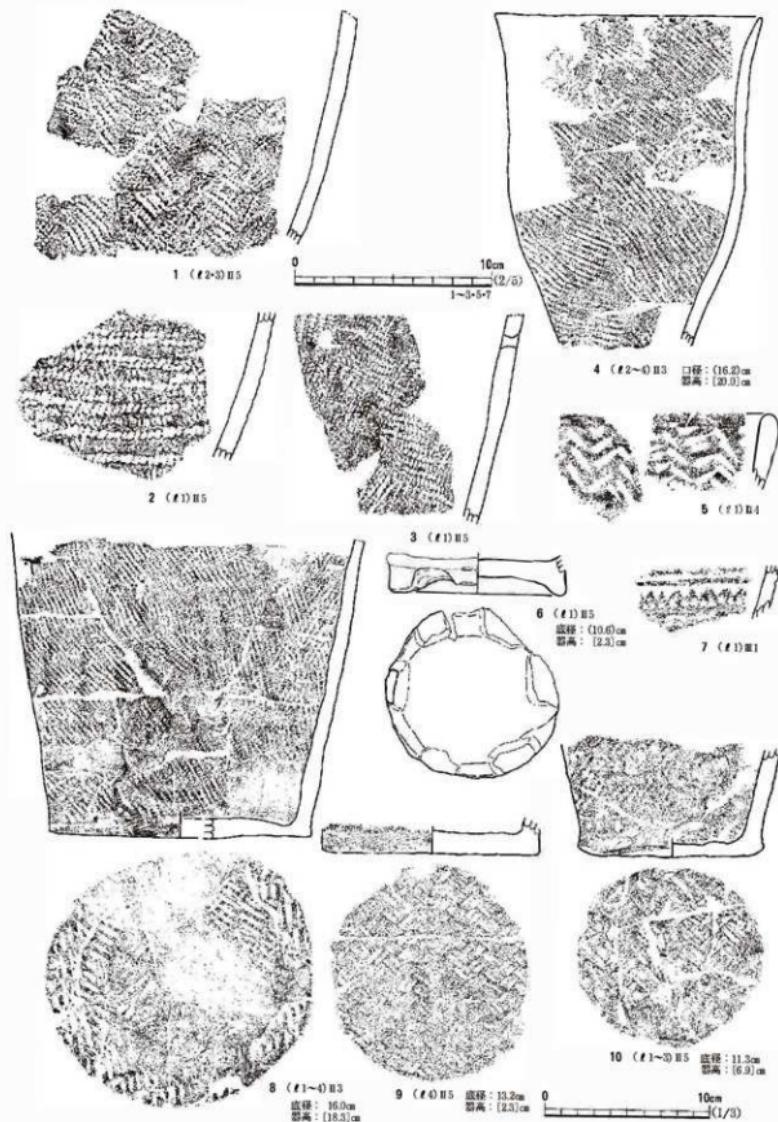


图9 1号住居跡出土遺物（5）

## 第2編 小池田遺跡（2次調査）

図9-5は大木6式に比定される口縁部片で、無文地に短沈線で「ハ」字状の沈線文を複列施文している。図9-7は大木7a式に比定される脣部片で、無文地に交互刺突文で文様を施している。

本住居跡から出土した73点の石器のうち、40点がE1からの出土である。76点のうち、製品は石鱗3点、削器2点、凹石1点、台石1点が出土し、その他は頁岩、流紋岩、珪質頁岩製の剥片である。このうち、7点の石器を図10に示した。

図10-1・2は凹基の石鱗である。1は輝石安山岩製で、脚部長が鱗身の1/3ほどである。2はガラス質安山岩製で、鱗身が3.4cmと大型のもので、側縁の一部に欠損が見られる。3・6は削器である。3はガラス質安山岩製で、木の葉形を呈した剥片の側縁に連続的な調整剥離を加え、刃部としている。6は、珪質頁岩製の剥片の表面右側縁に連続的な調整剥離を加え、刃部としている。5は珪化木製の小さな剥片である。4は砂岩製の凹石で、礫片面に橢円形状の凹みと、側面には僅

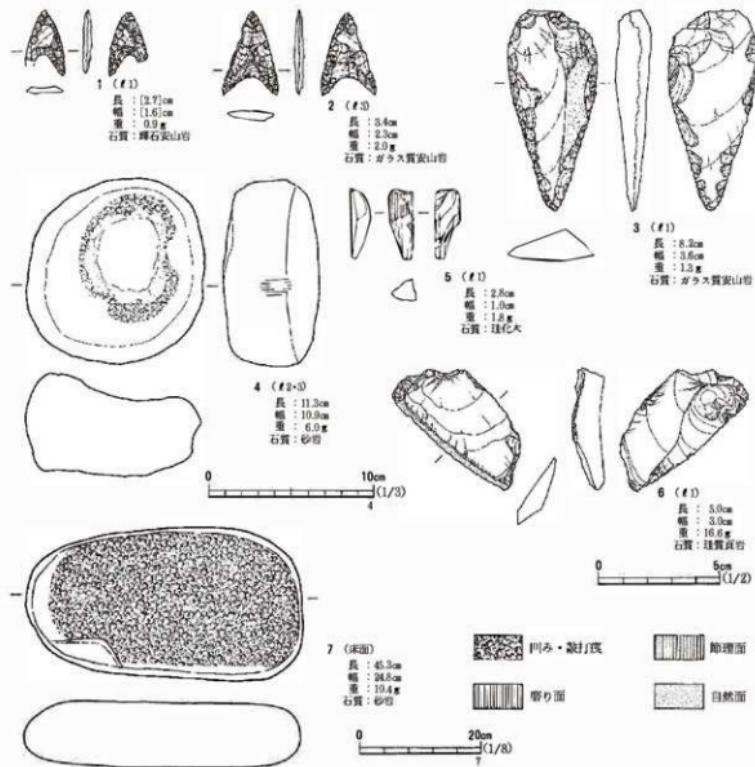


図10 1号住居跡出土遺物（6）

かに磨耗痕が見られる。7は砂岩製の石皿で、北側の床面上より出土した。

### まとめ

本遺構は、中端の規模で8.0×4.2mの大型の積穴住居跡である。床面には、8個の主柱穴と、4個の壁柱穴を確認し、炉跡は確認できなかった。本住居跡の時期については、床面及び7から出土した遺物から、縄文時代前期前葉、大木2a式期と考えられる。  
(今野)

### 2号住居跡 S I 2

#### 遺構(図11、写真4・5)

本住居跡は、調査区中央部のF・G11グリッドに位置し、LII中層で検出した。本住居跡の北側にはSK17が、東側にSI3が位置する。SI4と重複し、本住居跡が折しい。また、SK17とも重複するが、精査時にその関係を明確にすることはできなかった。本住居跡検出時には、既に炉跡の石が露出しており、住居跡内堆積土および周壁は確認できなかった。検出時に認められた炭化物を含む暗褐色土の僅かな広がり具合から判断して、平面形は円形状を呈していたと考えられる。推定した床面規模は、直径4.4mと考えられる。推定した床面範囲については、図11上段の平面図に細い実線で示した。

住居跡内からは、石圓炉跡のみを確認した。炉跡は、円形状に石を配したもので、推定された床面のほぼ中央に位置する。配置された石の内側は、中央部へ向かって僅かに窪んでいる。炉跡の規模は直径60cmほどで、拳大の砂岩を33個配している。炉内堆積土は2層に分けられ、いずれの土中にも焼土粒はほとんど認められなかった。炉跡の内部でも熱を受け変色した痕跡を確認することができなかった。

また、炉跡の北東側40cm離れたところから、大きさ70×44cmの扁平な砂岩と、磨石1点を確認した。

#### 遺物(図12、写真10)

遺物は、床面および炉内堆積土から縄文土器片50点、石錐1点、磨石1点、その他に鉄石英、頁岩、流紋岩、珪化木製の剥片38点が出土した。そのうち、8点を図12-1～8に示した。1は大木1式土器の深鉢の胴部片で、器面に非筋節の羽状縄文を施す。2・3は大木4式土器の深鉢の胴部片で、2の器面には横走する多段の筋節の回転文が、4は無文地に筋節の回転文を縦に施している。4は大木2a式の深鉢の胴部片で、斜行縄文地に2条の平行沈線を施し、胎土には纖維混和痕が認められる。5・8は器面に斜行縄文を施している。6は黒色頁岩製の石錐で、つまみ状の基部をもつ。7はディサイト製の磨石で、表面中央と側面の一部は敲打により僅かに窪む。

### まとめ

本遺構は、床面が直径4.4mの円形状の積穴住居跡である。床面からは石圓炉を確認した。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、縄文時代前期後葉、大木4式期と考えられる。

(提)

第2編 小池田遺跡（2次調査）

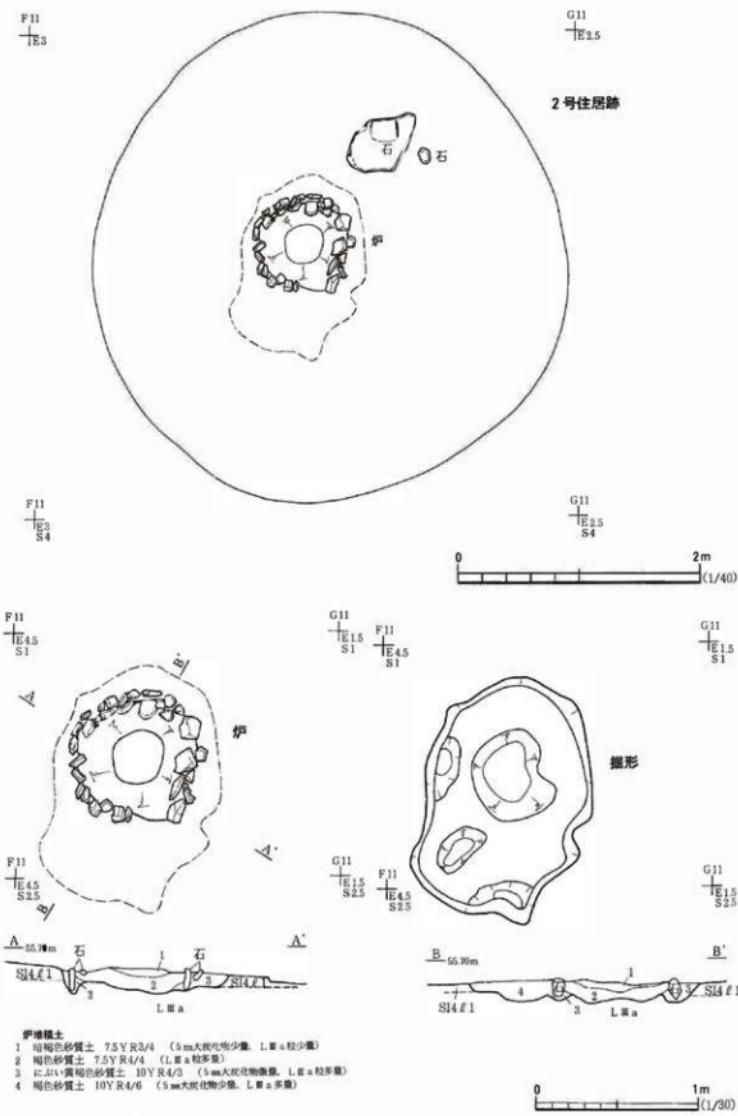


図11 2号住居跡

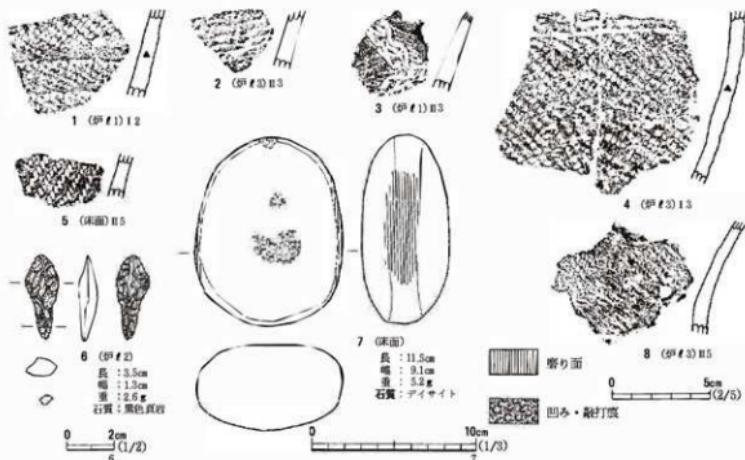


図12 2号住居跡出土遺物

## 3号住居跡 S I 3

## 遺構(図13、写真5・6)

本住居跡は、調査区中央部のG10・11, H10・11グリッドに位置し、L II中層で検出された。本住居跡のすぐ東側には、S I 2・4, SK 17がある。本住居跡と重複する遺構はない。平面形は、不整円形状を呈する。規模は、上端で直径約3.0m、検出面からの深さは26cmである。床面は、L IIIa中に形成され、一様に平坦である。周壁は床面から急傾斜で立ち上がる。

住居跡内堆積土は6層に分けられ、そのうち $\ell$  5・6の2層は、小穴(P 1)内の堆積土である。 $\ell$  1・2・5中には僅かに炭化物を含む。 $\ell$  1～4は周壁からの流れ込んだ自然堆積土である。

住居跡内からは、3個の小穴(P 1～3)を確認した。P 1は、南壁際に掘り込まれた大きめの穴で、P 2・3の2個は東壁寄りに南北に配置されている。小穴の平面形は、P 1は隅丸方形、P 2は不整な楕円形、P 3は不整な円形状を呈する。P 1の規模は、80×72cm、床面からの深さ16cmである。P 2の規模は22×12cm、P 3は直径16cmである。P 2・3の床面からの深さは、20～25cmである。小穴の位置と規模から、P 2・3は壁柱穴の可能性が高い。

## 遺物(図13)

遺物は、堆積土中から縄文土器片14点、石錐未製品1点、珪質頁岩、ガラス質安山岩、流紋岩などの1cm前後の剥片12点、粘板岩、砂岩片など礫片8点が出土した。そのうち4点を図13下段に示した。図13-1は大木1式の深鉢の胴部片で、器面に非結束の羽状縊文を施し、胎土には纖維混和痕が認められる。同図2・3は大木4式の深鉢の口縁部片で、口縁端部の無文帯に、2本1組の施

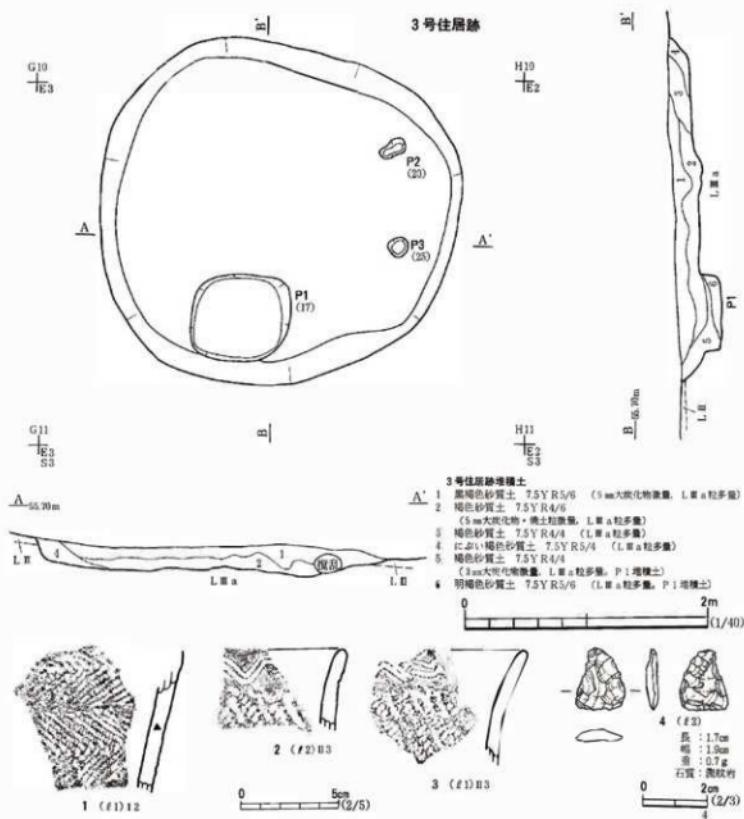


図13 3号住居跡、出土遺物

文具で波状沈線文を、体部には斜行縞文を施している。同図4は流紋岩製の石鏃未製品である。

### まとめ

本遺構は、直径3.0mの不整円形の竪穴住居跡である。床面からは3個の小穴を確認し、そのうちP 2・3は壁柱穴である。また、ℓ 2・5から各1点ずつ抽出した炭化物については、放射性炭素の年代測定を行ったところ、「2,850±30yrBP」と「2,880±30yrBP」という年代が示されている（付編1参照）。また、同じ炭化物については、樹種の同定を併せて行ったところ、両者とも「クリ」との結果が示されている（付編2参照）。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、年代測定の結果から縞文時代晩期と考えられる。

（堤）

## 4号住居跡 S I 4

## 遺構 (図14, 写真6)

本住居跡は、調査区中央部のF10・11, G10・11グリッドに位置し、L II中層で検出した。本住居跡の北側にはS K 17が、東側にS I 3が位置する。S I 2と重複し、本住居跡が古い。平面形は、橢円形状を呈する。規模は、上端で4.3×3.8m、検出面からの深さは最大16cmである。床面は、L IIIa中に形成し、平坦に造られている。周壁は、北東側は壊れているものの、床面から急傾斜で立ち上がる。

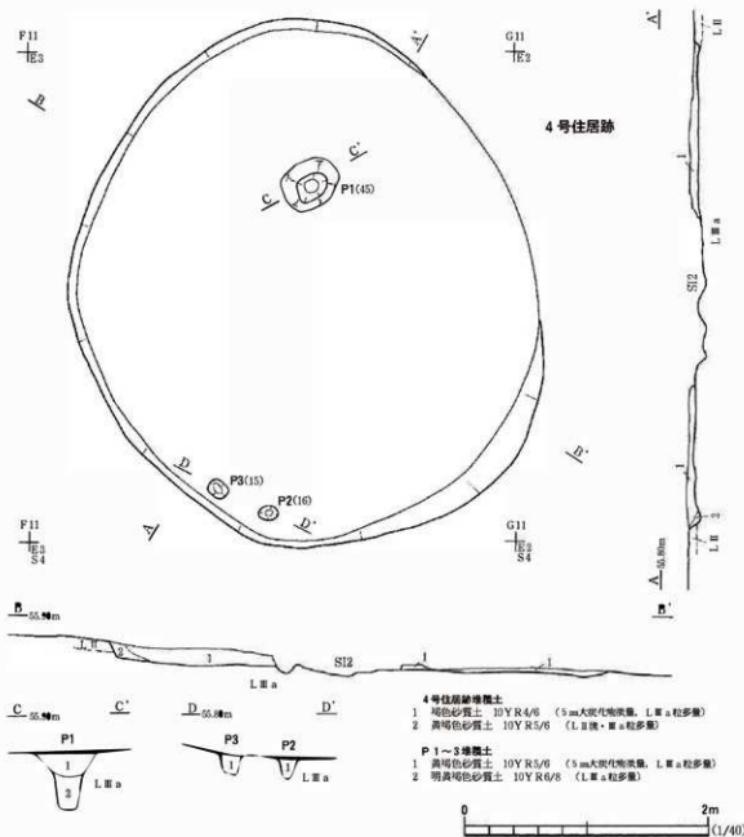


図14 4号住居跡

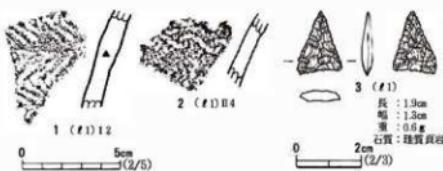


図15 4号住居跡出土遺物

ぶように検出された。小穴の平面形は、いずれも楕円形である。P 1 の規模は上端で $50 \times 40\text{cm}$ 、床面からの深さは $46\text{cm}$ である。P 2・3 の規模は、上端で $18 \times 12\text{cm}$ 、床面からの深さは $16\text{cm}$ である。柱痕跡は、いずれの小穴からも認められない。小穴の位置と規模から、P 1 は主柱穴、P 2・3 は壁柱穴の可能性が高い。

#### 遺 物 (図15)

遺物は、縄文土器片14点と、石錐1点、頁岩、砂岩、ガラス質安山岩製の1cm未満の剥片6点がすべて $\ell 1$ 中から出土した。そのうち、3点を図15に示した。1は大木1式土器の深鉢の胴部片で、器面に非結節の羽状縄文を施している。2は大木4式土器の深鉢の胴部片で、器面に結節部の回転による綾络文を施している。3は、下部を僅かに欠損した珪質頁岩製の平基の石錐である。

#### ま と め

本遺構は、規模 $4.3 \times 3.8\text{m}$ の楕円形の竪穴住居跡である。床面からは主柱穴1個と、壁柱穴2個を確認した。時期については、重複関係からS I 2よりも古く、出土遺物が少なく特定は難しいが、縄文時代前期後葉、大木4式期と考えられる。

(堤)

## 第4節 土 坑

小池田遺跡の2次調査では、7基の土坑の調査を実施した。そのうちの2基(S K13・16)は落し穴状土坑で、16号土坑は炭化物の年代測定の結果から6世紀後半～7世紀の所産である。1次調査時の土坑数を加えると、合計15基を数える。土坑の番号は、1次調査を踏襲し、11番から付けた。

#### 11号土坑 SK11(図16, 写真7)

本遺構は、調査区南東側のK14・15グリッドに位置し、L II中層およびL IIIa上面で検出した。平面形は、上端で不整楕円形、中端・底面で長方形状を呈する。規模は、上端で $142 \times 109\text{cm}$ 、中端で $126 \times 84\text{cm}$ 、長軸の方位はN $14^\circ W$ 、検出面からの深さは $20\text{cm}$ である。底面はほぼ平坦で、周壁は急傾斜で立ち上がる。西・東壁の表面には、熱を受け赤褐色に変色した痕跡が部分的に見られる。堆積土は4層に分けられ、そのうち $\ell 4$ は炭化物を多く含んだ黒褐色砂質土で底面上にほぼ平坦に堆積している。 $\ell 1 \sim 3$ はレンズ状の堆積状況が認められることから、自然堆積と判断した。本遺

住居跡内堆積土は2層に分けられ、いずれも周囲からの流れ込みによる堆積状況が観察できることから自然堆積と判断した。

住居跡内からは、3個の小穴(P 1 ~ 3)を検出した。P 1 は遺構中央北寄りに、P 2・3 は南側壁面沿いに並

構造地時には、既に堆積していたものと推測される。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、規模と形態、そして周壁の一部が焼土化していることから、木炭を焼成した土坑と考えている。時期については、出土遺物が無く特定することは難しい。 $\ell 4$ から出土した炭化物については、放射性炭素の年代測定を行ったところ、「 $1,260 \pm 30$  yr BP」という年代が示されている（付編1参照）。また、同じ炭化物については、樹種の同定を併せて行ったところ、「クリ」との結果が示されている（付編2参照）。

#### 12号土坑 SK12 (図16・18、写真7・9)

本遺構は、調査区南東側のK13グリッドに位置し、L IIIa上面で検出した。平面形は、不整橢円形である。規模は、長軸152cm、短軸132cm、検出面からの深さは17cmである。底面はL IIIa中に形成され、ほぼ平坦である。周壁は、西壁において急傾斜で立ち上がる。堆積土は2層に分けられ、 $\ell 1$ は炭化物をわずかに含む暗褐色砂質土である。いずれもレンズ状に堆積していることから自然堆積と判断した。

遺物は、 $\ell 1$ 中から縄文土器片6点、石器1点が出土した。そのうち、2点を図18下段に示した。図18-1は、斜位の撫糸文を施している。同図6は、大木式に比定される深鉢形土器で、口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部には太い粘土紐を半円形状に貼りナデ付けることで文様を施す。頸部に平たく狭い板状工具の先端を用いて、深く刻みながら鋸齒状の文様を描いている。

本遺構は、浅い不整橢円形状の土坑であることだけ確認できたが、その機能を特定するのは難しい。時期については、出土遺物から縄文時代前期末葉、大木式期の所産と考えられる。（今野）

#### 13号土坑 SK13 (図17・18、写真7)

本遺構は、調査区南東側のJ13グリッドに位置し、L II中層で検出した。平面形は、上端で不整橢円形状、中端で隅丸長方形を呈する。規模は、上端で $218 \times 158$ cm、中端で $156 \times 67$ cm、検出面からの深さは149cm、長軸の方向はN約 $80^{\circ}$ Eである。底面は、L IV中に形成され、ほぼ平坦である。周壁は、底面から約1mの高さまでは垂直に立ち上がり、それより上位では緩い傾斜となる。堆積土は8層に分けられ、最下層の $\ell 7$ ・ $8$ からは炭化物が数mmの厚さで薄く堆積していた。いずれもレンズ状の堆積状況が観察できることから自然堆積と判断した。

遺物は、 $\ell 3$ ・ $6$ から縄文土器5片、剥片7点である。そのうち、縄文土器1点を図18-2に示した。2は大木式土器に比定される深鉢形土器の口縁部片である。

本遺構は、規模と形態から落し穴状土坑である。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、おおよそ縄文時代前期頃と考えられる。（堤）

#### 14号土坑 SK14 (図16、写真7)

本遺構は、調査区中央部のE10グリッドに位置し、L II中層およびL IIIa上面で検出した。本遺

構の北側1mの地点にはSC2がある。平面形は不整橢円形である。規模は長軸232cm、短軸202cm、検出面からの深さは24cmである。周壁は、東側では急傾斜で、西側ではやや緩やかに立ち上がる。底面は、北側部分で木の根の搅乱により破壊されているが、概ね平坦に造られている。底面北側には1個の小穴（P1）がある。P1は不整円形で、規模は68×60cm、底面からの深さは22cmである。堆積土は5層に分けられ、そのうちℓ4～5はP1内の堆積土である。ℓ1～3には、壁際から流れ込んだ堆積状況が確認されることから自然堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、1基の小穴をもつ不整橢円形の土坑で、形態がSK15と同じであることだけは確認できた。機能については特定することは難しい。時期については、SK15と同形態であることから考えて、縄文時代中期前葉頃と考えられる。

#### 15号土坑 SK15(図17・18、写真7)

本遺構は、調査区中央部のE11グリッドに位置し、LII中層で検出した。平面形は不整橢円形である。規模は長軸278cm、短軸235cm、検出面からの深さは22cmである。周壁は、急傾斜で立ち上がる。底面はLIIIa中に形成され、ほぼ平坦である。底面北側には1個の小穴（P1）がある。P1は不整橢円形を呈し、規模は114×78cm、底面からの深さ28cmである。堆積土は6層に分けられ、そのうちℓ5～6はP1内の堆積土である。ℓ1～4は、いずれもLIIIa粒を多く含み、壁際から流れ込んだ堆積状況が明確であることから自然堆積と判断した。

遺物は、ℓ1から縄文土器片3点、P1から縄文土器片2点が出土した。このうち、2点を図18-3・4に示した。P1内から出土した3は、大木7a式土器に比定される深鉢土器片で、無文地に半截竹管状工具を用いて連続刺突を横位に施している。ℓ1から出土した4は、深鉢形土器片で、無文地に樹齒状工具を用いた「S」字状の文様を描いている。

本遺構は、1個の小穴を持つ不整橢円形の土坑と確認できたが、機能を特定することは難しい。時期については、P1からの出土遺物から縄文時代中期前葉、大木7a式期と考えられる。（今野）

#### 16号土坑 SK16(図18、写真7)

本遺構は、調査区南側のJ14グリッドに位置し、LII中層で検出した。平面形は、上端で橢円形、中端で隅丸長方形を呈する。規模は、上端202×120cm、中端158×82cm、検出面からの深さは133cm、長軸の方向はN約85°Eである。底面は、LIV中に形成され、ほぼ平坦である。周壁は底面から70cmの高さまではオーバーハング気味に立ち上がり、それより上位では緩い傾斜となる。堆積土は6層に分けられ、そのうちℓ5中にはわずかに炭化物が含まれていた。いずれも壁面崩落や周囲からの流れ込みによる堆積状況が観察できることから自然堆積と判断した。

遺物は、ℓ3から縄文土器3点、流紋岩の剥片2点が出土した。そのうち、2点の縄文土器片を図18-5・7に示した。5は浮島式土器の深鉢の口縁部片で、器面に2条の変形爪形文が施されて

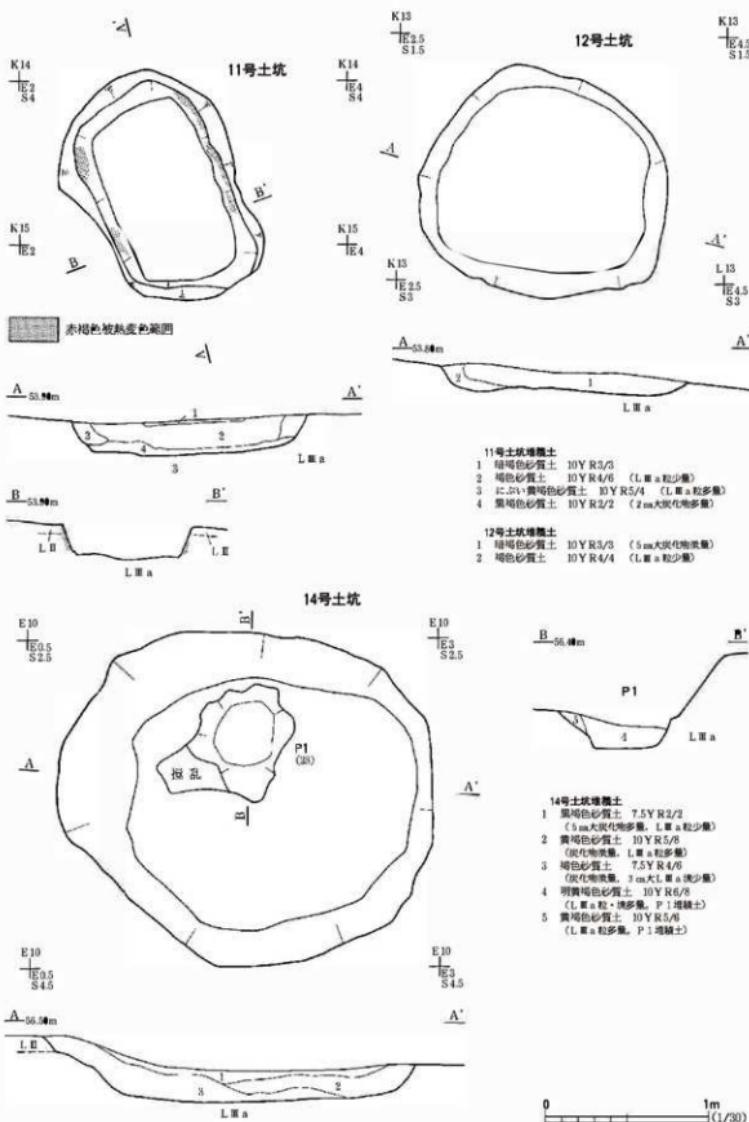


図16 11・12・14号土坑

第2編 小池田遺跡（2次調査）

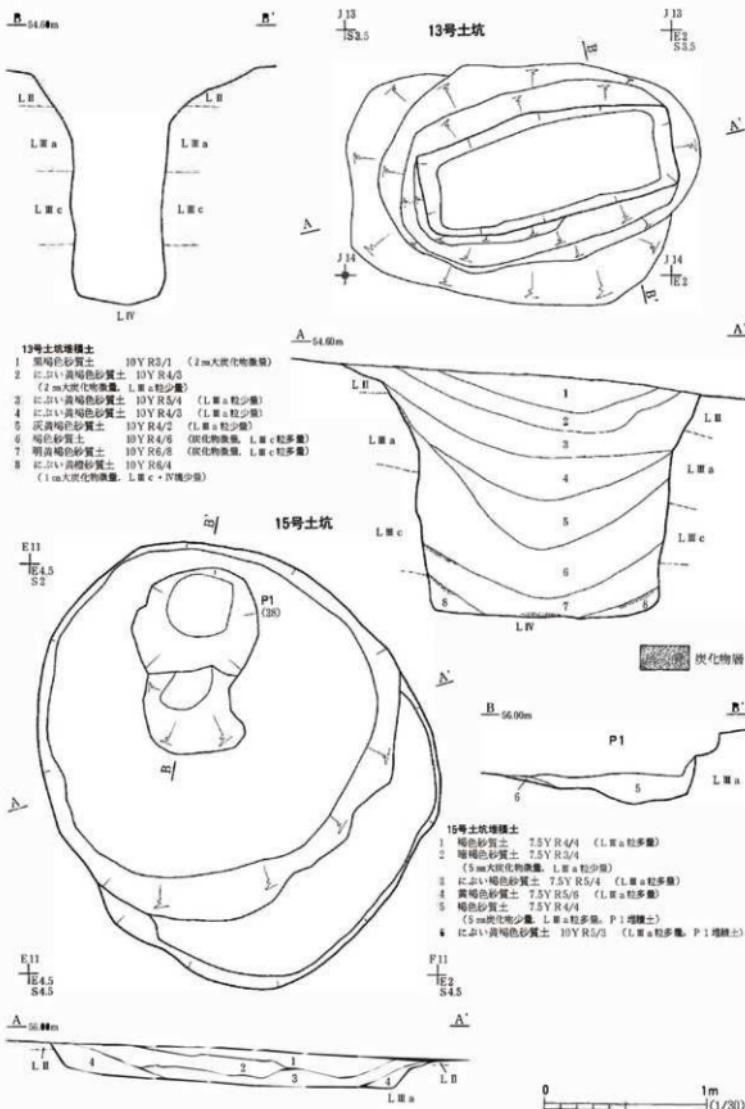


図17 13・15号土坑

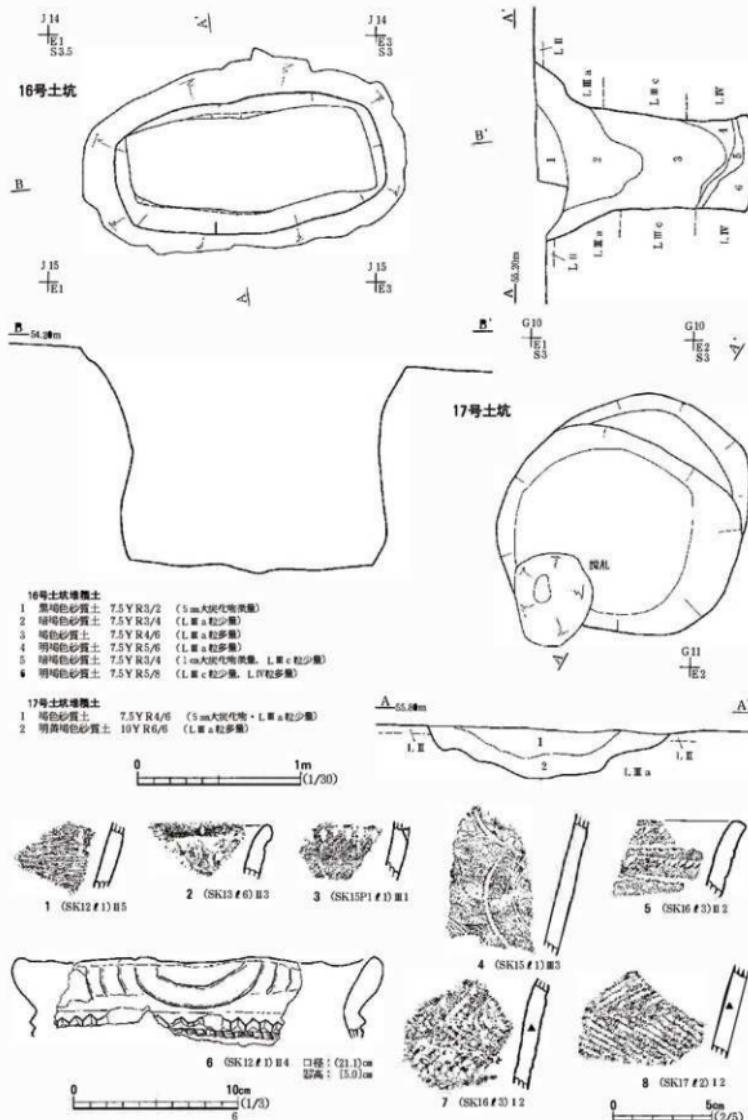


図18 16・17号土坑、土坑出土遺物

## 第2編 小池田遺跡（2次調査）

いる。⑦は大木1式土器の深鉢の胴部片で、器面に非結束の羽状縞文を施している。

本遺構は、規模と形態から落し穴状土坑である。時期については、出土遺物が少なく特定は難しい。⑧から出土した炭化物については、放射性炭素の年代測定を行ったところ、「 $1,350 \pm 20$  yr BP」という年代が示されている（付編1参照）。また、同じ炭化物については、樹種の同定を併せて行ったところ、「スギ」との結果が示されている（付編2参照）。

### 17号土坑 SK17（図18、写真7）

本遺構は、調査区中央部G10グリッドに位置し、L II中層で検出された。本遺構の南側は、S I 2・4と接するが、三者の重複関係は明確にできなかった。平面形は不整な楕円形である。規模は、上端で長軸75cm、短軸73cm、検出面からの深さは30cmである。底面はL IIIa中に形成され、中央部付近がやや窪んでいる。周壁は、底面から緩い傾斜で立ち上がる。堆積土は2層に分けられ、いずれもレンズ状の堆積状況が認められることから自然堆積と判断した。

遺物は、⑨から縞文土器2点、剥片など5点が出土した。そのうち、縞文土器1点を図18-8に示した。⑩は大木1式土器の深鉢の胴部片で、器面に非結束の羽状縞文を施している。

本遺構は、不整な楕円形であることだけは確認できたが、その機能を特定するのは難しい。時期については、出土遺物が少なく特定は難しいが、縞文時代前期前葉頃と考えられる（提）

## 第5節 木炭窯跡

小池田遺跡の2次調査では、2基の木炭窯跡の調査を実施した。これらは、調査区中央部に位置し、長軸方向をほぼ同じくして造られている。

### 1号木炭窯跡 SC1

#### 遺構（図19、写真8）

本遺構は、調査区中央のG・H12グリッドに位置し、L II中層およびL IIIa上面で検出した。平面形は隅丸長方形で、北壁中央部には底面の溝から続く張り出しがある。規模は、南・北壁の上端で南北360cm、東西176cm、長軸方向はN47°W、検出面から底面までの深さは30cmである。底面は、L IIIa中に形成され、ほぼ平坦に造られている。長軸と同じ軸線上に1条の溝を検出した。溝の南端は底面南端と接し、北端は北壁から60cmほど外側へ突き抜けている。溝の規模は、幅16~58cm、底面からの深さは5~9cmである。溝の両壁から底面にかけて、熱を受けて赤褐色に変色した部分が認められる。周壁は、概ね底面からほぼ垂直に立ち上がり、張り出し部分では傾斜が緩やかになる。堆積土は7層に分けられ、そのうち⑪は大きめの木炭片で構成された木炭層である。⑫の層厚は最大36cmで、本遺構廃絶時の底面は木炭で覆われていた可能性が高い。⑬~⑮は廃絶後の堆積土で、壁際からの流れ込みや、レンズ状の堆積状況も観察できることから、自然堆積と判

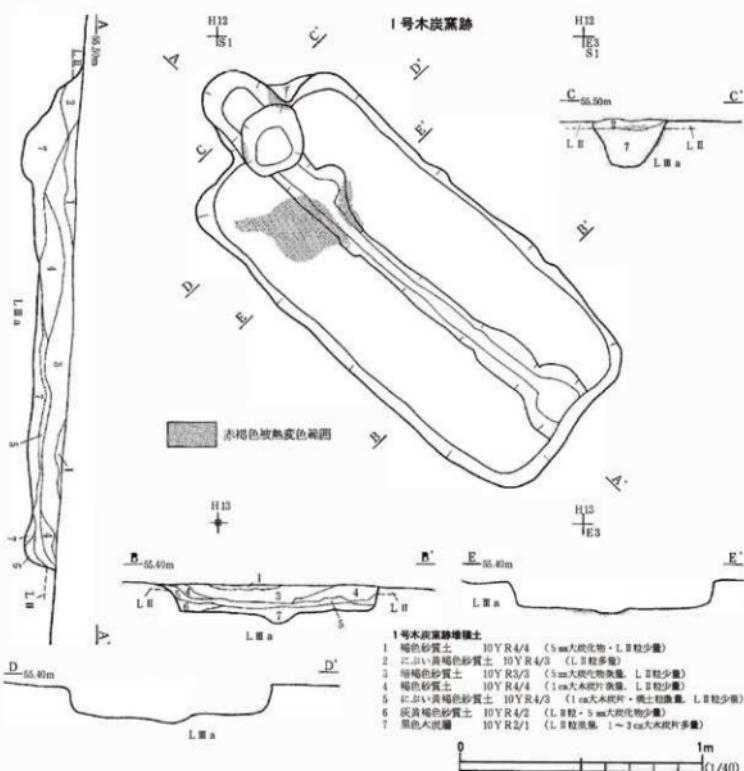


図19 1号木炭窯跡

断した。

#### 遺 物 (図20)

遺物は、 $\ell 2 \cdot 3 \cdot 7$ から縄文土器片29点、粘板岩片1点が出土し、遺物のほとんどは $\ell 3$ からの出土である。そのうち、2点の縄文土器を図20-1・2に示した。1は大木4式土器に比定される深鉢の胴部片で、器面に結節部回転による綾络文を横位に施し、同じ文様で縦に区画している。2は深鉢の胴部片で、内外面に擦痕を施している。

#### ま と め

本遺構は、規模と形態から、伏焼法で木炭を焼成した木炭窯跡である。時期については、出土遺物が少なく特定することは難しい。 $\ell 7 \cdot 8$ から出土した木炭のうち、無作為に抽出した2点について放射性炭素の年代測定を行ったところ、「780±30yrBP」と「810±30yrBP」という年代が示され

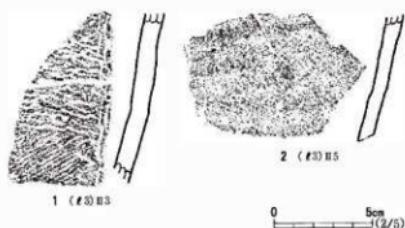


図20 1号木炭窯跡出土遺物

## 2号木炭窯跡 S C 2

## 遺構 (図21, 写真8)

本遺構は、調査区中央北西寄りのE 9・10グリッドに位置し、L II中層で検出した。平面形は、長い闊丸長方形で、北壁・南壁中央部から外側に張り出しが見られる。規模は、南・北壁の上端で南北340cm、東西長130cm、長軸方向はN 39°W、検出面から底面までの深さ16cmである。底面は、L IIIa中に形成され、ほぼ平坦に造られている。長軸と同じ軸線上に1条の溝を検出した。溝の北



図21 2号木炭窯跡

ている（付編1参照）。また、同じ炭化物について樹種の同定を併せて行ったところ、「クヌギ亞属クヌギ節（クヌギ、アベマキなど）」と「クヌギ亞属コナラ属（カシワ、コナラなど）」という結果が示されている（付編2参照）。

(今野)

端は北壁より56cm、南端では南壁より18cmほど、それぞれ壁から外側に突き抜けている。溝の規模は、幅16~45cm、底面からの深さ8cmである。溝の両壁から底面中央部にかけては、熱を受けて赤褐色に変色した部分が認められる。周壁は、基本的には急傾斜で立ち上がり、南・北壁の張り出し部分では傾斜が緩やかになる。堆積土は7層に分けられ、そのうち $\ell 7$ は木炭層である。 $\ell 7$ の層厚は最大9cmで、本遺構廃絶時の底面は木炭で覆われていた可能性が高い。 $\ell 1$ ~ $\ell 6$ は廃絶後の堆積土で、いずれも周壁の崩落に起因するLII塊を多く含んでおり、壁際から流れ込んだ堆積状況が確認できることから自然堆積と判断した。

### 遺 物

遺物は、 $\ell 1$ ~ $\ell 2$ から縄文時代前期の土器片5点、粘板岩片、流紋岩剥片など3点が出土し、大半が $\ell 1$ からの出土である。いずれも細片であるため図示していない。

### ま と め

本遺構は、規模と形態から、伏焼法で木炭を焼成した木炭窯跡である。時期については、出土遺物が少なく特定することは難しい。 $\ell 7$ ・ $\ell 8$ から出土した木炭のうち、無作為に抽出した2点について、放射性炭素の年代測定を行ったところ、「 $590 \pm 30$ yr BP」と「 $610 \pm 30$ yr BP」という年代が示されている(付編1参照)。また、同じ炭化物について、樹種の同定を併せて行ったところ、いずれも「クヌギ亞属クヌギ節(クヌギ、アベマキなど)」という結果が示されている(付編2参照)。(今野)

## 第5節 遺物包含層

小池田遺跡の2次調査では、調査区のほぼ全域に遺物包含層が形成されていることを確認した。出土遺物の大半は、調査段階で5層に区分したLII中から出土している。「LII」については、第2章第1節で報告した。以下では、遺物包含層から出土した遺物について報告するが、表土や搅乱穴等から出土した遺物や、表面採集されたものについても本節で扱う。

### 遺物の出土状態 (図22)

小池田遺跡の2次調査において遺物包含層から出土した土器片は2710点である。これらの土器片は、すべてLIIから出土した。このうち、主体を占める土器群は、縄文時代前期後葉に比定できるII群土器である。II群土器の中でも、土器型式名の判明した「II群3類土器」の出土量が最も多い。図22にはLIIから出土した土器片の合計点数を、1次調査時のものと併せて平面分布として示した。

土器の分類別に出土位置を見てみると、縄文時代前期後葉の「I群2類土器」の出土位置は、調査区の西側(H列から西側)に主に分布し、中でもE5・8~12、D5・8~10、E5・7の12グリッドに集中している。1次調査区を含めた「I群2類土器」の出土位置を見てみると、2次調査区北西側のC~F5~12グリッドと、調査区境から1次調査区西側のE~G14~18グリッドの範囲で主に出土している。縄文時代中期初頭とした「III群1類土器」は、2次調査区北側のF5・6グリッドと、

## 第2編 小池田遺跡（2次調査）

南側のF11, J13・14グリッドのみで出土している。縄文時代晩期とした「Ⅲ群3類土器」は、主に1次調査区境周辺のG11, F12, E・H13, J・M14グリッドから、最も北側ではE5グリッドから出土を確認している。1次調査区を含めた「Ⅲ群3類土器」の出土位置を見てみると、その大半は1次調査区内のG・M14, F・G・H15, F・G・M・N16, F・M・P17の計10グリッドから出土している。

弥生時代の土器とした「Ⅲ群4類土器」の分布は、縄文時代晩期と同様に、1次調査区との境周辺G・H・K14グリッドと、2次調査区西端のC10・D8グリッドから出土している。1次調査区を含

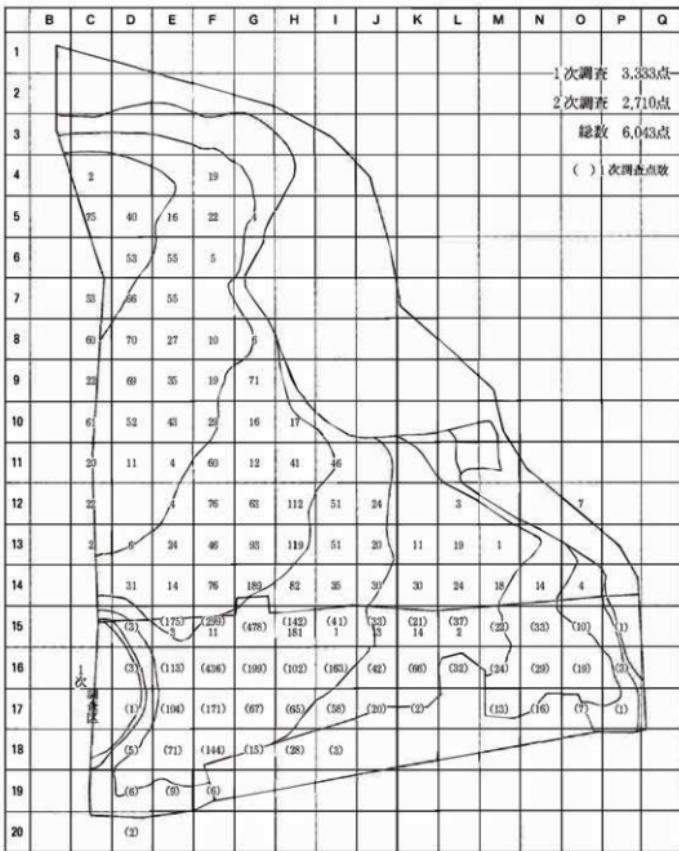


図22 グリッド別出土土器点数

めた「Ⅲ群4類土器」の出土位置を見てみると、主に1次調査区寄りのG・H・K14, H・J15, F・G16・17, F18グリッドに分布している。

上記以外の「Ⅱ群3類土器」とした縄文時代前期後葉の大木4式土器は、調査区のほぼ全域から出土するものの、中でも調査区境周辺のF～I 12～14の計12グリッド(300m<sup>2</sup>)内に集中する傾向が伺える。

次に、石器の出土位置を見てみる。2次調査区から出土した加工された石器(打製・磨製石器)、礫石器(磨石・凹石など)、石製品および剥片などを含んだすべての出土点数は610点である。そのうち、特に石器がまとまって出土した範囲は、1次調査区との境周辺にあるF～G14, F13グリッドと、北側のC 5グリッドである。

1次調査区を含めた形態別の出土位置については、石鏃は調査区境周辺のE～I 13～16の計15グリッド内からの出土が多い。块状耳飾は、2次調査区内G12・H13グリッド、1次調査区内E・F 17・18の計4グリッド内から出土していることが分かる。

#### 土 器 (図22～34、写真9・10)

小池田遺跡の2次調査区の遺物包含層から出土した土器は、縄文土器と弥生土器である。時期的には、縄文時代前期後葉の土器が大半を占める。出土土器の分類については、第1編第2章第2節で報告した。I・Ⅲ群土器については、「Ⅱ群土器」に比べると出土量が極僅かであったため、該当するほとんどの資料について図示した。「I群土器」は図23～25に、「Ⅲ群土器」は図32～34に示した。2次調査区からは「Ⅱ群1類」とした縄文時代前期中葉の土器と、「Ⅲ群2類」とした縄文時代後期の土器は出土していない。

##### I群1類土器 (図23-1)

本類は、図23-1に示した1点のみである。1は縄文時代早期後葉から末葉の深鉢形土器の胴部片で、胎土に纖維混和痕が見られる。外面には斜行縄文を、内面には縦条体条痕文を施している。

##### I群2類土器 (図23-2～10・14～25、図24)

本類は、縄文時代前期初頭から前葉の土器で、出土した72点の内66点の破片を図23-2～25、図24に図示した。器形はすべて深鉢形土器で、胎土に纖維混和痕が見られる。土器型式の違いから、「a, b」の2種に細分した。

a 種 図23-2～8に示した土器は、花積下層式土器に比定される。口縁部文様帯と体部の文様帯の境界は刻み付き隆帯で区画し、体部に斜行縄文を施す。2・3の口縁部無文帯には、2本一組の繩圧痕で文様を描く。3・5の口縁部は、わずかに内傾する。7・8に示した2点は、口縁部上端に縦のスリットを入れ、沈線と円形刺突文で曲線文を描いている。

b 種 図23-9・10・14～25、図24-1～18に示した土器は、大木1式土器に比定される。図23-9・10・14～25は、器面を重層するループ文で施文している。口縁部の形状は、図23-9・11・15・16・18で平口縁、同図25で波状口縁を呈する。図23-22・23・25では、ループ文の間に三角形

状の無文帶を配している。

図24-1～4の4点は、器面を組紐文で施文している。図24-5～18は、器面を非結束の原体による羽状繩文で、菱形状になるよう施文している。

#### I群3類土器（図23-11～13、図25-13～17）

本類は、大木2a式土器に比定される深鉢形土器片で、図23-11～13と図25-13～17に示した破片がすべてである。器形はすべて深鉢形土器で、胎土に纖維混和痕が見られる。図23-11～13・図25-13～16に示した土器片は、樹齒状工具を用いて重層したコンパス文を施している。図25-17は、器面にS字連鎖撚糸文を施している。

#### I群4類土器（図24-19～25、図25-1～12）

図24-19～25、図25-1～12に示した土器片は、縄文時代前期前葉に位置づけられる。図25-10～12の器面には撚糸文、その他の破片は斜行繩文のみで施文している。胎土には纖維混和痕が認められる。図24-19～21の口縁部端部には、縄文地の上から縦方向の刻みが入る。

#### II群2類土器（図26・27）

本類は、浮島・諸説系の土器で、図26・27に図示した破片がすべてである。図26には浮島系、図27は諸説b式土器を示した。土器型式の違いから、「a・b」の2種に細分した。

a種 図26には、浮島系の土器片のみを示した。1・2・5の3点は平行沈線文のみで文様を描いている。2～4・6・7・9・10・19は浮島II式に比定される。口縁部上端を見ると、7・9・10では斜めの短沈線で条線帯を配している。体部の調整を見ると、3・4・6は変形爪形文と共に、2本一組の平行沈線を組み合わせて文様を描いている。9・10は、無文地に爪形文で文様を描いている。19は、口縁部に輪積み痕を明瞭に残し、複列の刺突文を口縁部上端に施す。

8・11～18は、浮島III式に比定される。8・12・14の口縁部片は、上端に縦の短沈線で条線帯を配し、半截竹管状の工具で刺突文を施している。8の口縁部から体部には、貝殻の最も上端にあたる部位を用いて、口縁部に平行させた波状の貝殻文を施す。11・15は、半截竹管状の工具を用いて、口縁端部及び器面に、口縁部に平行させた刺突文を施す。13・18は、貝殻の口に当たる部位を用いて波状貝殻文を重層させている。16・17は、半截竹管またはヘラ状の工具を用いて、貝殻文を模倣した文様を無文地に施文している。

b種 図27には、諸説b式土器のみを示した。1～4は、細い粘土紐を貼り付けた浮線文を特徴とする。4は刻みの無い粘土紐を用い、1～3は刻み付きの粘土紐で文様を施している。5～7は、無文地に細い爪形文で、木葉文や三角文を描いている。8・9は、縄文地の上から、2本一組の平行沈線で文様を描いている。

#### II群3類土器（図28～30、図31-1～3・5）

本類は、大木4式土器に比定され、抽出した土器を図28～30、図31-1～3・5に示した。器形のほとんどが深鉢形土器である。胎土に纖維混和痕は認められない。内面調整は、ヘラ状工具によるケズリのような擦痕を施すものが大半を占める。文様の特徴から、「a～d」の4種に細分した。

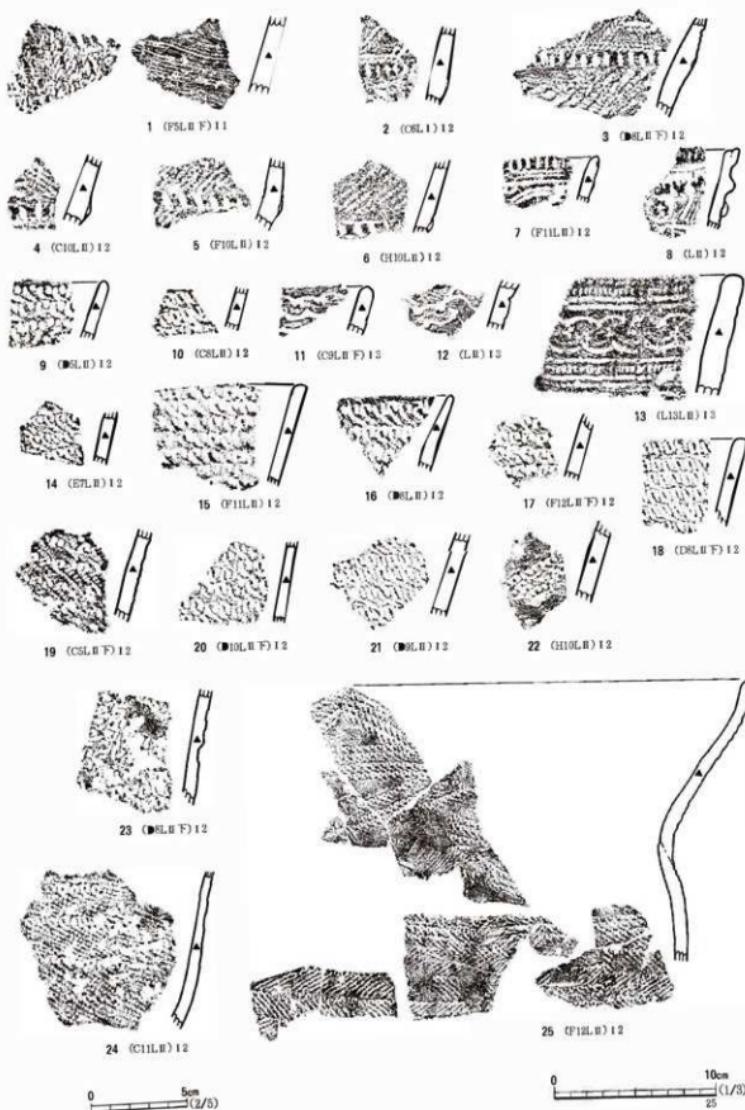


図23 遺物包含層出土1群～3類土器

第2編 小池田遺跡（2次調査）

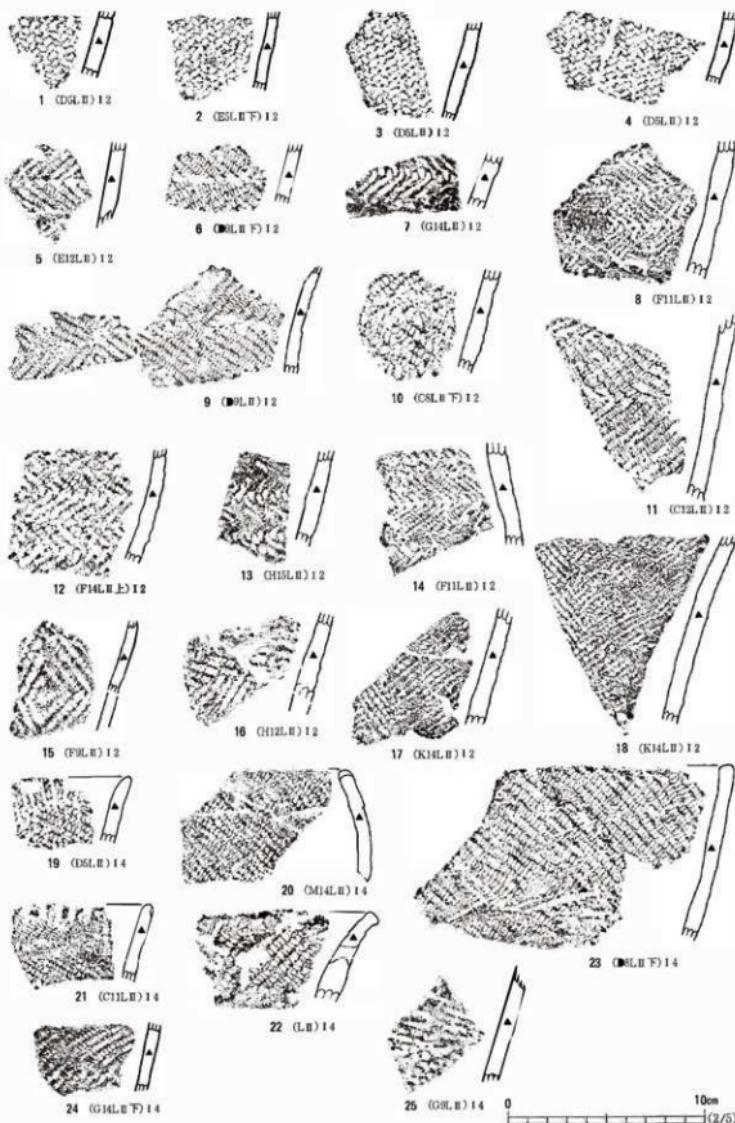


図24 遺物包含層出土 1群 2・4類土器

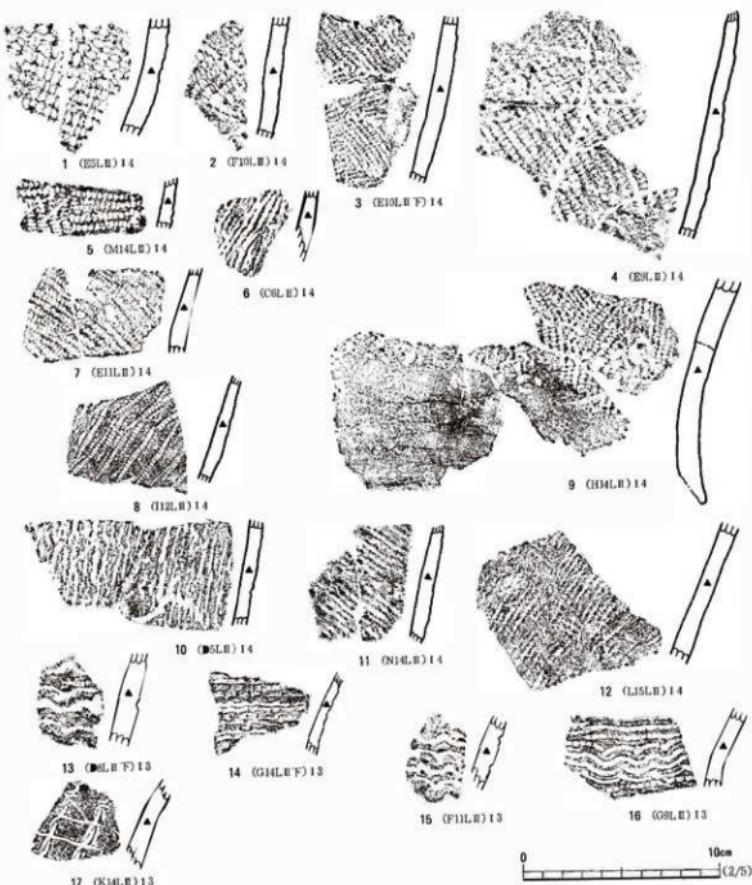


図25 遺物包含層出土 I 群 3・4 類土器

a 種 図30-1～19に示した土器片は、口縁部と胴部の区画文様として、横走する多段の結節回転文を特徴とする。口縁部形状は、皆緩やかに外反または外傾した平口縁である。口縁端部には刻みを持つもの(1～4・6・10)と、そうでないもの(5・7～9)が見られる。

b 種 図28と図29-1・6・10に示した土器片は、沈線文を特徴とする。沈線文には、1条の沈線のみで施文するものと、2条一組の沈線で施文するもの2種類がある。まず、1条の沈線で波状文のみを描くものについて見てみる。図28-21～23・25・26、図29-1・4・6は、区画された口縁部無文帶内に、複列の平行沈線文(図28-22・26)や緩やかな波状沈線文(図28-23、図29-4・6)

第2編 小池田遺跡（2次調査）

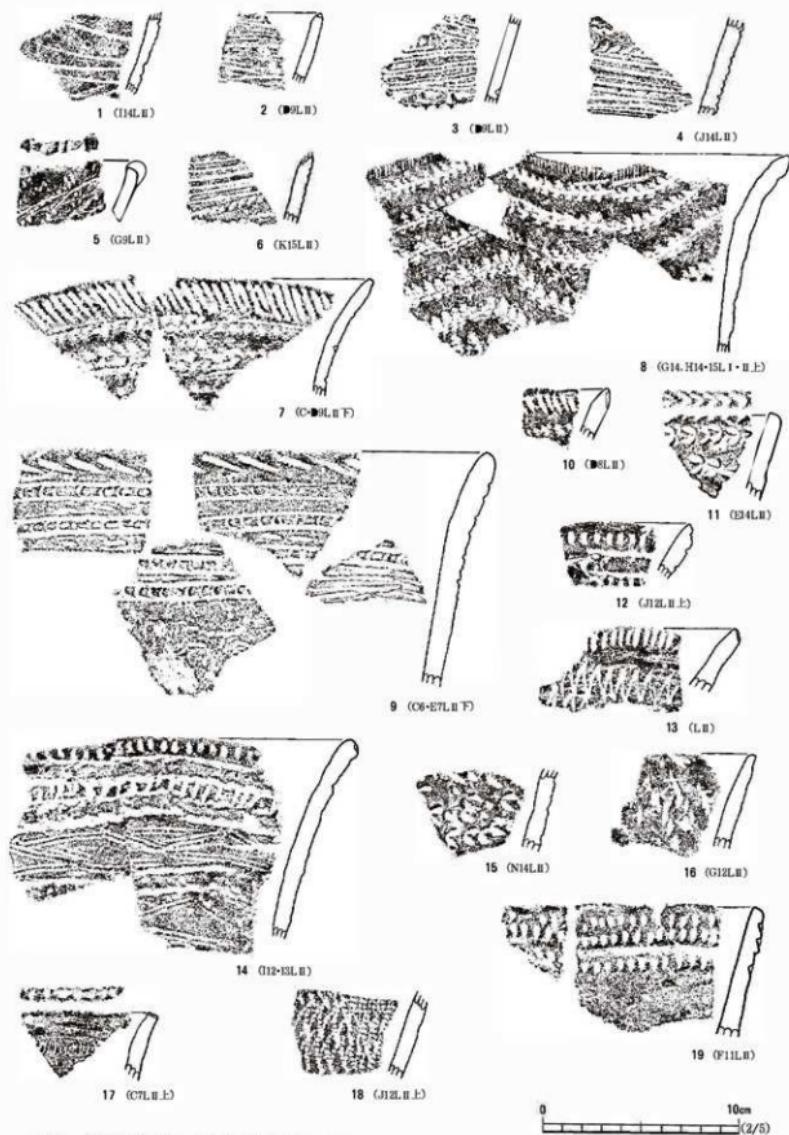


図26 遺物包含層出土II群2類土器（1）

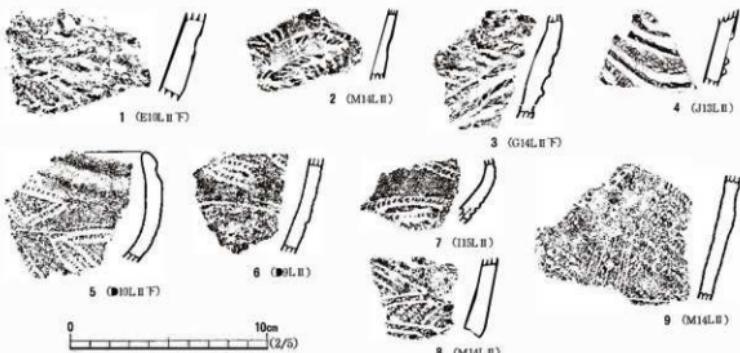


図27 遺物包含層出土 II群2類土器(2)

を施すもの、波形の緩やかな波状沈線と連続山形文を上下に組み合わせた(図28-21,図29-1)ものの3種類が認められる。図28-17・24は、体部の斜行縦文地の上から、1条の沈線で、波状文を複列または単独で描いている。1条で施した沈線を観察すると、器面からの深さが3~4mm、施された沈線の断面形は角の張った箱形を呈している。

次に、2本一組の沈線で波状文のみを描くものについて見る。図29-2・3は、口縁部無文帶内に波状文と2条の平行沈線文を描いている。図28-13・14・16・18・19、図29-5は、斜行縦文地の上から、波状文、三角形状や曲線文様を描いている。

最後に、1条の沈線で、口縁部無文帶内に幾何学的な文様を描くものについて見てみる。図28-4・5・9は縦と横に緩やかな波状沈線を、図28-6・7は波状文と縦の結節回転文を、図28-10・15は波状文と円形文を、図28-8は菱形文と円形文、図28-11は縦位の波状文と縦圧痕、図29-10は1条の波状文と横位の刺突文を、それぞれ組み合わせ文様を描いている。図28-1は2本一組の沈線で「8」字状の文様を、同図2・3は沈線で縦位の波状文を描いている。

c 種 図29-7~9・11~22に示した土器片は、波状や、粘土紐による貼付文を特徴とする。貼り付けられた粘土紐の断面を見ると、器面へのナデ付けが不十分であるため、断面形が扁平な梢円形を呈している。図29-9・14の口縁部には波状の粘土紐を縦長に、同図7・8・11~13は頸部または口縁端部直下に波状の粘土紐を横に貼り付けている。図29-15・18・19~21は、口縁端部に波状の粘土紐を部分的に貼り付ける。図29-16・17・22は、斜行縦文地の上から、刻み付きの細い粘土紐を貼り付けている。図29-16・17では貼付文で曲線文様を描いている。

d 種 図30-20、図31-1~3・5に示した土器片は、器面に斜行縦文のみを施した口縁部片である。図30-20、図31-1・2は口縁端部に刻みを付け、図31-5には突起が付けられている。

#### II群4類土器(図32-10)

本類は、諸磯c式土器の深鉢片で、斜行縦文地上に爪形文で文様を描き、コブ状の貼付を施す。

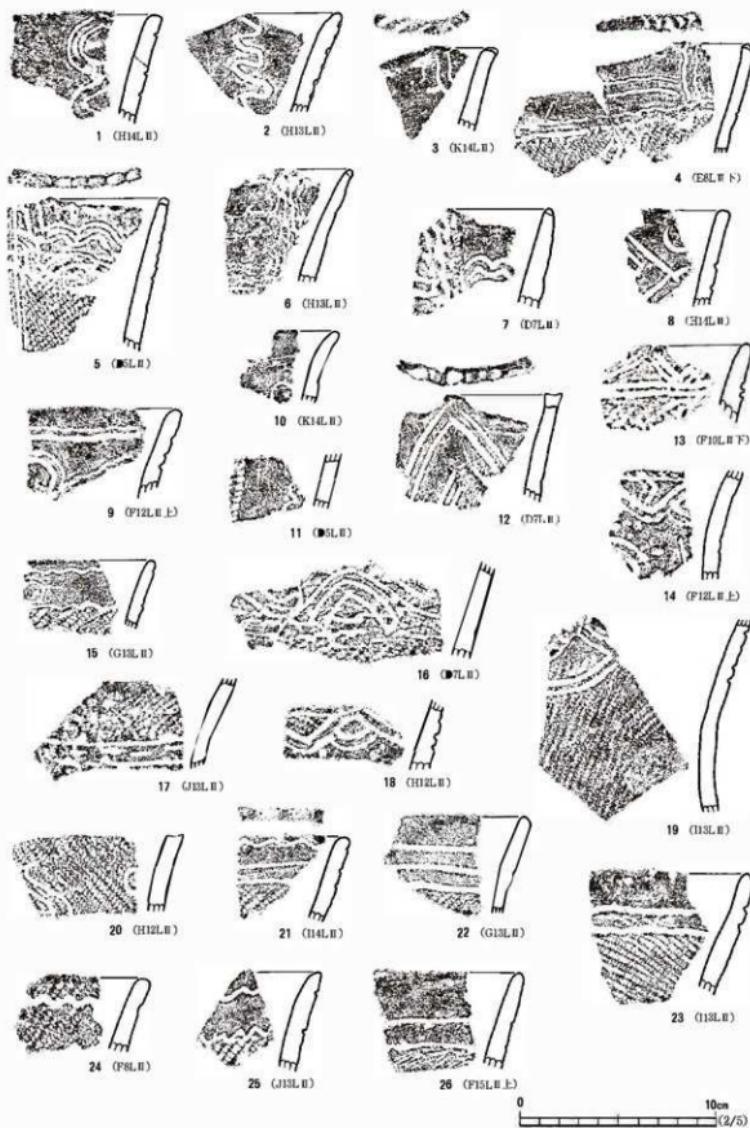


図28 遺物包含層出土Ⅱ群3類土器（1）

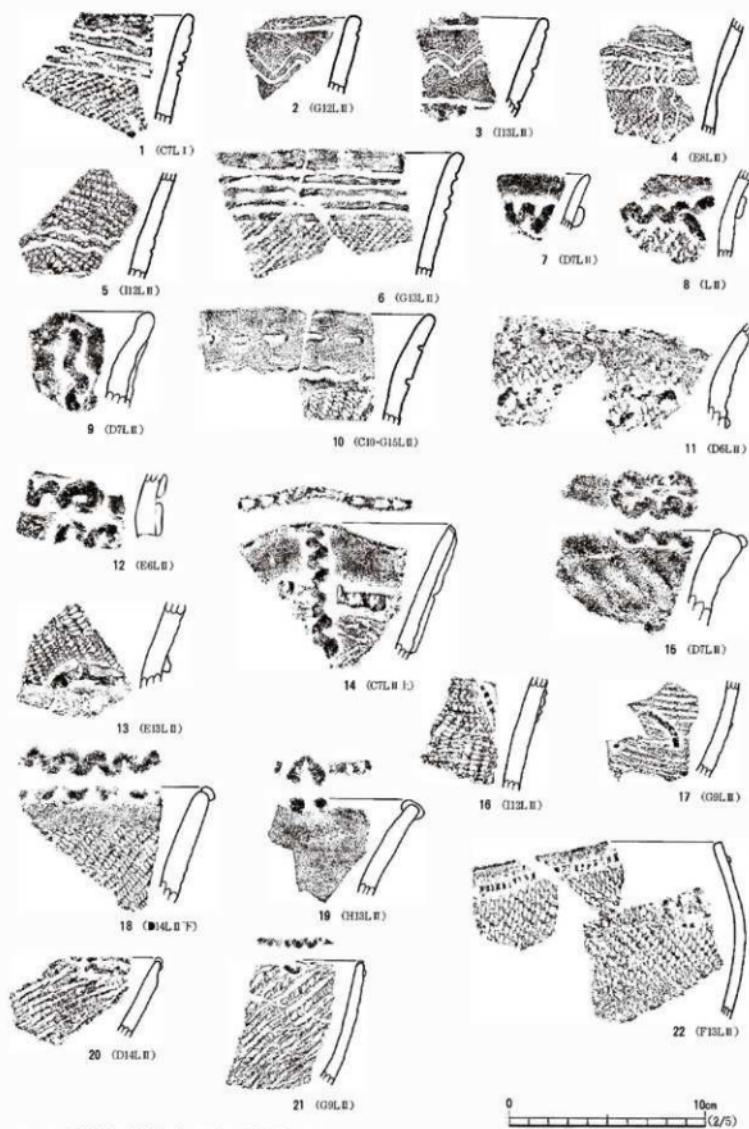


図29 遺物包含層出土II群3類土器(2)

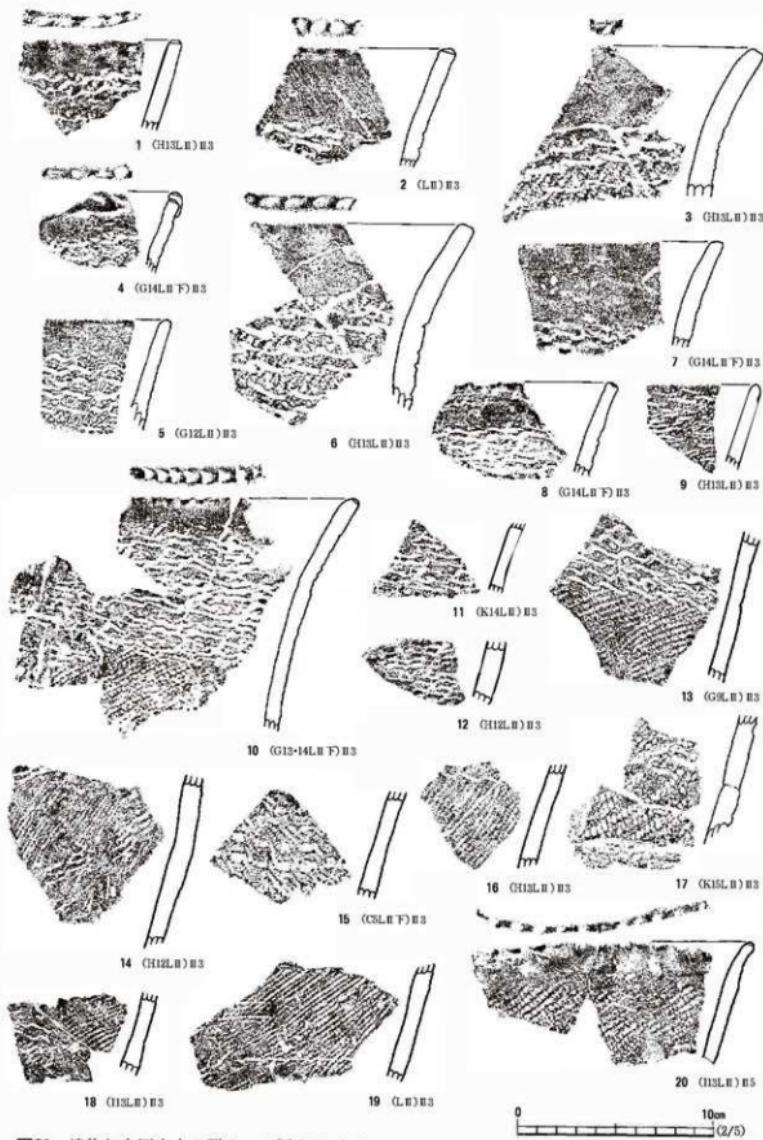


図30 遺物包含層出土II群3・5類土器(1)

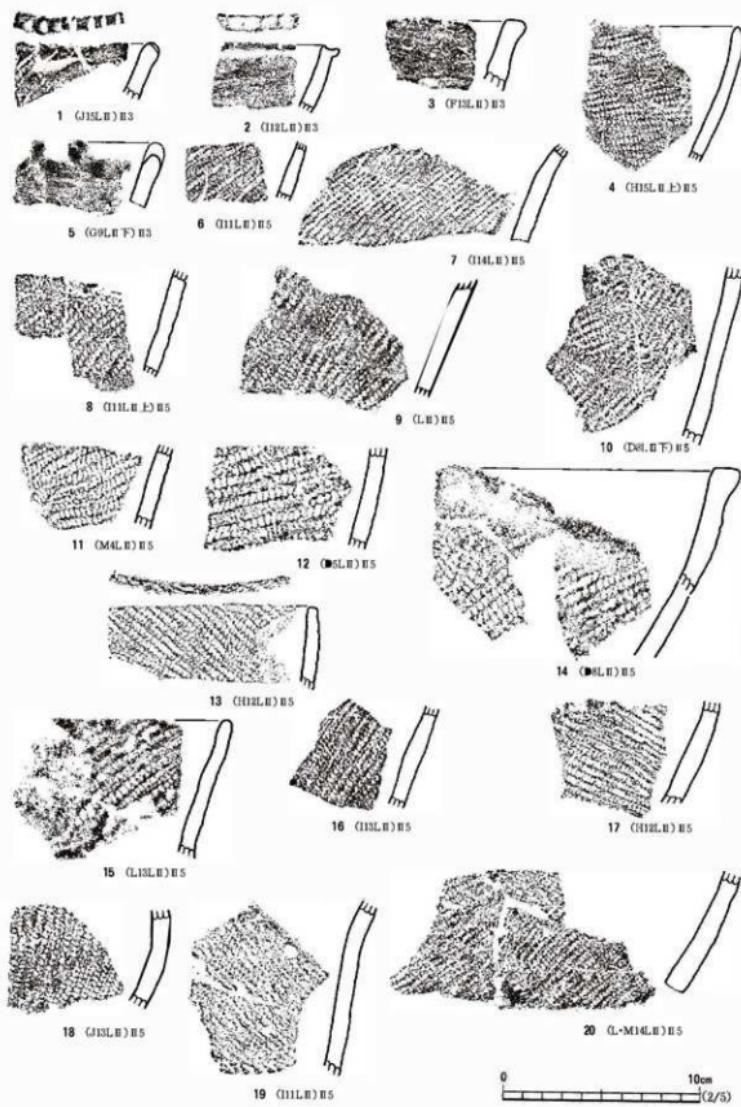


図31 遺物包含層出土II群3・5類土器(2)

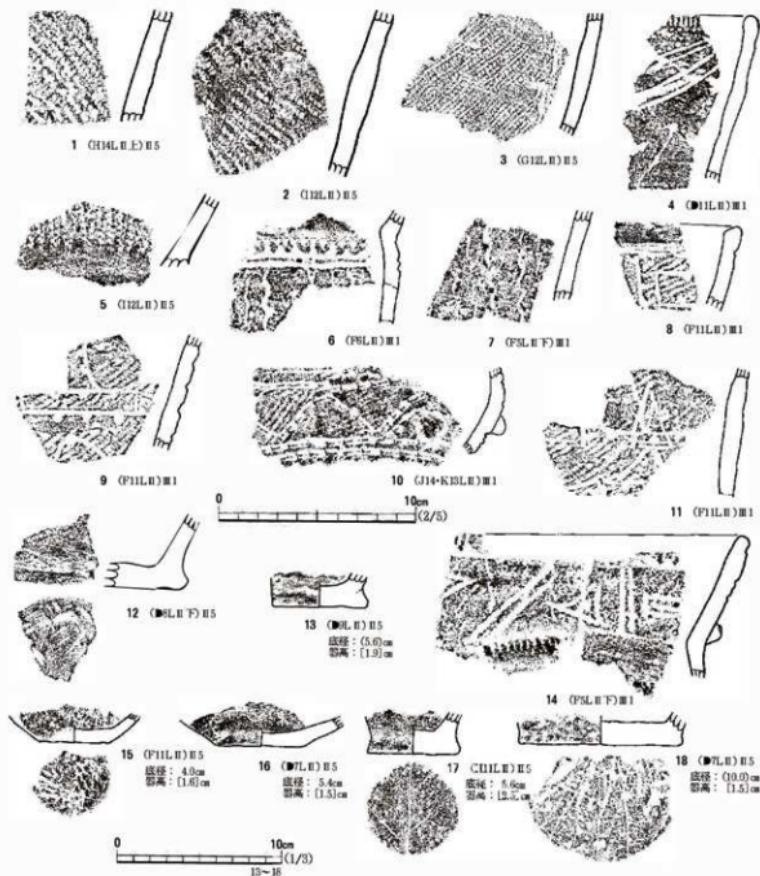


図32 遺物包含層出土 II群4・5類、III群1類土器

## II群5類土器（図31-4・6～20、図32-1～3・5・12・13・15～18）

本類は、器面に斜行縦文のみを施した深鉢形土器の胴部片と、底部片を一括した。抽出したものについては、図31-4・6～20、図32-1～3・5・12・13・15～18に示した。

図32-12・13・15～18は底部片である。図32-12の底面には、網代編圧痕が認められる。図32-17・18には木葉痕が認められ、その他の底面はヘラ状工具でケズリ・ナデの再調整が施される。

## III群1類土器（図32-4・6～11・14）

本類は、大木7a式土器の深鉢形土器片で、図32-4・6～9・11・14に示した破片がすべてで

ある。6・7は体部に縦の結節回転文を施している。6は頸部に交互刺突文を施す。8・9・11は同一個体の破片で、斜行縄文地に沈線で曲線および直線の图形を描き、そこに三角文を加えている。10は、器面に斜行縄文地に半截竹管状の工具で2条一組の連続刺突文を施し、その区画内部に山形状に連続刺突文と、円錐形の貼付文を施す。14は、「く」字状に外傾した口縁部片で、頸部に単沈線で刻みを入れた隆線を貼り付ける。口縁部の無文地の上から、沈線で三角形や直線の図柄を描いている。

### Ⅲ群3類土器（図33）

本類は、縄文時代晩期の土器片で、図33に示したものすべてである。1～5は、晩期中葉の大胴C2式に比定される半精製の鉢または深鉢形土器で、口縁端部に刻みを持ち、体部上部に平行沈線を施している。6・9は、晩期後葉の大胴A式に比定される精製土器片である。6は、浅鉢形土器の口縁部片で、コブ状の隆起と隆沈線による工字文を施している。9は、深鉢形土器の口縁部片で、器面に直線的な浮線で三角形や菱形を組み合わせ網目状の文様を施している。7・8・10・11・13・15・16は、粗製の深鉢形土器である。7・8・10には密に、内湾する口縁部をもつ16には粗い櫛文を施している。11・13・15には、網目状撫糸文を施す。12・14は浅鉢形土器の破片で、12は無文地、14には斜行縄文のみを施す。

### Ⅲ群4類土器（図34-1～7）

本類は、弥生時代前期の土器片で、図34-1～7に示したものがすべてである。器形は、5の蓋以外のものは、細片のため器種を特定することが難しいが、壺または壺形土器と考えられる。

1・6は折り返し口縁を持つ破片である。2～4・6は、器面に斜行縄文のみを施している。7は、無文の口縁部片で、横位の沈線を施している。

### 土製品・羽口（図34-8・9、写真10）

小池田遺跡の2次調査区の遺物包含層のLII中から出土した土製品と羽口は、図34-8・9に示したものがすべてである。

図34-8は、キノコ形土製品で、ナデと指押さえで整形されている。上の傘部分はほぼ円形で、平板状を呈する。傘部中央から下へ細身の柄部分が延び、柄の下部には焼成前に1箇所刻みが付けられている。本資料は目黒吉明の分類によれば「Ⅱ類」に比定され、実際の食用キノコとしてハツタケやアミタケなどが想定されている（目黒1997）。あるいは、食の安全のため毒キノコを模倣して作成した可能性は無いかと考えている。所属時期については、LII層から出土していることから縄文時代と考えられるが、特定は難しい。

図34-9は、表面採集された羽口の吸気部小片で、復元すると吸気部外径は約7cmほどである。1・2次調査区内からは製鉄炉などは確認できていないため、調査区から谷筋に沿って200mほど北西おいて新たに発見した製鉄遺跡に関わる遺物の可能性が高い。時期については、平安時代と考えられる。

（阿部）

第2編 小池田遺跡（2次調査）

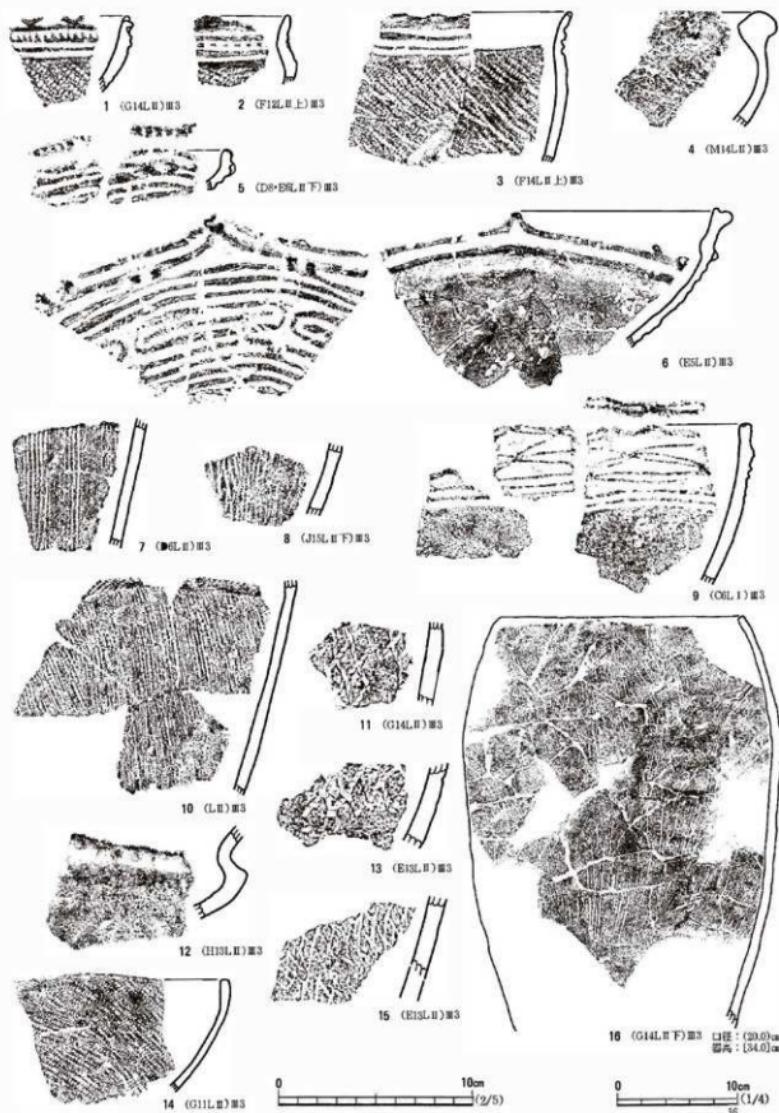


図33 遺物包含層出土Ⅲ群3類土器

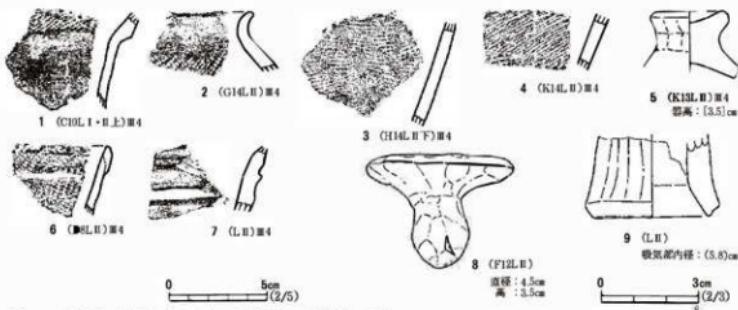


図34 遺物包含層出土III群4類土器、土製品、羽口

## 石器・石製品（図35～38、写真10）

小池田遺跡の2次調査では、遺物包含層から石鎌、石錐、石槍、石匙、削器、磨製石斧(刃部磨製石斧)、打製石斧、矢柄研磨器、石包丁未製品、磨石、二次加工のある剥片、块状耳飾が出土した。

## 石 鎌（図35-1～18）

図35-1～18に、2次調査で出土した石鎌のうち18点を示した。他にも欠損品3点が出土しており、合計で21点になる。石材別に見ると珪質頁岩4点、頁岩4点、黒色頁岩1点、流紋岩2点、無斑晶質流紋岩6点、ガラス質安山岩3点、片麻岩1点である。出土点数における未製品の割合は、19%である。2次調査では、凸基有茎鎌と凹基無茎鎌が出土した。石鎌の分類については、「第1編第2章第7節 石器・石製品」で示した内容に当てはめると、a類、b(b2～b6)類に比定できる石鎌が認められた。

a 類 図35-1は凸基有茎鎌で、a類に該当する。a類に属する石鎌は、本遺跡ではこの1点のみである。背面は、器面中央に棱が残るよう整形されているため、最も幅広になる部分の横断面形は菱形状を呈する。両面に、細かい調整剥離が認められ、茎部の横断面形は菱形状である。

b 類 b1類は、2次調査区から出土していない。b2類は、図35-11～14に示した4点と、図示していない欠損品1点を含め合計5点が該当する。13は基部の湾曲がほとんどなく、平基無茎鎌に近い形状をしているもので、粗質な石材で作られている。

b3類は、図35-3・6・9・10に示した4点が該当する。10は、b3類の中でも基部の抉りが浅い石鎌である。b3類は、左右の棱が丸みを帯びる傾向の強い一群であるが、唯一9だけは左右の棱が内湾するような形状を呈する。

b4類は、図35-2・4・5に示した3点が該当する。4は、基部の抉りが直線的に開く点が特徴的な石鎌である。

b5類は、図35-8に示した1点と、図示しなかった欠損品1点、合計2点が該当する。8は長脚鎌で、b5類の中でも特に基部の抉りが深い。欠損品も8と同様な形態をしている。1・2次調査

## 第2編 小池田遺跡（2次調査）

の16類石器を石材別に見ると、珪質頁岩4点、黒色頁岩1点、ガラス質安山岩1点となり、緻密な石材を用いている点が特徴として認められる。

16類は、図35-7に示した1点が該当する。7は、先端と抉り部にのみ入念な調整が行われ、器面中央に素材面を大きく残し、1次調査で出土した16類の石器とは若干異なる様相を示している。

図35-15～18の4点は石器未製品であり、分類の対象としていない。いずれも調整剥離が器面中央にまで及んでおらず、肉厚な状態である。17・18は、製作途中で折れてしまったものと考えられる。また、図示しなかった欠損品のうち1点は、基部を欠損し分類できなかった。

### 石 錐（図35-19・20）

石錐は、図35-19・20に2点を示した。2次調査区の遺物包含層から出土した石錐は、この2点のみである。19は、錐部が三角形状に加工されており、基部に向かって幅広になる不整な菱形状の平面形をしている。両面に比較的丁寧な調整剥離が認められ、錐先が鋭く作り出されている。最も幅広になる部分の横断面形は三角形、錐部の横断面形も三角形を呈する。石材として、片麻岩が用いられている。20は、細く棒状に加工されており、つまみはない。錐部では、両面に細かい調整剥離が加えられているが、先端が丸みを帯びているため、鋭さに欠ける。基部への調整剥離は簡素で、錐先の横断面形は菱形である。石材には、無筋品質流紋岩が用いられている。

### 石 槍（図35-21）

石槍は、図35-21に示した。図示していないが、他にも流紋岩の未製品が1点出土している。21にはつまみを設けているが、全体的に厚みがあり、横断面形が肉厚な凸レンズ状を呈するので有舌の石槍と判断した。両面に細かい調整剥離が確認できる。基部となるつまみ部分にも丁寧な調整剥離が認められるが、抉りは比較的弱い。石材には、珪質頁岩を用いている。

### 石 匙（図36-1・2）

石匙は、図36-1・2に2点を示した。2次調査区の遺物包含層から出土した石匙は、この2点のみである。どちらも珪質頁岩製の縦形石匙で、長軸上につまみが付く。1は、つまみ部分が欠損している。細長く薄い剥離痕が並列し、精緻な調整剥離が両面に認められる。刃部の横断面形は凸レンズ状である。2は、下半分が欠損している。つまみ部は、両面からの丁寧な調整剥離で、両側が抉れるように作り出されている。背面は、側縁部を中心に細かい連続した調整剥離が加えられており、中心部に素材剥片の第一次剥離痕を残している。腹面は、右側縁のみに調整剥離が認められる。刃部の横断面形は、薄い台形状である。

### 削 器（図36-3～9）

削器は、図36-3～9に7点を示した。2次調査区の遺物包含層から出土した削器は、この7点のみである。石材別に見ると珪質頁岩4点、頁岩2点、白色珪質岩1点である。3は、左右側縁に調整剥離を加え、下端部に鋭い両刃の刃部を作り出している。横断面形は三角形状である。4は、縦長剥片の先端に弧状の刃部を作り出している。5は、背面の右側縁と腹面の右側縁に調整剥離を加えて、鋸齒状の片刃の刃部を作り出している。横断面形は凸レンズ状である。6は搔削器で、背

面左側と右側縁上部が欠損している。背面右側縁に調整剥離が認められ、片刃の刃部となっている。背面中央部には自然面を大きく残し、背面下部縁辺には整形剥離が確認でき、角度60°の傾斜の急な刃部が作り出されている。横断面形は平行四辺形である。7は、縦長の素材剥片の背面左側縁に、簡単な調整剥離を加えて片刃の刃部を作っている。横断面形は三角形で、刃部の角度が特に鋭い。8は、石錐のような形態をし、両面に細かな調整剥離が加えられた石器で、両刃の刃部を作り出している。横断面形は凸レンズ状である。9は欠損しているが、両面全体に調整剥離が加えられていることが分かる。基部形状は8と同形状であったと考えられ、横断面形は凸レンズ状を呈する。

#### 磨製石斧・刃部磨製石斧(図37-1~3)

磨製石斧は、図37-1・3に2点を示した。2次調査で出土した磨製石斧は、この2点のみである。1は蛇紋岩製の磨製石斧で、基部が欠損している。全体が丁寧に研磨され光沢を帯び、両面・側面との間に明確な稜が形成されている。刃部は、弧を描くような形状で、刃部先端に磨滅が認められ、背面側で特に顕著である。縦断面形を見ると、腹面側で若干膨らみが大きく、背面側はやや平らになるような形状をしている。横断面形は、楕円形を呈する。3は、細長い隅丸台形状を呈する大形の磨製石斧である。全体が丁寧に研磨されているが、両面と側面との間に明確な稜は作り出されていない。基部先端には、原石を粗割した際の敲打痕が残っている。刃部は、左側縁から右側縁に向かって、弧を描きながら緩やかに上がっていくような形態をしている。刃部先端に磨滅が認められ、使用痕と思われる。横断面形は楕円形を呈する。石材は輝緑岩で粗質である。

刃部磨製石斧は、図37-2に示した。2次調査で遺物包含層から出土した刃部磨製石斧は、この1点のみである。石材は、粘板岩の偏平な自然礫である。自然礫の形状は細長い卵形で、幅広な方の先端を研磨し、弧状の刃部を作り出している。礫の両面が研磨されており、両刃石斧となっている。刃部を観察すると、仕上げ時に加える細かい研磨痕の他、最初に大まかに整形した際の粗い研磨痕も確認できる。横断面形は、楕円形である。刃部先端に磨滅が認められる。

#### 打製石斧(図37-4・5)

打製石斧は、図37-4・5に2点を示した。2次調査区の遺物包含層から出土した打製石斧は、この2点のみである。ともに粘板岩製で、10cmにも満たない小形のものである。4は偏平な自然礫を素材とした、擦形の打製石斧である。板状礫の両側面を断ち切り、平面形の両側縁が直線的になるように整形剥離を加えられ、両面中心部には自然面を大きく残す。両面の下側縁に調整剥離を加え、両刃の刃部を作り出している。横断面形は、隅丸長方形である。5は、上半分が欠損している。背面の下側縁を中心に調整剥離が認められ片刃の刃部が作り出しており、腹面には調整剥離が見られない。横断面形は、凸レンズ状である。

#### 矢柄研磨器(図37-6)

矢柄研磨器は、図37-6に示した。2次調査で遺物包含層から出土した矢柄研磨器は、この1点のみである。偏平な砂岩自然礫の表面と右側面に、溝状の細長いくぼみができた石器である。敲石としても使われたようで、敲打痕で溝が壊されている部分もある。表面に2条、右側面に1条の溝

第2編 小池田遺跡（2次調査）

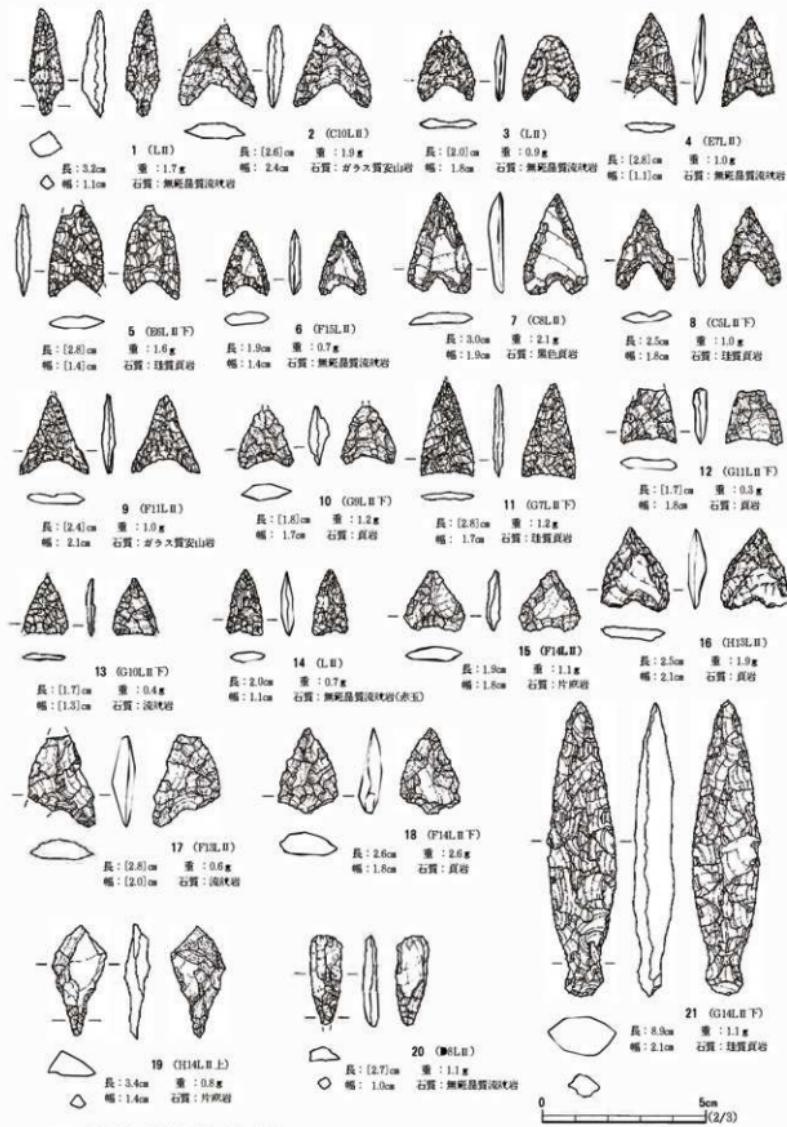


図35 遺物包含層出土石器（1）

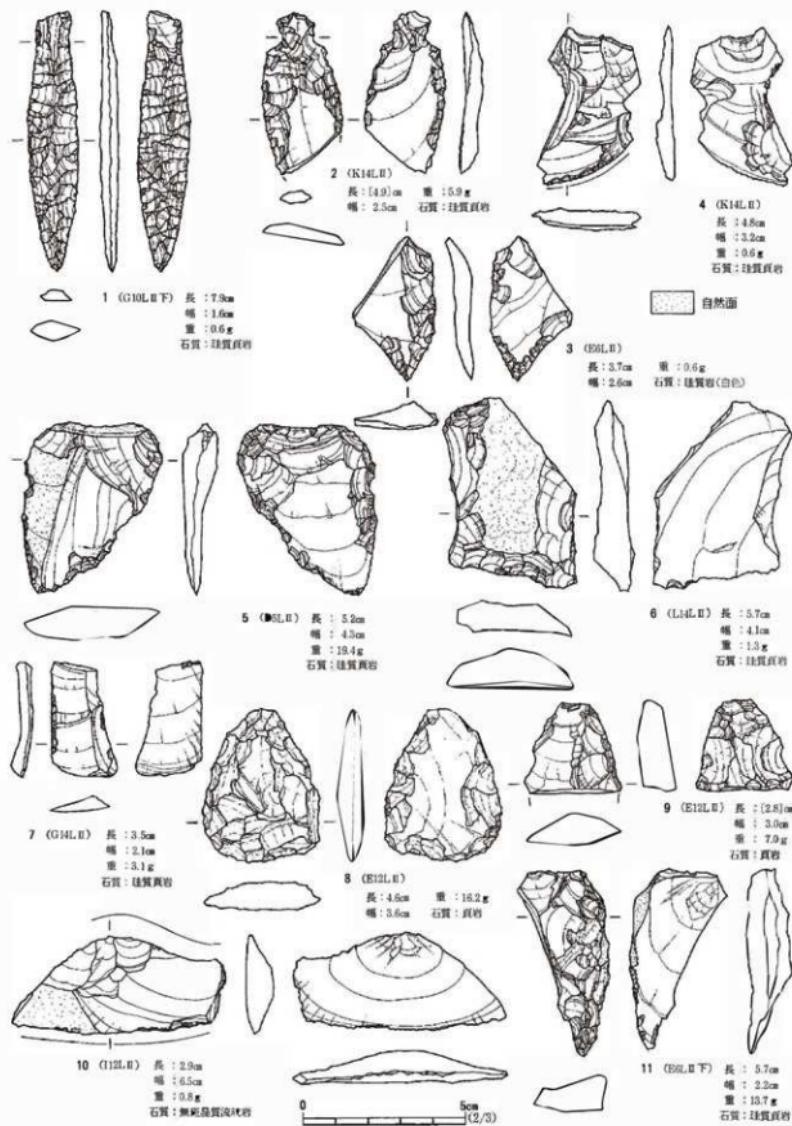


圖36 遺物包含層出土石器（2）

第2編 小池田遺跡（2次調査）

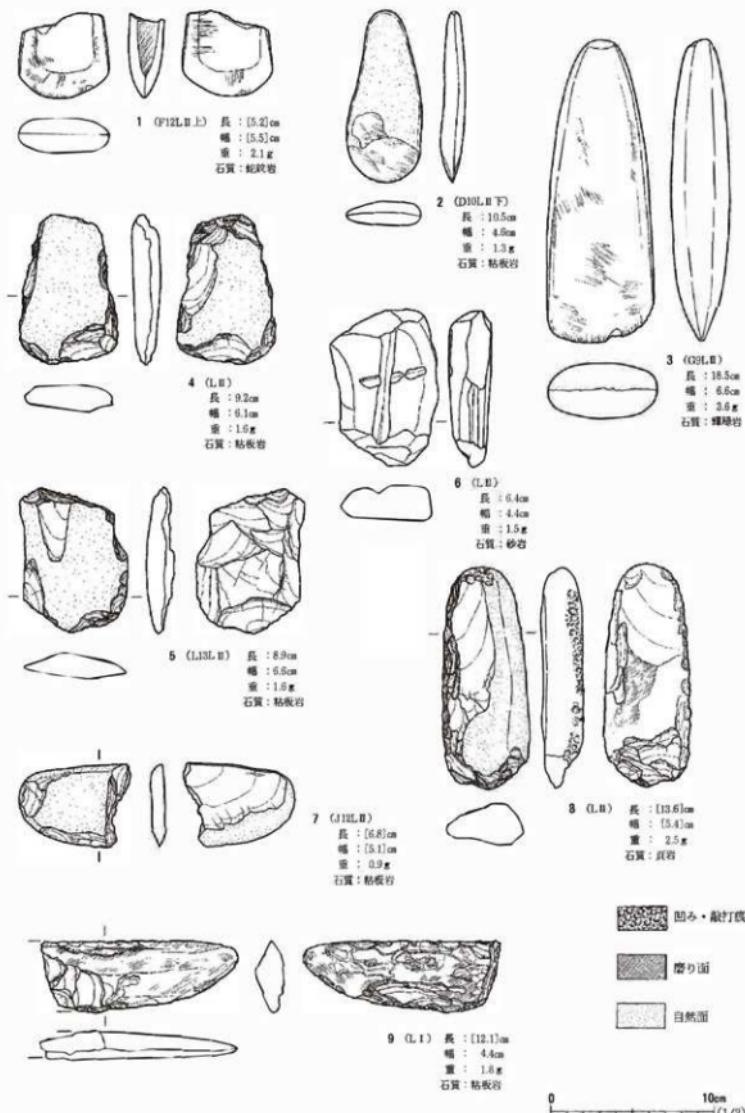


図37 遺物包含層出土土石器（3）

を確認した。表面の溝は、横方向に走る溝の方が古く、縦方向に走る溝の方が新しい。縦方向の溝は深く、「V」字状に抉れている。右側面の溝は浅く、上半分が敲打痕で壊されている。裏面には自然面を残し、左側面には大きなガジリがある。石器の横断面形は、不整な長方形状を呈する。

#### 石庵丁未製品（図37-7・9）

石庵丁未製品は、図37-7・9に、2点を示した。

2次調査区の遺物包含層から出土した石庵丁未製品は、この2点のみである。どちらも粘板岩製である。7は、半分が欠損しているが、橢円形の偏平な自然疊を用いて作られていることが分かる。背面の下側縁に調整剥離を加えて、片刃の刃部を作り出している。縦断面形は、凸レンズ状である。9は、半月形の偏平な自然疊を用いて作られている。調整剥離は背面のみに認められ、7と同様に片刃の刃部を作り出している。縦断面形は、不整な菱形状を呈する。

#### 磨 石（図37-8）

磨石は、図37-8に示した。2次調査区の遺物包含層から出土した磨石は、この1点のみである。石材には、橢円形をした偏平な頁岩自然疊が用いられている。表面の中央左寄り部分に磨り面が確認でき、その磨り面を切るようにして敲打痕が形成されている。また、背面左側縁から下部縁辺にかけて、剥離が認められる。横断面形は不整な菱形を呈している。

#### 二次加工のある剥片（図36-10・11）

二次加工のある剥片は、図36-10・11に2点を示した。10は、横長剥片に微細剥離が認められるものである。末端縁辺と打面に、微細剥離が認められる。末端縁辺には両面からの微細剥離が見られ、その結果縁辺は角がとれて丸みを帯び、縦断面形は隅丸台形状である。11は、打面再生剥片である。腹面の右側縁下部に微細剥離が認められ、石材は被熱している。横断面形は台形状である。

#### 玦状耳飾（図38-1・2）

玦状耳飾は、図38-1・2に2点を示した。2次調査区の遺物包含層から出土した玦状耳飾は、この2点のみである。ともに滑石製の欠損品である。全体に研磨が施されている。1は、偏平な円形に整形されており、中央よりやや上側に穿孔されている。下端から穴への切り込みは、背面の側から磨り切られている。横断面形は隅丸方形で、やや角ばった形状である。欠損面にも研磨の痕跡が認められる。2は、遺存度の低い欠損品であるが、偏平な隅丸方形に整形され、ほぼ中央部に穿孔されていたものと考えられる。下端から穴への切り込みは、擦切技法で行われたものと思われ、切断面が山形を呈する。横断面形は橢円形で、丸みを帯び、欠損面に加工は認められない。（今野）

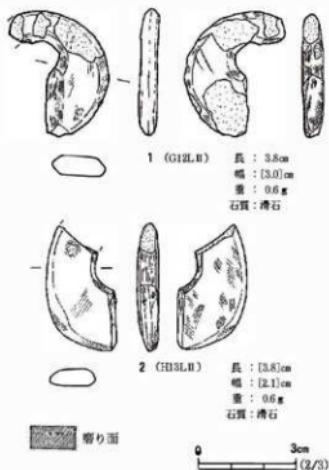


図38 遺物包含層出土石製品

## 第3章 まとめ

この章では、新田川北岸にある舌状に張り出した丘陵平坦面上に立地した小池田遺跡（第1・2編）についてまとめてみる。小池田遺跡で確認できた遺構数は、1・2次調査合わせて竪穴住居跡4軒、土坑15基、木炭窯跡2基、集石遺構3基、焼土遺構1基、特殊遺構3基そして遺物包含層3,800m<sup>2</sup>である。出土した遺物は、1・2次調査合わせて縄文・弥生土器片6,043点、土製品・羽口2点、石器2,081点、石製品7点を確認した。今回の発掘調査で所属時期の明らかにできた遺構は、縄文時代前期前葉・中葉、古代における痕跡である。今回発掘調査を行った丘陵平坦面の範囲は、30mの幅を維持し、さらに110mほど西へ延び、未調査の範囲にも遺物包含層であるLIIが確実に続いている。

### 遺物について

#### 大木4式土器

小池田遺跡からは、縄文時代早期中葉から前期前～中葉、中期初頭、後期前葉、晩期そして弥生時代前期の大木4式土器が出土している。このうち、主体を占めるのが土器分類の「II群3類」とした縄文時代前期後葉の大木4式土器である。また、これに併行する「II群2類土器」とした諸磈式および浮島、興津式土器もごく僅かに出土している。以下に、土器型式別にその諸特徴を整理する。

出土した「II群3類土器」とした大木4式土器について見てみる。II群3類土器の出土破片数は、I～III群土器とした縄文土器の中で最も多く、出土土器の大半が本類の土器で占められている。土器の形状は、その大半は深鉢形を呈し、第1編図17-4に示した1個体だけが壺形を呈している。深鉢形土器の器形の特徴について整理すると、資料の大半が破片で不明な点も多いが第2編図7-9に示した土器の形状・大きさであったと考えている。中には第1編図17-3に示したように、口径が44cmを越える大型の深鉢も認められる。口縁部形状は、平口縁がほとんどで中には小突起（1編図6-18、図14-10、2編図8-12、図28-2～7、図29-14）が施されるものも認められる。口縁端部には刻みを施すものが多く見られる。胎土中には砂粒を少量含み、色調は橙色または黄褐色を呈している。

内面の調整を見てみると、口縁部から胴部上位にかけて、ヘラ状の工具で横方向に削り調整を施したような痕跡が特徴である。以下に整理したように外面調整のさまざま相違はあっても、内面調整はほぼ同じ手法が認められ、後述する浮島式・諸磈式土器との内面調整の違いが明瞭である。

外面の調整について見てみると、口縁部無文帶と胴部文様帶とに分かれ、第1編第2章第7節および第2編第2章第5節において前述したように、文様の観点から「a～e種」の四つの文様の特徴を見出すことができた。以下、外面調整の手法ごとにまとめる。

a種 出土した破片の多くは、「a種」とした文様で、口縁部と胴部との区画文様として多段の

結節回転文を横位に施している。

b 種 次に多く認められた文様は、「b種」としたもので、沈線文で文様を描くことを特徴とする。沈線文には、1条の沈線のみで施文するものと、2条一組の沈線で施文する2種類がある。沈線文は、その多くは口縁部無文帯の間に施文されるもののほかに、量的に多く無いが斜行縞文地の上から直接沈線文を施した土器(1編図16-8・16・18・20、図17-1~4、2編図7-1・2、図28-20・24、図29-5)も認められる。沈線で描かれる文様の大半は、口縁部文様帶に塗列または一条の波形の緩やかな波状文と、曲線文または縦位の結節回転文と組み合わせ施したもので占められている(1編図6-2、図16-17、2編図7-3~7・9、図13-2・3、図28-6・7・21~26、図29-1~6)。出土量は多くないが、口縁部文様帶に描かれる沈線文様は、縦の波線(1編図18-2・7・10、2編図6-16、図28-2~4)、縦の山形文(2編図6-20)、「8」字状(2編図28-1)、渦巻文(2編図6-6)、長方形または三角形状の区画文(2編図7-1・2、図28-12・13)などの幾何学的な文様(1編図18-3~5・8、2編図6-7~15、図28-8~11・14・16~20)などが見られる。

c 種 「c種」とした土器片は、粘土の貼付による文様を特徴とし、第1編図18-19と第2編図29図に示した合計38点がすべてで、出土破片数は前述した「a・b種」に比べて少ない。貼付文には、粘土紐を貼り付けたもの(c1・c2種:1編図18-13~24・26~30、図19-1~4、2編図8-9・10・12、図29-7~9・11~15・18~21)と、ボタン状の粘土を貼り付けたもの(c3種:1編図18-25)の2つに分かれる。粘土紐を用いた胴部の貼付文として施文したものには、粘土紐上に刻みを持つもの(c1種:1編図18-1~4、2編図29-16・17・22)と、そうでないもの(c2種)の2つに分けることができ、前者の出土破片数は、後者に比べて少ない。貼り付けられた粘土紐の断面を見ると、器面へのナデ付けが不十分であるため、断面形が扁平な楕円形を呈している。刻みのある粘土紐を胴部上半または口縁部直下の貼付文(c1種)の図柄は、直・曲線文(1編図18-1~4、2編図29-16・17)や、口縁部に平行って貼り付けたもの(2編図29-22)が認められる。

刻みを持たない粘土紐(c2種)を用いた図柄は、4種類ある。1本の粘土紐を口縁部下に平行させ波状に貼り付けるもの(1編図18-22・24・30、図19-2・3、2編図9-9、図29-7・8・11・12)、口縁部直下に真っ直ぐな粘土紐を1本貼り付けるもの(1編図18-17・21)、縦に波状の粘土紐を貼り付けるもの(1編図26~28、2編図8-12、図29-9・14)、二重の弧状に2本の粘土紐を貼り付けるもの(2編図8-10)である。また、刻みを持たない粘土紐による文様には、波状に整形した長さ10cm程の粘土紐を、口縁部端部にだけ貼り付けたもの(1編図18-13~16・18~20、2編図8-9・10、図29-15・18~21)や、第1編図18-21・22のように胴部の貼付文と組み合わせたものも認められる。

d 種 「d種」とした土器片には、「a~c種」以外の特徴が見られる土器を括した。「d種」と判断した土器片の大半は、器面に斜行縞文が見られることから、「a~c種」を含めた出土点数は最も多くなる。それ以外に、無文の口縁部(1編図18-8)、半截竹管状の工具を用い断続的に刺突文を施したもの(1編図18-5・6、2編図29-10)など、わずかに認められる。第1編図18-1・6・9の土器片は、胴部の斜行縞文の上から縦に結節回転文を施すものの、口縁部無文帶に至ると第2編図28-7のよう

に複列の波状沈線文と組み合わせて施文していた可能性が高い。

#### 大木4式併行期の土器

II群2類土器とした深鉢形土器片(1編図13-6~23, 2編図6-1~5, 図26・27)は、関東地方北・東部に主に分布する浮島式、奥津式土器、そして関東地方南・西部に見られる諸磲<sup>b</sup>式土器に比定されるものである。これらの土器が、東北地方南部に分布する大木4式土器(II群3類土器)の中に僅かに混在している状況が確認できた。II群3類土器の破片数は、1・2次調査時の出土点数を合わせても60点ほどで、そのほとんどを第1・2編の図中に示している。本類の土器型式別の出土点数は、「浮島式土器>諸磲<sup>b</sup>式>奥津式」の順となり、奥津式土器については第1編図13-16の1点のみである。大木4式土器の出土点数と比べると、本類の出土点数はその1割にも達しない程度であることから、関東圏の影響を受けた土器が小池田遺跡内に客体的に混在していた様相が認められる。このように大木4式土器に比べ関東圏の土器が僅かに混在する様相は、福島県浜通り地方中部にある双葉郡富岡町本町西A遺跡(三浦2002)、上本町G遺跡(国井2002)でも認められる。ただし、浜通り地方南部および中部のいわき市綱取貝塚、楳葉町赤粉遺跡、浪江町朴廻B遺跡などでは、在地の大木式土器の出土割合に比べ、関東地方東部の影響を受けた浮島式土器が多く出土している。

以下、第1・2編中で前述した内容に合わせて浮島式を「a種」、諸磲<sup>b</sup>式を「b種」、奥津式を「c種」として、土器型式別に整理する。

a種 第1編図13-6~15、第2編図6-1~5、図26に示した土器が、浮島式土器に比定される。土器の形状は、すべて深鉢形を呈している。口縁部形状は、その多くは平口縁(1編図13-8・9・11・13、2編図6-1・2、図26-5・7・8・14~19)で、他に波状口縁(1編図13-6・7・10、2編図6-5、図26-8)を呈するものも認められる。胎土中には砂粒を少量含み、色調は橙色または黄褐色を呈している。胎土・色調は、共に前述した大木4式土器と概ね同様であった。

内面の調整は、破片の多くは摩滅し、ナデ調整以外に認められないが、第2編図26-14のように内側の遺存状況が良好なものを観察するとヘラミガキを施している。内面調整を比べると、大木式との違いが明瞭である。

外面の調整を見ると、文様の特徴から型式を細分することができる。第1編図13-14・15と第2編図26-2~4・6・7・9・10・19は、浮島II式土器に比定される。7・9・10の口縁部上端には、斜位の条線を施している。器面には、変形爪形文と共に2本一組の平行沈線を組み合わせた文様(1編図13-14・15、2編図26-2~4・6)が多く認められ、他に爪形文(2編図26-9・10)、口縁部の輪積み痕の上に複列の刺突文(2編図26-19)を施したもののが認められる。

第1編図13-6・10~12と第2編図26-8・11~18は、浮島III式土器に比定される。第2編図26-8・12~14の口縁端部には縦位の条線帯を施している。器面には、体部に貝殻の最も上端に当たる部位を用いて、口縁部に平行させ貝殻文を施したもの(1編図13-10~12、2編図26-8)や、半截竹管状の工具で刺突文を口縁部に平行させて施したもの(1編図13-6、2編図26-11・15)、半截竹管状の工具を用いた刺突文(2編図26-12・14)、貝殻の口部分を用いた波状の貝殻文(2編図26-13・18)、半

截竹管またはヘラ状の工具で貝殻文を模倣した文様(2編図26-16・17)が認められる。

上記以外のものは、浮島IまたはII式土器の胴部破片と思われ、器面には半截竹管状の工具で平行沈線文のみで文様を描いている(1編図13-7~9・13~15、2編図26-1)。

b 種 第1編図13-17~23と、第2編図6-5、図27-1~3は、諸磯b式土器に比定される。形状はキャリバー型を呈していたと考えられる。胎土には砂粒を少量含み、色調は赤褐色を呈し、浮島式や大木式との違いが明瞭である。内面の調整には、ナデまたはヘラミガキを施している。

外面の調整は、細い粘土紐を貼り付けた浮線文を特徴とするものが多い。浮線文には、粘土紐上に刻みの有るもの(1編図13-18・19・21・22、2編図27-1~3)と、無いもの(1編図27-4)で2種類が認められる。次に、爪形文で圓形を描くものも認められ(1編図13-17・20、2編図27-5~7)、第2編図27-5~7では木葉文や三角文を描いている。他に斜行縄文地の上から、2本一組の平行沈線で文様を描いている(1編図13-23、2編図27-8・9)。

第2編図6-18・19は、諸磯a式土器に比定される口縁部片である。

c 種 第1編図13-16の1点は、興津式土器に比定される。器面には、5本1単位の櫛齒状の工具で擬似貝殻文を施している。

#### 石器・石製品について

小池田遺跡の1・2次調査において遺構内外から出土した石器・石製品の総点数は2,081点である。このうち、7割以上は遺構以外から出土した。出土した石器は、石鐵などの剥片石器、剥片、石核、磨製石器、打製石器、礫石器に大別される。このうち、石鐵の形態は、ほとんど凹基無茎鐵で、縄文時代前期の所産と考えている。1点だけ有茎鐵(2編図35-1)が出土している。石鐵の大半が、遺物包含層としたI・IIより出土している。他に、同じく遺物包含層から7点の块状耳飾が出土している。いずれも滑石製で、完全な形を残したものは1つも認められなかった。

表1に示した石器の石材組成について見てみると、剥片石器、剥片、石核などの石材は、多い順に珪質頁岩、珪化木、頁岩、流紋岩が利用されている。磨製石器には、粘板岩、輝綠岩、蛇紋岩が利用されている。打製石器には、粘板岩、頁岩が利用されている。礫石器には、主に砂岩、粘板岩、ディサイトが利用されている。そして、石製品には耳飾の材料として滑石が用いられている。小池田遺跡における剥片石器、剥片、石核の石材組成を割合で示した表1から分るとおり、最も出土量の多い石材は、珪質頁岩(17%)となり、珪化木、頁岩、流紋岩がほぼ同程度の割合(10~12%)であることから、珪質頁岩を主として利用し、それを補完するように頁岩などを石材として用いていることが分かる。珪化木については、中央の樹液が化石化し鈍色を呈した玉髓を狙って、乳白色の外皮に当たる部分を打ち欠いている。また、珪質頁岩については、製品もしくは素材剥片として、福島県福島市や山形県米沢市近郊などの他地域から本遺跡に持ち込まれたと考えられる。

本遺跡において特に出土数の目立った珪質頁岩のように浜通り地方以外から搬入されたと思われる石材の種類は、表1をみると約18%を占めており、全体量から比較すると搬入石材ばかりを頼りに石器作りを行っていたという感じではなかったようである。一方、表2に示した礫石器の石材利



でナイフ状の機能を備えるものや、二次的な加工を経て施したもの、または石鑿などの素材剥片や石核も併せて計上している。ただし、石核の出土量は、2次調査区の表土剥ぎにあたって、遺物包含層(L II)の中層まで掘削し、包含された土器・石器を除去してしまったという調査上のミスがあったことを考慮に入れても、「剥片類」の中に含まれる出土量がそれほど多くなかったことが伺える。このことから、小池田遺跡の1・2次調査区内においては、主として石器製作を行っていたことが想定される。剥片類に比べて、石鑿の割合は全体の2.8%、そのほかの定形的な石器の出土割合は1%未満といずれも低い値となっているのも本遺跡の特徴と考えられる。このことから、縄文時代の本遺跡での生活様相が狩猟に重点を置いたものでなかつた可能性が示唆される。

#### 遺構について

##### 大木2式期の大型住居跡

小池田遺跡の1号住居跡は、出土遺物から大木2a式期と考えられる大型の住居跡である。福島県内における大木2a式期の集落遺跡は、数は少ないものの福島県内の三地方に散在している。浜通り地方では、本遺跡の他に南相馬市鹿島区の宮前遺跡と、相馬郡飯館村松ヶ平A遺跡である。中通り地方では、福島市にある宇輪台遺跡、田村郡小野町の西田日遺跡、石川郡石川町の達中久保遺跡の3遺跡が知られる。会津地方では、会津美里町の青宮西遺跡が挙げられる。この内、長軸の長さが6m以上、底面積が22m<sup>2</sup>以上の規模を持った当該期の大型住居跡としては、表4に示した11例が調査・報告されている。

大木2a式期に比定される浜通り地方の遺跡立地を見ると、宮前・松ヶ平Aの2遺跡では、いずれも河川の北岸に位置し、宮前遺跡では上真野川、松ヶ平A遺跡では真野川を眼下に見下ろすことのできる狭い丘陵平坦面(宮前遺跡:標高51m)や、緩斜面上(松ヶ平A遺跡:標高150m)に立地している。また、小池田遺跡のように水の絶える事のない谷地部に面し、舌状に張り出した丘陵平坦面上(標高55m)に立地している例もある。

小池田遺跡で確認した1号住居跡に伴う深鉢形土器(2編図5-12)の文様を見ると、歯齒状工具を用いてコンバス文を口縁部に施文している。この特徴は、大木2a式土器の中でも古い段階の土器群と考えられている(芳賀1983)。この大木2a式の古段階に比定される大型住居跡は、福島県内にお

表4 福島県内の大木2a式期の大型住居跡

No.	遺跡名	所在地	遺構名	底面接続 (長軸×短軸m)	底面積(m <sup>2</sup> )	平面形状	地床炉	出入口	竈床
1			1号住居跡	8.6×4.5	32.46	不整長方形	有	有	
2	宮前遺跡	南相馬市鹿島区	2号住居跡	7.3×3.5	28.47	隅丸長方形	有	有	
3			4号住居跡	6.2×4.4	27.28	隅丸長方形	有		
4	小池田遺跡	南相馬市原町区	1号住居跡	7.5×3.5	28.50	隅丸長方形			
5			2号住居跡	8.28上×3.2	28.24以上	隅丸長方形			
6			4号住居跡	9.63上×2.41上	23.46以上	隅丸長方形	有		
7	宇輪台遺跡	福島市	5号住居跡	11.3×2.8以上	22.66以上	隅丸長方形			
8			7号住居跡	8.4以上×3.2	28.48以上	隅丸長方形		有	
9			15号住居跡	9.83以上×2.41上	23.52以上	隅丸長方形	有		
10	西田日遺跡	田村郡小野町	26号住居跡	6.60上×4.7	31.82以上	隅丸長方形			
11			29号住居跡	6.7×4.0以上	26.50以上	隅丸長方形	有		

いては小池田遺跡の1号住居跡以外に確認されていない。本遺跡からはこの段階の住居跡が単独で確認されている。しかし、当該期の遺構が、西側の未調査区に存在している可能性も十分にあると考えている。この他に大木2a式古段階の住居跡は、松ヶ平A遺跡、達中久保遺跡、青宮西遺跡で確認されているが、いずれも床面積は6~15m<sup>2</sup>前後、長軸長は2.5~4.5m、平面形は隅丸長方形または不整円形状の小型の住居跡である。

一方、宮前遺跡、松ヶ平A遺跡、西田H遺跡の住居跡では、伴出土器にコンパス文が認められず、代わりに沈線で施文し、文様は口縁部付近に集約して描いている。この文様の特徴は、大木2a式土器のなかでも新しい段階の要素として位置づけられている（芳賀1983）。大木2a式の新段階になると、上記の3つの遺跡も同様に、複数の大型住居跡が複数の小型住居跡と一緒に確認される事例が見られる。

#### 大木4式期の遺跡の立地

浜通り地方における大木4式期（縄文時代前期後葉）の遺跡の分布について、主に発掘調査が実施され内容の把握できた遺跡に注目し、その立地について整理してみる。当該期の遺跡としては、飯館村8箇所、南相馬市6箇所、浪江町1箇所、富岡町2箇所、楮葉町1箇所、そしていわき市の1箇所で発掘調査が行われた（表5参照）。

その前に、浜通り地方の地形を概観してみると、西側から阿武隈高地、丘陵、段丘（台地）、平野に区分される。主要な河川は、阿武隈高地に端を発し、東流して太平洋へ注ぎ込む。主要河川の両岸には標高50~80mの段丘または低い丘陵が形成され、さらに幾つもの支流沿いにも段丘が形成されている。そして、主要河川の河口および支流との合流点付近の沿岸に平野が発達している。

表5に示した19遺跡は、標高及び、立地する地形によって、大きく2つに分けられる。まず、●標高140~240mの阿武隈高地内の遺跡、●標高30~80mの低丘陵頂部、河岸段丘面または海岸段丘上の遺跡である。現在のところ、標高30m未満の低い段丘面や平野部、または標高250mを超えるような丘陵地では、当該期の遺跡は確認できない。

まず、標高140~240mの阿武隈高地内の遺跡について見てみる。相馬郡飯館村に位置する8遺跡（表5-Na.1~8）と、南相馬市に位置する4遺跡（表5-Na.9~12）は、標高140~240mの比較的の起伏のなだらかな阿武隈高地内に位置している。いずれも、主要な河川とその支流が近くを流れる場所を選び集落を形成している。飯館村にある8遺跡については、すべて真野川に面した河岸段丘平坦面または丘陵緩斜面上に、南相馬市原町区の西に位置する4遺跡では太田川流域の丘陵緩斜面上に立地している。これら12遺跡から出土する土器の内容を見ると、いずれも在地の大木式土器が占める割合が多く、関東圏の影響を受けた土器が客体的に混在する傾向が伺える。集落跡については、飯館村内の8遺跡のあり方を見ると、羽白●遺跡（Na.4）では最大な住居跡1軒を含む集落跡が確認される。他は、円形を呈した兼軒の小型住居跡が確認できる程度の小規模な集落跡で、それらが主要河川に面した場所に散在している。

次に、標高30~80mに立地する7遺跡（表5-Na.13~19）について見てみる。南相馬市にある立ノ

沢遺跡(№13)は上真野川に面し、小池田遺跡は斯田川の支流に面したいずれも低丘陵頂部の平坦面に位置している。浜通り地方中部の双葉郡浪江町にある朴迫B遺跡(№15)から楮葉町の赤粉遺跡(№18)までの4遺跡は、いずれも主要河川またはその支流に面した河岸段丘面上に立地している。いわき市綱取貝塚だけは、太平洋に面した海岸段丘面上に立地する。当該期の土器については、浜通り地方の中部で内容に変化が見られるようになる。例えば、朴迫B遺跡(№15)、赤粉遺跡(№18)そして綱取貝塚(№19)では、混在する関東圏の土器の中でも特に浮島式土器の破片量が、在地の大木式土器の量を上回るようになることが指摘されている。集落の状況は、阿武隈高地内の状況と同様、礎軒の住居跡からなる小規模な集落が形成される。長大な住居跡が主に確認できるのは、南相馬市～いわき市の間に富岡町の本町西A遺跡(№17)のみである点が注目される。

#### 開放窯型木炭窯跡

1・2号木炭窯跡については、天井部を設げずに土で被覆した開放窯形態とされる木炭窯跡で、木炭を伏焼法で焼成したと考えている。福島県内での類例は、本遺跡の1・2号木炭窯跡を始めとして近年調査例が増加している。平成19年度の当事業団で発掘調査し新たに確認されたものも含めて抽出すると合計27例挙げられる。近年調査が浜通り地方に集中しているためか、確認例も当該地方が大半を占めている。27例に共通する項目を整理した後に分類案を提示してみる。

まず、平面形状に注目すると二形態ある。一つは、表6-№7・10・16・18・21・22の7例で長方形形状に造られ、もう一つは隅丸長方形(表6-№1~6・8・9・11~15・17・19・20・23~27)に造られている。隅丸長方形を呈した木炭窯跡の短辺の上端に注目すると、浪江町朴迫C遺跡や双葉町八房平B遺跡のように、片方の短辺に上端が認められない例がある。これは、表土除去時または検出作業時に壊してしまった、あるいは廃絶時に壊された可能性が高い。本来は、小池田遺跡の例の

表5 福島県浜通り地方における大木4式期の遺跡

地名	遺跡名	所在地	標高(m)	立地	造構	土器型式	文献
1	焼ヶ平遺跡	相馬郡飯舘村	178~150	南へ傾斜する丘陵緩斜面	小型住2	大木4	鉢窓1988
2	岩下向A遺跡	相馬郡飯舘村	160~165	真野川南岸の堅磐平場面	土坑	興津	松本1987
3	羽白C遺跡	相馬郡飯舘村	170	真野川南岸の堅磐平場面	小型住2	浮島,興津,諸説,大木4	鉢窓1988,1989
4	羽白D遺跡	相馬郡飯舘村	160	真野川南岸の堅磐平場面	大型住1,小型住1	諸説,大木4	鉢窓1988
5	宮内A遺跡	相馬郡飯舘村	150	真野川南岸の堅磐平場面	小型住1	浮島,大木4	鉢窓1989,1990
6	上ノ台C遺跡	相馬郡飯舘村	164~160	真野川南岸の堅磐平場面	—	浮島,諸説,大木4	鉢窓1989
7	岩下B遺跡	相馬郡飯舘村	160~170	南へ傾斜する丘陵緩斜面	小型住3	浮島,諸説,大木4	松本1986
8	柏久久道跡	相馬郡飯舘村	190~195	南へ傾斜する丘陵緩斜面	—	浮島,興津,大木4	松本1984
9	五台山B遺跡	南相馬市原町区	228~230	東へ傾斜する丘陵緩斜面	—	浮島,大木4	鉢窓1990
10	羽山B遺跡	南相馬市原町区	150~155	北へ傾斜する丘陵緩斜面	—	大木4	藤谷1992
11	八重光坂A遺跡	南相馬市原町区	145~150	北へ傾斜する丘陵緩斜面	—	大木4	藤谷1992
12	八重光坂B遺跡	南相馬市原町区	150~155	北へ傾斜する丘陵緩斜面	—	浮島,大木4	藤谷1992
13	立ノ沢遺跡	南相馬市鹿島地区	50	上真野川南岸の東へ傾斜り出した丘陵平場面	—	浮島,大木4	吉野2005
14	小池田遺跡	南相馬市原町区	55~57	谷地に挟まれた、南へ傾け出した丘陵平場面	小型住3	浮島,興津,諸説,大木4	第1-2編
15	朴迫B遺跡	双葉郡浪江町	60	南へ張り出した丘陵平場面	土坑2	浮島,大木4	吉野2005
16	上本町G遺跡	双葉郡富岡町	70~74	富岡川右岸に面した丘陵平場面	小型住5,土坑	浮島,諸説,大木4	国井2002
17	本町西遺跡	双葉郡富岡町	50~51	富岡川右岸に面した丘陵平場面	大型住2,小型住3,土坑	浮島,諸説,大木4	三浦2002
18	赤堀遺跡	双葉郡猪瀬町	30~34	井出川左岸に面した丘陵平場面	土坑	浮島,興津,諸説,大木4	宇佐美1997
19	綱取貝塚	いわき市	44~46	太平洋に面した丘陵平場面	土坑	浮島,興津,諸説,大木4	松本1986

ように四方の周壁が必ず認められる。

底面を見ると、二種類が認められる。まず、長軸に沿って浅く幅の狭い溝を1条掘り込んでいるもの（表6-N<sub>1</sub>～9）と、溝の無いもの（表6-N<sub>10</sub>～27）がある。底面溝の状況には二つの様相がある。一つは、底面の溝をそのまま延長させ片方の短辺の上端から外側へ張り出すもの（表6-N<sub>6</sub>～8・9）でもう一つは小池田遺跡の2号木炭窯跡のように底面溝が両方の短辺から外側に張り出すものである。

底面規模のうち短軸長を「1」とした時の長軸との比率を見てみると、底面溝を持つ形態では長軸対短軸の比率が「2:1～4:1」の中で約まっている。底面溝のない形態での比率は、「3:1～6:1」で前者と比べ細長い傾向が伺える。底面積を見ると、いわき市馬場A遺跡（表6-N<sub>25</sub>）と郡山市影遺跡（表6-N<sub>27</sub>）の2例の底面積は12m<sup>2</sup>を超えており、それ以外のものでは底面溝の有無に係わらず3.5m以上9.5m未満内の規模を持つものである。

底面溝の有無に係わらず底面上および覆土中には、焼土粒と一緒に木炭片を大量に包含している。底面および周壁は、熱を受け赤褐色に変色するが、中には双葉町八房平B遺跡や馬場A遺跡のように、窯跡内で還元状態となり、主に底面が青灰色に変色した部位が認められるものもある。

以上の事象を整理すると、開放窯型木炭窯跡と呼称される遺構について、底面溝の有無、平面形状そして張り出し部の有無から以下のように分類し、表6右端に分類した結果を示した。

I群：底面中央の長軸方向に浅く幅の狭い溝を持つ。

1類：遺構の平面形状は、隅丸長方形形状を呈する。

2類：遺構の平面形状が、細長い楕円形状を呈する。

a種：底面の溝が延長し、片方の短辺の上端から外側へ張り出す。

b種：底面の溝が延長し、両方の短辺の上端から外側へ張り出す。

c種：底面に溝が底面のみに見られ、外側へ張り出さない。

II群：底面中央に溝を持たない。

1類：遺構の平面形状は、隅丸長方形形状を呈する。

2類：遺構の平面形状が、細長い楕円形状を呈する。

本遺構の造られる場所を見ると、底面溝の有無に関係なく、二つの様相が認められる。まず、小池田遺跡や浪江町朴廬C遺跡のように丘陵頂部または谷地部の平坦面上に造られるものと、もう一つは、双葉町八房平B遺跡や郡山市影遺跡のように緩やかな斜面上に、長軸方向を等高線に平行させて造っている。また、朴廬C遺跡や南相馬市横大道遺跡と君ヶ沢B遺跡のように、付近に製鉄炉跡や地下式木炭窯跡などの平安時代（9世紀代）の製鉄関連遺跡に隣接して、木遺構が造られている。

また、覆土および底面から採取した木炭の樹種については、表7を見ると「クヌギ節」と「コナラ節」の鑑定結果が多いことが分る。炭材には、主に雜木を利用しておらず、炭材の利用からは地下式木炭窯跡との違いが認められない。

最後に、操業年代については、測定を行った小池田遺跡を始めとした5例の結果があり、西暦に







1 調査区全景

a 調査前調査区遠景(南上空から)  
b 調査区遠景(西上空から)

第2編 小池田遺跡（2次調査）



2 調査区全景、基本土層

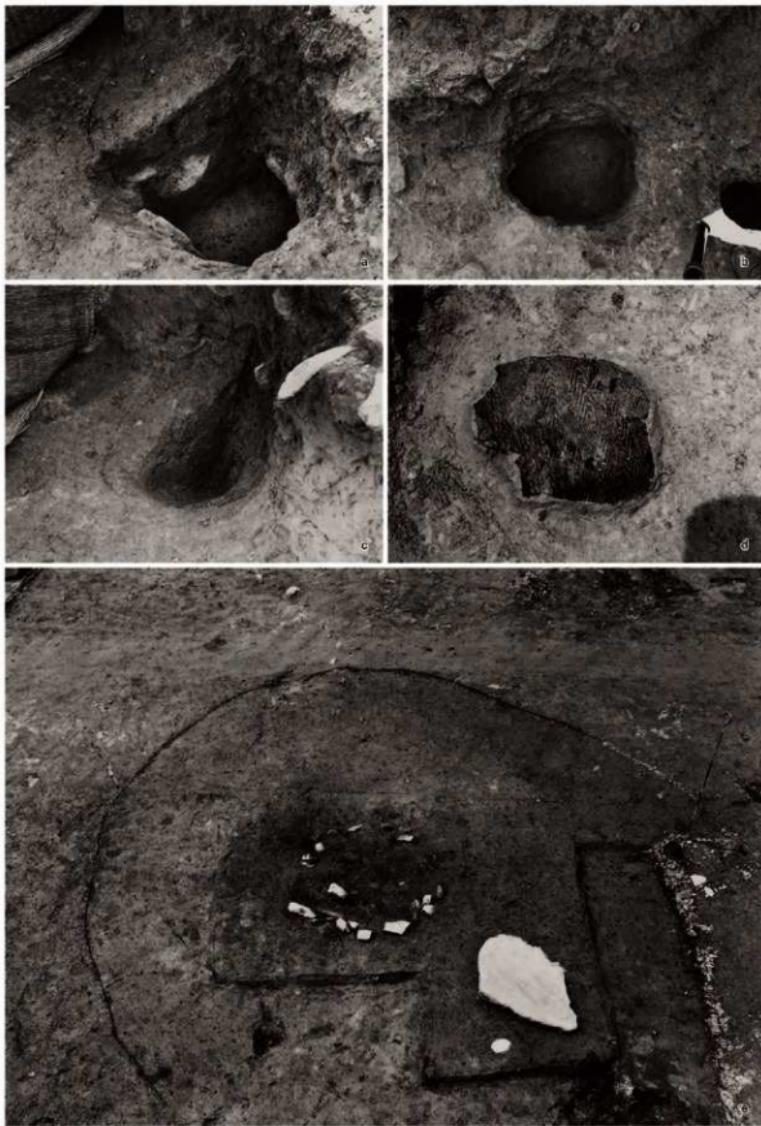
a 調査区遠景（北から）  
b 基本土層1（東から）  
c 基本土層2（東から）



3 1号住居跡

a 全景 (西から)  
b 土層1南側 (東から)  
c 土層1北側 (東から)  
d 土層2 (南から)

第2編 小池田遺跡（2次調査）



4 1・2号住居跡

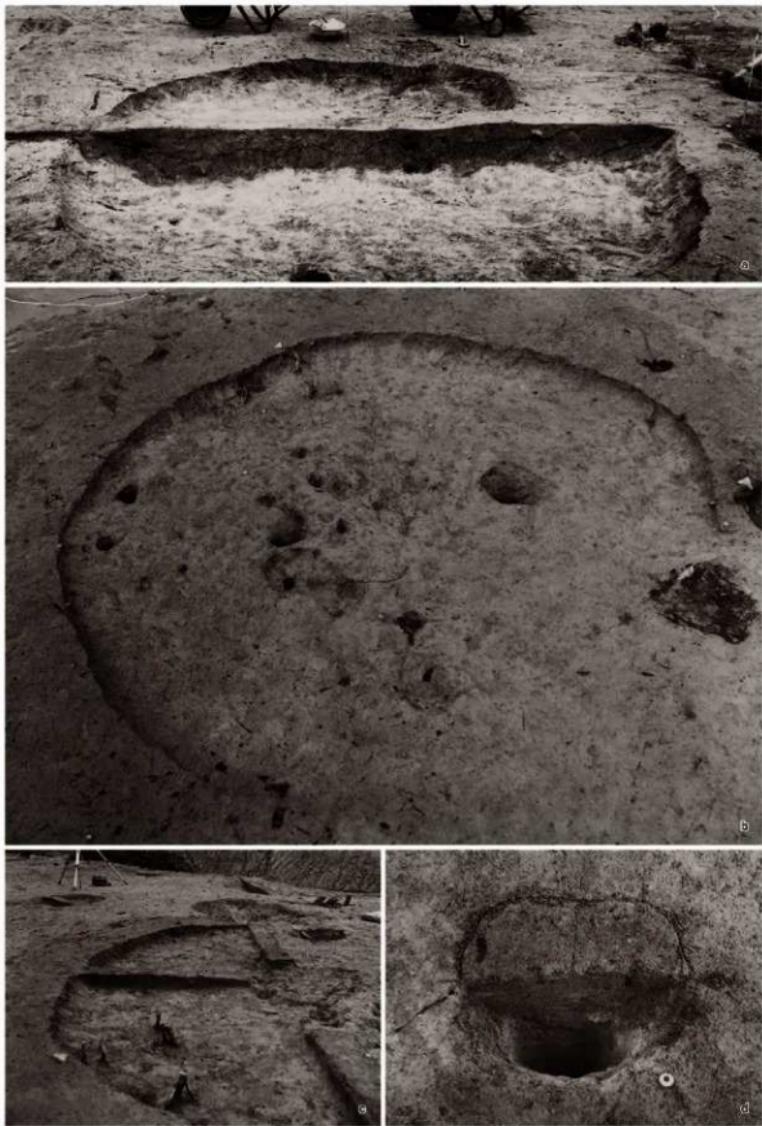
a 1号住居跡 P 1 土器（南東から）  
b 1号住居跡 P 6 全景（北から）  
c 1号住居跡 P 9 土器（東から）  
d 1号住居跡 遺物出土状況（南から）  
e 2号住居跡全景（東から）



5 2・3号住居跡

a 2号住居跡検出状況（東から）  
 b 2号住居跡全景（南から）  
 c 2号住居跡土層1（東から）  
 d 2号住居跡土層2（南から）  
 e 3号住居跡全景（南から）

第2編 小池田遺跡（2次調査）



6 3・4号住居跡

a 3号住居跡土器（東から）  
b 4号住居跡全貌（南から）  
c 4号住居跡土器（南から）  
d 4号住居跡P1土器（南東から）



7 11~17号土坑、作業風景

a 11号土坑全貌（南から）	b 12号土坑全貌（南から）
c 13号土坑全貌（南から）	d 14号土坑全貌（南から）
e 15号土坑全貌（南から）	f 16号土坑全貌（南から）
g 17号土坑全貌（南から）	h 作業風景（南から）

第2編 小池田遺跡（2次調査）



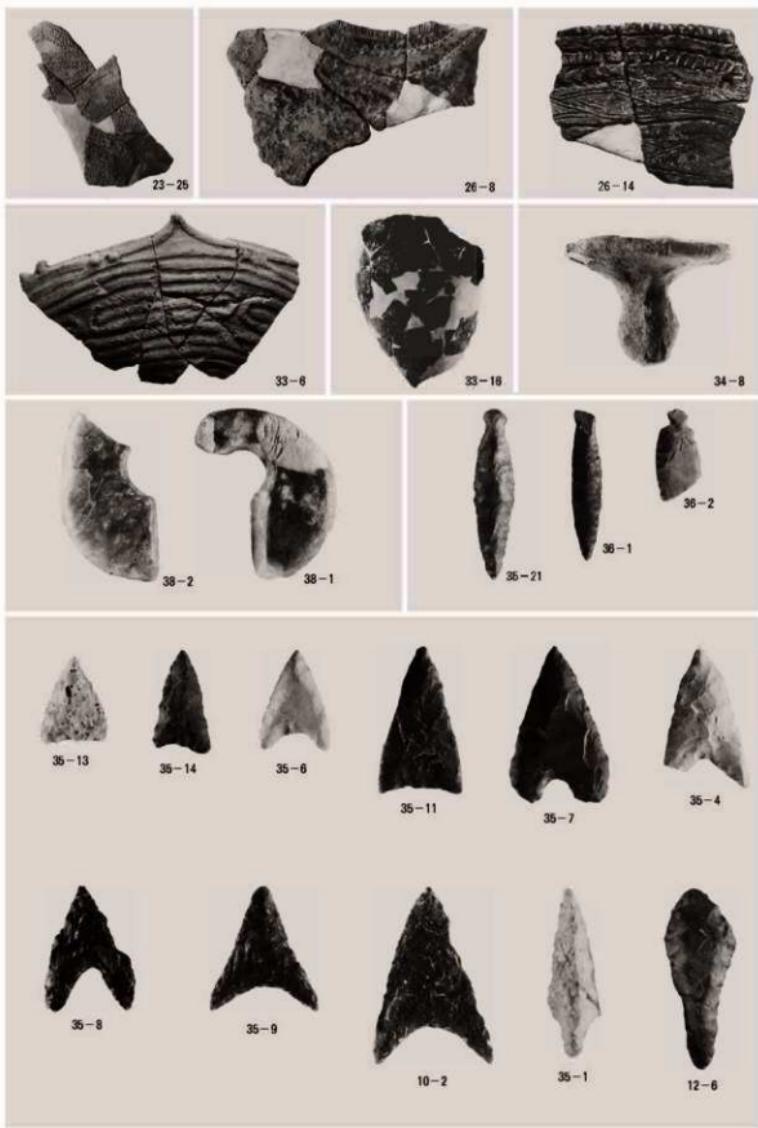
8 1・2号木炭窯跡

a 1号木炭窯跡全景（東から）  
b 2号木炭窯跡全景（南東から）  
c 1号木炭窯跡土礫（南東から）  
d 2号木炭窯跡土礫（南東から）



9 出土遺物（1）

第2編 小池田遺跡（2次調査）



10 出土遺物（2）